

魔導士ルーファス 3

秋月あきら

第一一話 古き魔晶の闇

《一》

在校生や学院で働く者を合わせると、二二〇〇人以上にもなるクラウス魔導学院。

昼休みともなると喧噪はまるで人混み溢れる市場のようだ。

さらに昼の授業がはじまる間近となると、その喧噪は地響きのようになる。

ぎゅるるるるるっ……！

ここにも不吉な地響きが……。

青ざめた顔をしてその場にうずくまってしまったルーファス。

「おなかいい〜た〜いい〜よ〜」

「だいじょぶルーちゃん？」

心配そうな顔をしてビビがいつしよにしゃがみ込み、ルーファスの顔を覗き込んだ。

もうすぐ授業がはじまるというのに、ルーファスのおなかはそれどころではなかった。

午後はじめの授業は召喚室での実習で、授業担当はファウストだった。

ルーファスは召喚の授業はただでさえ温情により、赤点ギリギリのところなのに、ここでファウストの印象を悪くするのは

マズイ。

「トイレに行って遅刻するのもマズイし、授業中におなか痛くてロクに授業が受けられないのもマズイ。

もぎゆるるるる~~~~~!

ルーファスのおなかに限界だった。選択の余地などない。

「ちょっとトイレ行ってくる。先生来ちゃったらどうにか言い訳しておいて……うつつ」

ルーファスはお腹を押さえたまま、前のめりになってゆっくりゆっくりと召喚室を出ていった。

「ルーちゃんだいじよぶかな？」

ルーファスが苦しそうに去った方向を眺めながらビビがつぶやいた。

「彼の胃腸の弱さはいつものことさ。心配していたらこっこの身がもたないよ」

とビビの横に来て言ったのはクラウドだった。

「でも今回はルーちゃんの胃腸のせいじゃないんだよ、だれだってあんなの食べたら……」

なにかを思い出したビビはゾッと顔を青くした。

クラウドが尋ねる。

「なにかあったのかい？」

「聞いてよ、今日ねアタシとルーちゃんとローゼンでお昼食べてただけ」

「うんうん」

「ルーちゃんがローゼンの七味唐辛子たっぷりうどんを間違

って口にしちゃって……。あれはうどんってゆーか、七味唐辛子のところしか口に入れてなかったんだけど」

「まったくルーファスのその手の話は事欠かないね（僕といるときもいつもそうだからな）」

溜め息を吐いたクラウスはふと辺りを見回して、不思議そうな顔をしてビビに尋ねる。

「ところでローゼンクロイツは？」

「あれ、途中までいつしよだったんだけど？」

「まあ彼が突然いなくなるにもいつものことさ。とくに移動教室のときは周りが気をつけてあげないと」

……迷子になるのだ。

キンコーンカーンコーン

授業開始のチャイムがなった。

ルーファスは戻って来られなかった。

しかしファウストも来ない。

先生が来ないことに生徒たちは雑談を続ける。

三分が過ぎ、五分が過ぎ、一〇分になるうとするころ、さすがに心配になってきたビビ。

「どうしたんだろう？」

クラウスも同じように心配した。

「たしかに遅いね」

そして、二人は声を合わせて

「ルーちゃんだいじよぶかなあ？」&「ファウスト先生が遅れるなんて……」

違う心配をしていた。

まん丸な瞳でビビはクラウスを見つめた。

「ええ〜っ、ルーちゃんの心配じゃないのぉ？」

「ルーファスはいつものことさ。それよりもファウス先生が授業に来ないときは、だいたいなにか問題が起こるときさ」

「どーゆーこと？」

「ちょうど先週もあつたる？ ほら、ファウス先生が授業を放り出して古代遺跡に行つてしまつてみんなを巻き込んだことが」

「あーあれね。古代兵器とか言つて大変だつたんだけど、ただの花火だつたんだよね」

「そう、ファウス先生は魔導具などのことになると周りが見えなくなるんだ」

「そんな先生クビにしちゃえばいいのに」

「魔導士としては優秀だからね。それに我が学院には総勢七三人の講師がいて、彼らはみな一癖も二癖もある者ばかり、ファウス先生が特別というわけでもないし、生徒も多いから講師がひとりいなくなるだけでも大変なのさ」

「ふ〜ん」

そんな話をしつつ、また少し時間が過ぎた。

ビビは不安そうな顔をしている。

「まさかルーちゃん行き倒れになつてるかとか!？」

「過去に何度かあつたね、そんなこと」

さらっとクラウスは言った。

「ええ、っ、だったら今すぐ探しに行かなきゃ!!」

「そこまで心配しなくても あっ」

クラウスの話も聞かずにビビは走って召喚室を出て行ってしまった。

「だいたいそれと入れ替わるように、召喚室に紅い衣装を着た女性が入ってきた。」

講師だろうか？

それとも生徒だろうか？

講師の数が多いため、ほとんどの生徒は講師たちの顔を把握していない。異種族や留学生、高年齢で入学してくる者も多い。そのため見た目で判断するのは難しい。

紅い女性は生徒たちを見回した。

「みなさんお静かに、お静かに」

雑談をしていた生徒たちが少し静かになったが、まだざわめきは収まらない。構わず紅い女性は話をはじめた。

「ファウスト先生は急に体調を崩されました、わたくしが代わりにこの授業を受け持つことになりました」

「どうやら講師らしい。」

ただクラウスは少し不思議な顔をしている。

「(あんな講師いただろうか。それと本当に体調を崩したとも限らないだろうな。ファウスト先生が問題を起こしたのを隠している可能性もある)」

クラウスは考えたあと、手を挙げた。

「先生、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「マダム・ラ・モットとても呼んでください」

「失礼ですがラ・モット先生、僕はこの学院の講師はすべて把握しているつもりだったのですが、先生の顔も名前も存じ上げませんが？」

多くの生徒は講師たちを把握していなくても、こういう例外もいる。

ラ・モットはにこやかに微笑んだ。

「本日から赴任してまいりましたから」

「なら僕のところにも書類が来るはずなだけど……」

「あなたのところへ書類が来る？」

「僕も学院の運営関係者のひとりですので、就職者の書類は僕のところにも持つてくるように言っているんですが」

「……そうですか。なにか事務の不備があったのかもしれないですね。ただそれはわたくしの仕事ではないのでなんとかわかりかねますわ、クラウス王」

最後に言葉にクラウスは反応して、爽やかな笑みを浮かべた。赴任してきたばかりで聞いていなかったのかもしれませんが、学院内では王と呼ばないように学院職員には伝えてあります。

ラ・モット先生も僕のことを一生徒として扱ってください」

「それは失礼しました。ではさっそくですがクラウスくん、今日の授業のお手本になってもらいましょう」

「はい、わかりました」

「みなさん授業をはじめます、こちらに注目してください」
早々に授業をはじめめるラ・モット。

召喚室に保管されていた召喚用ペンキの中から、最高級の物を選んでラ・モットは床に魔法陣を描きはじめた。

「みなさんも知ってる通り、召喚術というのは極めて難しい術です。その難しさを緩和するために多くの下準備が必須となるわけです。場所、日時、道具、召喚するものと自分との相性、ほかにもいろいろと要素があります。この学院では三年生から召喚術の実践基礎を学び、今年からみなさんは中級の実践となります。そして五年生で上級、六年生で応用となります。すべての課程を終えたとしても、外に出て召喚が容易に使えるとは限りません。なぜならここで言う召喚はじつに恵まれた環境だからです」

ここでまずは魔法陣を書き終えた。大きさは三〇人ほどが中に入れるほど。

さらにラ・モットはもう一つ魔法陣を描きはじめた。

「本日は二つの召喚を同時に行います。なにかが起きるかはそのときのお楽しみです」

二つ目の魔法陣はすぐに書き終えた。大きさは一人がちょうど入れるほど。

ラ・モットはクラウスに顔を向けて口を開く。

「ではクラウスくん、こちらの小さな魔法陣の中に入ってください。危険ですからなにが起きててもじっとしているように」

「はいわかりました」

言われたとおりクラウスは魔法陣の中に入った。

通常、召喚は呼び出すのであって、魔法陣に入ることは召喚

とは違う術を使うときに多い。

ラ・モットは腕時計を見た。

「あと一分。召喚は相手の都合も考えなくてはなりませんから」
大きな魔法陣が独りでに輝きはじめた。

ラ・モットは微笑む。

「近代における召喚はもっぱら移動手段として使われることが多くなりました。それでも高度で不安定なために一般に普及するほど実用的ではありませんが……五、四、三、二、一」

大きな魔法陣が光の柱を放つと同時に、ラ・モットはクラウドの入った魔法陣に魔力を注ぎ込む。

「出でよ我が忠実なる仲魔となるモノよ！」

ラ・モットがそう叫んだときには、すでに多くの者たちがこの場に呼ばれていた。

大きな魔法陣の上に立つざつと三〇人ほどの魔導士。ロッドなどを構え、戦闘態勢を整えていた。その標的は生徒たち。

クラウドは思わず魔法陣から出ようとした。

しかし、ラ・モットの大声がそれを制止させる。

「動くなクラウドス！」

「ッ!？」

瞬時にクラウドスは動きを止めた。

ラ・モットの視線はクラウドスの背中を見ていた。

「そう、そのまま動かないで。ほかの生徒さんたちも決して動かないように。クラウドス、あなたの背中を見てご覧なさい」

「なに!？」

クラウドは肩越しに自分の背中を覗き込んだ。

「!？」

眼を剥いたクラウド。

植物か、それとも動物か、形は蜘蛛に似ている。なぞの物体がクラウドの背中に張り付き、不気味な鼓動が伝わってくる。

「僕になにをつけた!」

明らかに良いものとは思えない。

ラ・モットは嬉しそうに微笑んだ。

「簡単に言ってしまうえば爆弾よ。わたくしに逆らえば爆発、無理に外そうとしても爆発、あなたはわたくしの言いなりになるほかない。たとえあなたが自分の命など惜しくないと言ったとしても、そちらにいる生徒さんも人質であることはお忘れなく。そして生徒さんたちも、クラウドが人質であること、そしてご自分たちも勝手な真似をすれば殺されるということをお忘れなく」

完全に制圧されたのだ。

クラウドが叫ぶ。

「なにが目的だ!」

「第一の目的はあなた自身よ」

「僕を使ってなにをする気だ?」

「それはまだお楽しみよ」

「……っ(僕としたことが気を抜いていた。学院内でこんな事態が起こるとは、しかも召喚実習室がこんな形で使われるなんっ)」

学院の関係者は多く、侵入してさえしまえば疑われることはまず少ない。その侵入前のリスクを考えると、大人数で侵入することは難しい。そこで使われたのがこの召喚実習室だった。大人数を外部から移送させるのに、こんなうつつつけの場所はない。

ただし、外部から直接ここに ゲート を開くことはできない。魔導学院側もその処置は当然している。ただし、内部からも ゲート をつくつてやれば話は別だ。

「遅いわ」

と、つぶやいたラ・モット。まだなにか起ころうとしているのか？

ラ・モットは仲間の魔導士に顔を向けた。

「なにか連絡は？」

「まだありません、ルビーローズ様」

ラ・モットではなくルビーローズと呼ばれた。ラ・モットは偽名か、だとしてもルビーローズも本名とは限らない。

人質にされたクラスメイト、爆弾を取り付けられたクラウド、敵の目的はクラウドを使ってなにかをすること。そして、さらに何かが起こることをルビーローズは待っている。

クラウドは情報収集に努めようとした。

「政治的目的か？ それとも身代金目当てか？ たかが身代金なら僕でなくてもいいだろう。いったいなにが目的なんだ？」

ルビーローズは妖しく微笑んだ。

「ここでわたくしがそれを言うことは、あなたも困ることにな

るわよ？」

「どういうことだ？」

「とある機密に関わること。次の作戦段階が成功したときに、おのずと見えてくるかもかもしれませんわね」

そして数秒、それは起きた。

学院全体に鳴り響く緊急警報。さらにオペレーションシステムによる自動音声 flowed。

《緊急防御コードが発令されました。学院全体を結界で覆い、ただちにすべての扉をロックします。危ないですので扉などに近付かないようお願いします》

この召喚実習室だけではない。学院全体が完全封鎖されたのだ。

クラウスはつばを呑んだ。

「なぜ……このコードの存在を……莫迦な、外部に漏れるはずが……」

王都全体を守る結界ではなく、たかが学校施設になぜこのようなシステムがあるのか？

国王であるクラウスがそれを知らないはずがない。この学院はクラウスの名が冠された学院だ。

ルビーローズはクラウスに問いかける。

「比較的平和なこの時代、そしてこの地域、しかしいつ戦争が起これとも限らない。世界三大魔導国家と呼ばれるこの国は、表向きは産業で栄えているけれど、軍事面においても抜かりはなく、いざというときの本拠地はこの場所、そうでしょうクラ

ウス？」

「それは違うな。学院は国外の者がほとんど、それを守らなくてはいけない。ここは戦うための施設ではなく、守るための施設だ」

「物は言いようね。攻撃は最大の防御とは良く言うわ。この学院設立の真の目的は戦える魔導士をひとりでも多く育て、国でそれを雇い入れること」

「妄想もいいところだ。設立目的は魔導による豊かな暮らしの実現。それに貢献することに尽きる」

「本当かしら？」

ルビーローズはなにを知っている？

そして、クラウスはなにかを隠しているのか？

「さあ行きましようクラウス」

ルビーローズは出口へ手を向けた。

「僕をどこに連れて行くつもりだ？」

「すぐにわかるわ。今この状況でロックを解除しながら部屋を行き来できるのはあなただけ。生徒さんが人質になっていることは、何でも言うているからわかっているでしょう？」

クラウスは従うしかなかった。

防御システムが発動して、すべてのドアにロックが掛かったという状態。それは外部からの侵入も拒むことになるが、教室などにいた生徒や教職員なども、部屋に閉じ込められることを意味していた。授業中の今、ほとんどの学院関係者がルビーローズたちの邪魔立てをできなくなったのだ。

この部屋だけでなく、学院全体をほぼ制圧したに等しい事態だった。

《一一》

《緊急防御コードが発令されました。学院全体を結界で覆い、ただちにすべての扉をロックします。危ないですので扉などに近付かないようお願いします》

「ええ〜〜っ!?」

ルーファスがトイレの個室で叫んだ。

たった今用を足して、トイレの水を流そうとしていたその最中だった。

水を流すことを後回しにして、さらに下着を穿くのも忘れ、とにかくドアを開けようとした。

ガン!

ドアにタックルしたが開かない。

「と、閉じ込められたぁ!」

水も流さず、下半身丸だしでパニック状態のルーファス。

「トイレに閉じ込められるなんてヤダよぉ!」

ゴンゴンゴンゴン!

何度もドアを叩くが開かない。

「臭いし怖いしだれか助けてえ〜〜!」

クサいのアンタのせいだ。

とりあえず水を流して落ち着けルーファス。

「……トイレでなぞの変死体発見……なんて絶対ヤダよあ
〜！」

ゴンゴンゴンゴン！

叩いても叩いてもドアは開かない。カギの閉まったドアは叩いても開かない。

ここでルーファスはあることに気づいた。

そう、カギの閉まったドアはカギを開けなくては開かない。

ガチャ

ドアのカギを開けたらあっさりドアは開いた。

ルーファスの早とちりにだった。

ロックされたすべての扉の中には、すべてと言ってもトイレの個室のドアまでは含まれていなかったのだ。

「はあ、良かった」

こうしてルーファスはどうにか個室からの脱出を成し遂げたのだった。

しかし、ある重大なことをルーファスは忘れている。

トイレの水を流していないのだ！！

パニック状態とその後の安堵ですっかり忘れてしまったらしい。

近い将来、『ウ コ流してないヤツは誰だ!?』と、犯人捜しのウワサが広まるのは間違いない。

安心しきっているルーファスに危機が訪れる！

「開かない！！」

予想どおりの展開だった。

個室のドアは開いても、トイレの出入り口はロックされてい
たのだ。

「今度こそ本当に閉じ込められた!? (こんな臭くて怖くてジメ
ジメしてて、なんか出そうなところ)に閉じ込められたくないよ
お」

だからクサイのは自業自得だ。

とりあえず代わりの出口を探すルーファス。

だが、その搜索もすぐに打ち切られた。

「なんで……ドアが……閉まつてるの?」

個室のドアが閉まつている。

とりあえずここは友好的にノックだ。

トントン

返事がない。

トントン

返事がない。

青ざめたルーファスは一目散に後退った。

「(冷静に考えよう。ドアの閉まつてる個室ということは、中
にだれかがいるのは間違いない。だったらなんで返事がないん
だろう。まさか踏ん張りすぎて気絶してる!?)」

そうだとしたら一刻も早く助け出さなくては!

しかし、ルーファスはその場から動けなかった。

「でも……(もしかして違う可能性だつて)」

その瞬間!

ウグググググウウウウウウ~~~~ツ。

世にも恐ろしい亡霊のような呻き声が響き渡った。

「ぎゃあああああああつ!!!」

ルーファス絶叫!

もつともルーファスが考えないようにしていたことが頭を過ぎった。

トイレのベンジヨンソンさん!!

いつかの恐怖が蘇ってきた。

アフロヘヤーで犬顔の黒人でボクサー風の幽霊。その名もトイレのベンジヨンソンさん。彼への対処法はトイレットペーパーを一〇ラウルで購入すること。

すぐさまルーファスは小銭を探そうとしたが、サイフがない!?

「なんで……ご飯食べたときはあったよね? あれ、なんでないの!？」

慌てるルーファス。

しかし、ここでルーファスはハツとするのだ。

「(トイレのベンジヨンソンさんって紙がないときに現れるなんだよね?)」

だとしたら別の幽霊または妖怪か?

ルーファスは学校の怪談を恐る恐る思い出した。

「まさかハヤシヤペー&パー!？」

トイレに出没するというユニットの妖怪だ。なにかトイレで恥ずかしいことをすると、ピンクの衣装を着た夫婦が召喚され、

その場をカメラで激写されるというウワサだ。

そうだ、きつとルーファスがトイレを流し忘れたからだ！
でもまだまだトイレには怪談がある。

ぶつちゃけ、確認してみないと個室から何かが出てくるかわからない。

だがルーファスは確認したくない！

「だれか助けてよぉ！」

ゴンゴンゴン！

出入り口のドアを力一杯叩くが手が痛くなるだけ。

うろうろうろ。

また呻き声だ。

ただ、さつきよりも人間っぽい。

しかし安心はできない。

トイレのベンジョンソンさんもハヤシャペー&パーも見た目は人間っぽい。

こうなったら後先なんて考えていられない。

ルーファスは魔法を唱えようとした。

「エアプレツシャー！」

圧縮された空気を放出させる呪文。

ぽふっ

情けない空気の塊がドアに当たった。

精神が乱れているとマナを操れずに魔法が安定しないのだ。

もしも魔法がちゃんと発動していたとしても、ロックの掛かったドアは魔法障壁で守られているので開かなかったが。

「ううっ……だれか……いるのか……」

開かずの個室から聞こえてきた男の声。

ルーファスは思った。

「(ここ)で返事をしたら魂を持って逝かれる！」

対応したがために亡霊につけ込まれるパターンはよくある。

シーンと静まり返ったトイレ。

またなにやら声が聞こえて来た。

「だれかいるなら……助けてくれ……ここに……閉じ込められた」

それっぽい言葉で誘い出すというパターンもよくある。ルーファスはシカトを決め込んだ。

そしてまたしばらくすると声が聞こえてきた。

「だれかいるなら返事をしろ！！」

一喝するような声。

その声を聴いてルーファスは震え上がった。その反応は脊髄反射的なものだった。ルーファスのよく知る人物だ。

「……もしかして……ファウスト先生ですか？」

「ルーファウス！！」

「は、はい！！」

「いるならば、なぜ早く返事をしないのだ！」

「ご、ごめんなさい」

クセのあるしゃべり方をするファウストの声は、聞き違える方が難しい。

すぐにルーファスは閉まっているドアの前に立った。

「あのお、どうしたんですかファウスト先生？」

「説明はあとでしてやる。今は私をここから出すのだ」

「出すって、自分じゃ出れないんですか？」

「拘束されているのだ」

「（拘束って穏やかじゃないなあ）でもどうやって助けたら？」

「とにかくドアを開ける、この際壊しても構わん」

ドアが開かないということは、内鍵が掛かっているのだろう。よじ登ればドアの上に隙間がある。ルーファスによじ登ればの話だが。

壊すとしたら、先ほどルーファスがやるうとしたように、魔法による衝撃などを使う方法。ただし、あまりやり過ぎると、ドアが吹っ飛んだときの衝撃で、中にいるファウストにも危害が及ぶ可能性がある。

「やつぱりできませ〜ん！」

ルーファスは考えた末に弱音を吐いた。

「ルーファウス！！」

響き渡る一喝。

震え上がるルーファス。

「ご、ごめんなさい、やれるだけやってみます！」

ルーファスの周りの大気が渦を巻いた。

「エアプレッシャー！」

空気の塊がルーファスの手から放たれ、ドアを見事に吹っ飛ばした！

吹っ飛んだドアはファウストの真横の壁に当たった。

「……ルーファス、私を殺す気か？」

「だって先生が言ったじゃないですか、ドア壊せって！」

「……まあ良かるう（ルーファスに優を求める方が莫迦だ）。

次はこの拘束をどうにかしろ」

どうにかしろと言ったファウストの状態は、手錠のようなものでトイレのパイプに繋がれている。首にはスカーフのように布が巻かれているが、これは口を絞められていた物がズレたものだろう。

「ご自分じゃどうにかできないんでしょうかー？」

「拘束されているが見てわからないのか？」

「わかりますけど、そのくらいならご自分でどうにかできるんじゃない？」

「できるくらいならお前にドアを壊させるものか。この手錠はマナを練ってつくられたもので、物理的に拘束するとともに、魔力を封じる二重に厄介な代物だ。この手錠を解除することまでお前には望んでいない。この鉄パイプを壊してくれるだけでいい、それだけいい」

「金属を切るとか私には無理なんですけど？」

「……………（本当にルーファスは役に立たんな。このまま下手に頼んで悪化することもある）わかった、ならば助けを呼んでこい」

「それも無理なんですけど」

「なにいい？」

ファウストは緊急防御コードが発動されたことを知らないらしい。

「じつはですね、なんか変なアナウンスが流れて、結界がどうか、すべての扉をロックするのかなんとか」

「ぼやくとしたルーファスの説明だった。」

「それでもファウストは理解したようだ。」

「まさか緊急防御コードが発動されたのか……あの存在は講師でも長年いる者しか知らん筈だが。いや問題は発動の要因は何かということだ。最悪の事態は敵襲、それも王都が総力を挙げた戦うほどの相手が攻め入ってきたという可能性だ」

「ええっ!? 戦争ですか、こんな平和な国で!？」

「この国が平和を気取っていても、攻め入ってくる敵には関係のないことだ」

「大変じゃないですか!？」

「実際は敵が攻めてきたのではなく、ルビーローズたちによる学院関係者の監禁工作だ。間違った推測に向かうと思いきや、ファウストは別の推測をしていた。」

「その通りだ。間違えであつて欲しいものだが、私がここに閉じ込められたのが偶然ではないとしたら……外部から敵が攻めてきたのではなく、すでに内部に敵がいたことになる。そして私が狙われた理由はなにか?」

「事件とファウストの関連性。」

「邪魔だつたんじゃありませんか?」

「その通りだ。見張りがいないことから人質ということではな

いらしい。そうになると、私がいては不都合なことがある。しかし心当たりが……いや、まさか……まさかと思うが、たしか次の授業はお前のクラスだったな？」

「だからなんですか？」

「この国の最重要人物がお前のクラスにはいるではないか」

「クラウドス！！」

ルーファスとファウストは敵の目的に早くも近付いた。

目的が学院内にいるクラウドスとなれば、さらにファウストは次の考えに辿り着く。

「なれば防御システムはクラウドスを救出する者を拒むためか。

この学院の防御システムは鉄壁と聞いている。軍隊が攻めてきてもクラウドスは救出できんだろうな。この推測が当たっていれば、少なくとも戦争ではなかったようだ」

「でもクラウドスの身は危ないんですね！！」

「それはクラウドスが敵にとつてどのような立場にあるかによる。利用目的があるとすればクラウドスは殺されることはないだろう。はじめからクラウドスの命が目的であれば……」

「そんな！！」

「だが、防御システムがクラウドスの救出を拒むものであるならば、クラウドスに利用目的があるということだろうな」

「ああ、もあ、つ、とにかくクラウドスを助けに行きます！！」

と言ってみたものの、ルーファスもトイレに監禁されているような状況だ。

どこかに出口はないのか？

出入り口はロックされてる。窓も同じくロックされている。
ハズだった。

ガチャツとドアを開けてトイレに入ってきた謎の人物。
ふあふあゝと空色の影がルーファスの横を通り抜け、何事
のないように個室に入っていた。

……………。

呆気にとられるルーファスとファウスト。

しばらくしてジャーという音がしてローゼンクロイツが個室
から出てきた。

そして、何事もなかったようにトイレから出て行くとする。
「ちよつと待って！」

思わずそのまま行かせそうになったが、寸前でルーファスが
呼び止めた。

ごくごく普通に振り返ったローゼンクロイツ。

「トイレなら開いてるよ（ふあふあ）」

「そうじゃなくて、どうやって入ってきたの!？」

「ドアを開けて（ふあふあ）」

「だからそうじゃなくて、全部のドアがロックされてるハズと
いうか、少なくともそのドアは開かなかったんだけど」

「開かないドアなんてこの世にないよ（ふあふあ）。開かない
ならそれは壁だよ（ふにふに）」

「……………」

斜め視線から諭されそうになっている。

ズレた会話を二人にさせておくわけにもいかないの、ファ

ウストが口を挟んできた。

「ローゼンクロイツ、お前なら私を助けられるはずだ。ここに来てパイプを壊すか、魔法錠を解除してくれないか？」

「いいよ（ふに）」

ツカツカッと歩いたローゼンクロイツは伝家の宝刀を抜いた。
ガズン！

排水パイプを蹴りやがった！

しかも、壊しやがった！

魔法とか関係なしに蹴りで鉄パイプを壊したローゼンクロイツであった。

ジャーツと噴き出す水でびしょ濡れになりながらファウストは。
。

「（恐ろしい才能だ……ローゼンクロイツ）」

とにかくファウストは救出されたわけだ。

さらにトイレのドアも開いている。

そのドアから何事もなかったように出て行くローゼンクロイツ。
ツ。

今度は止め忘れた。

あまりにもローゼンクロイツが何気なさ過ぎるのだ。

ハツとしたルーファス。

「と、とにかくクラウスを探しましょう！」

「多くの生徒は教室などに閉じ込められ、自由に動けない状況だろう。動ける我々は二手に分かれた方が効率が良い」

「えっ？（ひ、ひとり……不安だ）」

「では行くぞ」

ファウストは駆け足でトイレを出て行ってしまった。今日はジャラジャラ音を鳴らしていない。魔導具は拘束時に奪われてしまったらしい。

慌ててルーファスもトイレを飛び出した。

独りじゃ不安なルーファスは、ファウストと同じ方向に行くのかと一歩踏み出したが、クラウドのことを思うと別に道を進んだ。

その生徒数からもわかるように、学院の敷地は広い。人を探すには絶望的に広い。ただ手がかりがゼロというわけではない。召喚実習室で授業があったということを考えれば、その方向に向かうのが最善だろう。まだそこにクラウドがいるという期待もルーファスは抱いていた。

だとしたらファウストはなぜ別の方向に向かったのか？
そこまで頭が回らなかったのか？

とにかくルーファスは召喚実習室に向かって駆け出した。

トイレから召喚実習室へは、中庭を抜けると早く着ける。

すると中庭の噴水近くで、前方からクラウドが歩いてくるのが見えた。紅い服を着た女といっしょだ。ルーファスはこの女がルビーローズだということを知らない。

クラウドは爽やかな笑顔でルーファスを出迎えた。

「やあルーファス。お腹の具合は良くなったかい？」

「えっ……クラウド、クラウドこと無事だったの？」

「無事ってなんのことだい？（ルーファス、僕に構わず行くん

だ！」

「だってファウスト先生の話だと、クラウスが狙われているとかなんとか……で、そっちの人は？」

クラウスが爽やかに笑っているせいで、まさかこの女が事件の張本人とは思いつかなかったのだ。

ルビーローズはクラウスに余計なことをしゃべらせたくなかった。

「あの男もう見つかったのね。情報が広がるのは不味い、隙を見てこの男も拘束しなければ」わたくしは新しく赴任してきた教師です」

「どうもはじめましてルーファス・アルハザードです」

「(国防大臣の息子ね)ラ・モットと申します」

「どうもどうも、これからよろしくお願ひします。 じゃなく、そんなことより学院中のドアがロックされちゃって大変なだけど!!」

「そのことなら……」

ルビーローズが理由をつけようとしたところに、ちょうど校内放送が流れた。

《防御システムの誤作動がありました。復旧までにはしばらく時間が掛かりそうですので、生徒のみなさんは教師の指示に従って騒がずに待機しててください》

情報の操作。

事件などが起きたとき、ひとは情報が得られないことによりパニックを起こす。嘘の情報でもよいので、何かしらの理由が

あればいったんは騒ぎの大きさを小さくすることができる。
ルビローズは微笑んだ。

「今の方法の通りです」

クラウスも否定を口にすることはできなかった。

だが、クラウスは手をこまねいてはいなかったのだ。

クラウスとルビローズの背後の空中、そこに噴水の水を使った文字が描かれる。

「ルーファスこの女はテロリストだ、クラスメイトが人質になつてる！」

水文字によってクラウスは秘密裏に伝えた。

「テロリストだつて!？」

だがルーファスが口に出してしまつて水の泡。

本当にどーしよーもないルーファスだ。

すぐにルビローズが動いた。

「スパイダーネット！」

拘束魔法の一つ。蜘蛛の巣状の魔法の糸がルーファスを捕らえようとする。

へっばこなルーファスにも得意なことがある。

逃げることに!

紙一重でスパイダーネットをかわしたルーファス。

だが全身で飛び退いた拍子に腹から床に落ちて強打。

「うっ……（肋骨打った）」

痛みで休んでいるヒマはない、次のスパイダーネットが飛んできた。

今度は逃げ切れない。

苦渋を浮かべクラウスが動く。

「ファイア！」

クラウスの手から放出された炎によって焼かれるスパイダーネット。

空かさずクラウスが叫ぶ。

「逃げるルーファス！」

すぐにルーファスは立ち上がって逃げた。クラウスを助けるという目的を忘れ、ルーファスは逃げたのだ。

ルビーローズは深追いをしなかった。

「閉じ込められていない関係者が少なからずいることは作戦に織り込み済みよ」

下手に追撃して真の目的をおろそかにはしない。手中にはクラウスがいる。

「次はないわよクラウス？」

人質がいるという再度の警告。

警告で済んだということは、クラスメートはまだ無事だということだった。

しかし、少しも安堵できない状況が続いていることは変わりなかった。

必死こいて逃げたルーファスだったが、ふと立ち止まってハツとする。

「逃げちゃダメじゃないか！」

すぐに戻ろうとはしたが、足がすくんで動かない。

「（僕になにができるだろうか……だって相手はテロリスト。クラウスもクラスのみんなも人質になってるって。さっきの放送だってウソだったんだ、本当は学院のシステムが乗っ取られて……僕ひとりじゃなにもできないよ）」

気分が落ち込んでいたそのとき、明るい声が響いてきた。

「ルーちゃん！」

ピンクのツインテールを振り乱して駆け寄ってくるビビの姿。

「ビビー！」

「ルーちゃん探したよお！」

その明るさにルーファスも息を吹き返した。

「よかった、無事だったんだねビビ！」

「ルーちゃんこそお腹が痛くて野垂れ死んでるじゃないかってドキドキだったよお」

「そんなことよりほかのみんなは無事なの？」

「ほかのみんなって？」

「人質にされてるクラスのみんなのことだよ」

「ええ……っ！ なにその話聞いてないよお……！」

たしかにビビが知らないのも当然だった。

「えっ……逃げて来たんじゃないの？」

「アタシはルーちゃんのこと心配で授業サボって来たんだけ

ど？」

「クラウスがテロリストの女に捕まったのも見てない？」

「ええ~~~~っ！ テロリストって聞いてないよそんなの!!!」

聞いてなくても現れるテロリスト。

スパイダーネットがルーファスとビビに覆い被さるうとしてた。二人は突然のことに動けない。

「ファイア（ふあ）」

炎によって消滅させられたスパイダーネット。

ルーファスが声をあげる。

「ローゼンクロイツ！」

二人を救ったのはローゼンクロイツだった。

テロリストの数は三人。三対三だ。ルーファストビビを戦力に入れたとしたらだが……。

再び魔法を発動しようとしたテロリスト。だが発動しない!?

「なにが起きた!？」

驚くテロリストのローゼンクロイツはフツとあざ笑った。

「……トラップ（ふにふに）」

魔法を発動しようとしたテロリストの足ともで輝く魔法陣。

魔法陣を踏んでしまったテロリストと残る二人も、その効果を瞬時に悟った。拘束と魔力封じを同時に兼ねる魔法陣だったのだ。

残された二人のテロリストは顔を見合わせうなずき合った。

「やむを得ない、攻撃魔法で弱らせてから捕らえるんだ。絶対

に殺すなよ！」

「水色の女をまずは仕留める！」

標的から外されたルーファストとビビはほっと一安心。

「ルーちゃん助かったね」

「うんうん、私たち強そうに見えなくてよかったね」

「てゆかき、ローゼンのこと女だって、あはは」

「あはははは」

のんきな二人とは対照的に、テロリストの二人はマジだ。

「ウォータービーム！」

「サンダーボール！」

水と雷の連係攻撃だ。相乗効果で威力が増す！

のんき、マジ。そしてローゼンクロイツはふあふあ！！

「フリーズ&スパークボディ（ふあふあ）」

同時に二つの魔法を操り、ウォータービームをフリーズで凍らせ、スパークボディで自らに電気の鎧を宿しサンダーボールを吸収した。

テロリストは驚きを隠せない。

「同時に二つの魔法を……なんというバランス感覚だ！」

「たかが生徒にこんな実力者が……これがクラウドス魔導学院の実力かッ！！」

魔法の根源たるマナエネルギーは操るものであり、魔法の発動にはマナを安定させる必要がある。二つの魔法を同時に使おうとすると、互いの魔法が共鳴あるいは反発などをして、安定を乱されることになる。このことから同時に魔法を発動させる

ことは高度な技術とされている。

スパークボディを纏っているローゼンクロイツから電流が放出される。

「エレクトリックショック（ふあふあ）」

駆け巡る電流が二人のテロリストの身体を突き抜けた。

「ギャアアアッ……！」

感電した二人は即座に気を失った。

一段落したことで、ローゼンクロイツは片手を上げて、

「じゃ（ふにふに）」

と、何気なく立ち去ろうとした。

「ちよつと待ったあーっ！」

寸前でルーファスが呼び止めた。

「なんだいルーファス？（ふあふあ）」

「なんだいじゃなくて、なんで行こうとするのさ？」

「だってもう授業はじまつてるじゃないか（ふにふに）」

「……………（まだ召喚実習室に行くつもりっていうか、まだ辿り着いてなかったんだ）あのねローゼンクロイツ、とっくに授業中止だから」

「……………が〜ん（ふにゆ）」

目を丸くして驚いたローゼンクロイツだが、すぐに無表情に戻って何事もなく立ち去ろうとする。

「次の授業は教室だったよね（ふにふに）」

クラスに帰るつもりだった。

「待ってローゼンクロイツまだ話が……！」

必死でルーファスは呼び止めた。

ローゼンクロイツはわざとらしく溜め息を吐いた。

「ふう（にゃ〜）ルーファス、話が長い男は嫌われるよ（ふにふに）」

「ごめんね話が長くて。そんなことよりも、午後の授業は全部中止だと思うよ」

「……ふ〜ん（ふにふに）」

あっさりした反応。

ビビはそんなローゼンクロイツを見て思う。

「（今度は驚かないんだ。やっぱりローゼンのことわかんないや）」

こんなやりとりに拘束されている残った一人のテロリストが痺れを切らせた。

「おい、俺のこと放置するなよ」

ルーファスはハツとした。

「そうだよ、テロリストだよ！ ローゼンクロイツ大変なんだよ、学院がテロリストに占拠されちゃって、クラウスも捕まってるんだ！」

そこにテロリストが口を挟んできた。

「我々をテロリストなどといっしょにするな。我々秘密結社は平和団体だ」

これを聞いたビビは顔を膨らませた。

「平和団体がこんなヒドイことするわけないでしょ、べ〜だ！」

あっかつべーのおまけ付きだ。

ビビに続いてルーファスも続けて反発する。

「私のクラスメイトを人質にして、クラスもどこかに連れて行くこうとして、学院中のドアを全部ロックして、これのどろがテロじゃないんだよ！ 変なロックのせいでトイレに閉じ込められて大変だったんだから！」

そう言えばまだ流してない。

テロリストとはテロリズムに基づくもの。政治目的のために暴力や恐怖に訴えるものだ。

しかし、この自称平和団体は認めようとしなない。

「我々はテロリストではない。その証拠に任務遂行のための殺生は禁忌としている」

たしかにファウストも捕まったが無事だった。ルビーローズに遭遇したルーファスも、そして今も敵は殺傷ではなく、捕らえることを主としていた。

テロリストの態度にルーファスは苛立ちを募らせる。クラスメイトが、学院のみんなが、そしてクラスが危険に晒されているのだ。

「あなたたちはいつたいたいなんなんだ！ 目的はなんなんだ！」

「我々は徹底した秘密主義だ。組織名を教えることはできない。任務内容についてはさらに黙秘する」

なにか手がかりはないのか？

ビビは気絶していたテロリストを物色。

「通信機見つけたよ！ これで外に助けを求めてみるね」

だが壊れていた。

ローゼンクロイツの放った電流のせいだ。

だが、捕らえられているテロリストが壊れていない通信機を持っていてもいい。

「通信機を持つてゐるなら出すんだ！」

ルーファスが強い口調で言った。

「持つているが君たちの役には立んよ。外部との通信はすでにシャットアウトされている」

お人好しのルーファスは調べもしないで話を鵜呑みにしたが、実際に通信はシャットアウトされている。制御ルームを制圧されているからだ。ただし。

「……有線（ふにふに）」

ローゼンクロイツがつぶやいた。

テロリストは表情を崩さず、ローゼンクロイツは話を続けた。「ボクが思うに、有線なら外と連絡が取れるはずだよ（ふにふに）。ただし、すべての回線が生きているとは思えないね（ふにふに）。無線による外部通信をシャットアウトさせているのに、有線もしていないなんて間が抜けているからね（ふにふに）。けれどすべての有線を遮断してしまつたら、テロリストは外の情報も掴めないし、外の仲間との連絡もあるだろうし、要求があるならそれを伝える必用もある（ふにふに）」

ルーファスはひらめいた。

「きつと生きてる有線は制御ルームにあるよ！」

ここでビビは何気なく。

「ええつと、制御ルームってなに？
ルーファスが答える。」

「そこが占拠されたせいで学院中のロックがかかって、きつと通信が遮断されてるのもそのせいなんだよ」

「ええつと、ならそこを取り戻せばいいんじゃない？」

「……あつ」

ポツリとルーファス。

問題解決に一筋の光を見いだしルーファスが俄然やる気が湧いた。

「よし、制御ルームを奪い返そう！」

そこに水を差すビビの一言。

「場所は？」

「……え？」

何気ないビビの質問にルーファスは言葉に詰まり、ローゼンクロイツを見つめた。

「ボクも知らないよ（ふあふあ）」

だれも場所を知らなかった。

ローゼンクroイツルがボソツと。

「……あつ（ふあふあ）」

つぶやいた。

何事かとルーファスとビビが首を傾げると、廊下を駆けてくる大勢の人影。逆方向を振り向くと同じように押し寄せてきている。どう見ても仲間だと思えない。

状況を把握してビビが叫ぶ。

「挟み撃ちされちゃったよ！」

焦るルーファスはすぐさま助けを求める。

「ローゼンクロイツどうかして！」

少しは自分でもうにかしようとする気はないのだろうか？

「……眠い（ふあふあ）」

バツサリと拒否された。

ローゼンクロイツも同じ状況にいるはずなのに、状況を打開する気ナツシング。それどころかここで寝る気だ！

もうすでに立ったまま虚ろな目をしているローゼンクロイツ。ルーファスは身構えた。

「大丈夫、相手は僕たちのこと殺さないらしいから」

「でも痛いことはするんだよねえ？」

「……痛いのヤダよお！」

本当に情けないルーファスだった。

敵はすぐそこまで迫っている。

窓や教室はロックされていて逃げ込むことはできない。

そのとき校内放送が流れてきた。

「黒魔導講師のヨハン・ファウストだ。現在学院はテロリストによって占拠され、一部の生徒が人質になっている。緊急防衛コードが発動させたのはテロリストであり、生徒および学院関係者を室内に閉じ込めるためと思われる。制御ルームを奪い返すことに成功したが、解除コードが不明で私には手を打ちようがない。しかし、外部との連絡には成功し、すぐに救援が駆けつけるだろう……というのは気休めに過ぎない。我が学院の防

御システムは難攻不落であり、外部からの救助は絶望的である。よって、現在室内に閉じ込められている者は自力で脱出し、運良く学院内を自由に行動できる者はテロリストを制圧しろ、以上だ》

この放送によって動揺したテロリストの一瞬の隙を突いて、ルーファスとビビは縫うように敵の間を駆け抜けて逃げた。

「逃がすな追え！」

すぐにテロリストが雪崩のように追ってくる。

ルーファスは恐る恐る振り返った。

「先生は制圧しろっていうけど……ムリだよ！」

「だよね〜」

ビビも納得。

そして、ローゼンクロイツは さっきの場所に取り残されていた。しかも寝てる。

立ったまま寝ているローゼンクロイツにテロリストが束になって襲い掛かる。

しかし、ローゼンクロイツは寝ている方が強かった。

滅茶苦茶に有りと有らゆる魔法がローゼンクロイツから放たれる。

単に寝相が悪いだけだった。

ローゼンクロイツが敵の注意を引き受けているおかげで、ルーファスとビビは少ない敵を撒くことに成功した。

必死に走ったルーファスはゼーハーゼーハー肩を上下させている。

「もう……走れない」

「ルーちゃん体力なさすぎ」

「あれだけ追いかけて回されたらだれだって……あれっ？（こんなところにあつたっけ？）」

ルーファスは自分の目の前にある物を見て首を傾げた。

「どうしたの？」

「見慣れないエレベーターがあるんだよ」

「この学校広いし、たまたまルーちゃんが知らなかっただけじゃないのお？」

「いちおう四年目なんだけど。それにね、ローゼンクロイツと違って方向音痴じゃないから道ぐらい覚えられるよ。絶対に今までこんなのがあったよ！」

「じゃあなんであるの？」

「さあ？」

ルーファスは首を傾げた。

《ルーファウス！》

突然のファウストの声にルーファスはビクツとした。

「は、はい！」

校内放送だった。

《とにかくそこに入るのだ、クラスがいる可能性が高い》

「わかりました！（……監視カメラで見られてたのか）」

すぐにルーファスとビビはエレベーターに乗り込もうとした。ボタンを押してエレベーターが来るのを待つがなかなか来ない。

「遅いねルーちゃん」

「そうだね」

「故障してるんじゃない？」

「故障中なら故障中の張り紙してあると思うよ」

チン

ベルの音がしてエレベーターのドアが開いた。

「やっと来た」

言いながらルーファスはエレベーターに乗り込んだ。

さっそくボタンを押そうとしたビビが驚く。

「何これ!？」

「どうしたの？」

「地下一〇〇階直通になってるよ？」

「ええっ!?(この学院って地下五階までしかないはずなんだけ

ど)

とにかく地下一〇〇階に向かう。

動き出したエレベーターは徐々にスピードを上げ、身体が強

く引つ張られるGが掛かる。

長い時間を掛けてようやくドアが開いた。

「ううっ、気持ち悪い」

青ざめているルーファス。

「ルーちゃんだいじょぶ？」

「酔った」

「まさかエレベーターで乗り物酔いしてないよねえ？」

「……………」

「……したんだ」

ビビは呆れるしかなかった。

ここから先は長い廊下が続いている。

壁や床から放たれる紅い光。その光はまるで血管のように床や壁に張り巡らされる模様から放たれている。

「なんか不気味なとこだねえ」

ビビが身震いをした。

「本当だね、さっきから自分のドキドキしてる音がよく聞こえるんだけど」

「アタシもー。ルーちゃん怖いよお」

「ドク、ドク、ドクってどんどん強くなってる」

「ホントだ、ドクドクって……壁から聞こえない？」

「えっ？（もしかして自分の心臓の音じゃなくて廊下全体から聞こえてる!?)」

二人はその事実気づいた。

嫌な予感が拭えない。

前方に見える巨大な扉　閉まっていればいいのに、その扉

は口を開けて二人を待っている。

ルーファスは息を呑んだ。

「今日はここまでにしようか？」

「そうだね、また明日来よう！」

クルツと一八〇度回って引き返そうとする二人。

「そんなことできるわけないだろう！」

奥の部屋から聞こえてきた少年の怒号。

すぐにルーファスは気づいた。

「クラウスだ！」

引き返そうとしたいたことも忘れ、ルーファスは奥の部屋へと飛び込んだ。

愕然とするルーファス。

「な……なん……（すごい魔力で立ち眩みがする！）」

ビビもそれを見て驚きを隠せない。

「生きてる……生きてるよあれ！」

二人の招かれざる客にルビーローズは微笑みかけた。

「お子様の来るところではなくてよ」

ルビーローズの遙か頭上で紅く輝く宝玉。

その宝玉の中に埋め込まれた禍々しい巨人の姿。象などその巨人の片手で軽く握りつぶされそうだ。それほどまでに巨大な宝玉だった。

「魔王級だな」

つぶやく女の声が響き渡った。

ルビーローズは驚いた。

「誰ッ!？」

寸前まで気配を感知できなかったらしい。

「ふふふっ、神出鬼没にして生き字引のカーシャ様に来てやつたぞ」

どこから沸いてきたのかカーシャがこの場に現れた。というか、エレベーターではそんなに早く来られないので、本当にどこから沸いて出たのだろうか？

クラウスは重々しい顔をした。

「まさかカーシャ先生はこれをご存じだったのですか？（これを学院で知っているのは僕と学院長だけのはず。国内外でもごく限られた人物しか知らないはずなのに!?）」

「魔晶化だな。滅びた魔導、いにしえの禁忌、地獄の檻……この場所にはかつて魔族と戦った精霊の超文明都市があった。魔晶はロストテクノロジーの一つで、主にエネルギー供給に使われる。まさかこの場所に残っていて、しかも稼働していたのは驚きだがな」

話を聞いたビビは血の気が引く思いだった。

「魔晶化つてなに、だってアレ生きてるよ!!」

ビビにも予想が付いていた。だからこそ声を荒げた。同じ魔族として。

そして、この場にはもうひとりの魔族がいた。

「わたくしが答えてあげましょう。過去から現在まで虐げられた魔族の一員として、何も知らない魔族のお嬢さんのために」

ルビーローズは魔晶に向いて話をはじめめる。

「魔族と一口に言っても、その種族は多岐に渡るわ。神でもなく、精霊でもなく、人間でもなく、奴らは自分たちの敵を一括りに魔族と呼ぶようになり、いつしかわたくしたち自身も自らを魔族を称するようになったわ。そして起こるべくして起きた過去における大戦の数々。ここにいる魔王は第三次聖魔大戦の英雄よ。魔族にとって英雄であるならば、当然奴らには大悪党よね。魔王を生け捕りにした奴らはどうしたのか、結果はこの

通り、生かさず殺さず、半永久的に稼働するエネルギープラン
トとしたのよ。魔晶化とは、魔族を生きたまま発電機にするよ
うなもの。魔晶化された魔族は久遠の苦しみを与え続けられ
る」

「そんな……ヒドイ……早く解放してあげて！」

ビビは涙ぐみながら訴えた。

しかし、それをしたらどうなるか　クラウドは首を横に振
った。

「王都の電力はすべてここで生産されてるんだ、供給が止まれ
ば都市は機能を失う。それにこの装置を止める方法は誰も知ら
ない、少なくとも王国には伝わっていない。でもね万が一、中
にいる魔王を解放する方法があったとしたら……解放された魔
王は一夜でこの王都を死の都に変貌させるだろうね」

ここで突然カーシャが　。

「妾はこれが欲しい」

「はぁー……っ!？」

ルーファスビックリ。

カーシャはマジだ。

「これを兵器応用したら今の地上など容易く制圧できるぞ（ふ
ふっ……我が天下）」

ルビーローズの目つきがきつくなった。

「それをさせないために、わたくしたちは行動を起こしたの
よ」

これにクラウドは少し驚いたようだ。

「どういうことだい？」

「わたくしたちの秘密結社は平和を愛する団体。わたくしたちの目的はこの魔晶システムを管理し、誰にも使わせず、誰の目にも触れさせないこと」

「人間やその他の種族に害をなすつもりではないのかい？」

「とんでもないわ。このエネルギーを使って戦争をするつもりも、魔王を復活させるつもりもないわ。たしかに魔晶化は人権侵害も甚だしいけれど、凶暴な魔王を世にはなつたら平和が乱されるもの」

「さつき言っていて事と違うような気がするけれど？」

「あれはあくまで史実を話しただけよ。魔族は虐げられてきたけれど、だからと言って過去の過ちを繰り返すわけにはいかないわ」

ここで新たな男の声が響き渡る。

「そう、我々は過去の過ちを繰り返さない」

金髪の若い男を確認したルビーローズが驚く。

「ゴールドンクルス、なぜ貴方がここに！」

「魔族なんかこれを渡すわけにはいかないからね」

「わたくしたちは種族の垣根を越えて真の平和を……キャッ！」

ゴールドンクルスの手から放たれた光の槍がルビーローズの腹を貫いた。

辺りは騒然となった。

「ゴールデンクルスは恭しくクラウスにお辞儀をした。

「はじめましてアステア王。俺はあんたの遠縁に当たる者です」

「王族……君のことなんて知らないぞ」

「系譜からはとつくの昔に消されてますからね。けどありがたいことに、代々このヒミツは伝わってましたよ。今回の作戦を考えたのも俺ですから。まあ仲間に伝えていたのは表向きの作戦ですけどね」

ルビーローズの理想と違える者。だとすれば驚異でしかない。

「妾のライバル登場というわけか」

とつぶやいたカーシャにすぐさまルーファスはツツコミ。

「お願いだからカーシャ、話をややこしくしないで」

とりあえずカーシャはルーファスに任せるとして、ゴールデンクルスの目的を問わなくてはならないだろう。それが推測であつて欲しいと願いを込めながら。

クラウスが口を開く。

「目的は？」

「力による支配」

「魔晶システムの兵器利用か？」

「それと、君から王座を奪うこと」

心を映すような邪悪な笑みを浮かべたゴールデンクルス。

ルビーローズに使役されていた爆弾はすでにクラウスから外れていた。

構えるクラウス 戦う気だ！

しかし、ゴールドenkilスは戦わずして制した。

「人質がいることをお忘れなく」

「クツ……」

手が出せないクラウス。

代わりにルーファスが口を出した。

「あなたたちは殺生はダメって聞いたぞ！ 人質に手を出せないくせに！」

「残念ながら俺は違う。そして俺のシンパも違う。だから今から先代のアステア王には死んでもらう」

先代の王 すでに王を気取っている。

「僕を殺したら魔晶システムを操作できる者がいなくなるぞ」

「だから言ったじゃないか。俺はあんたの遠縁なんだから、操作なんてお手の物」

「遠縁というのは真実なのかい？」

「仕方ない、証明してやるか」

魔晶システムのコンピューターに向かって歩き出すゴールドenkilス。
ンクルス。

止めようと一歩踏み出したクラウスだったが、ゴールドenkilスは振り返って邪悪な笑みを浮かべるのだ。

「邪魔するなよ？」

人質がいる限り手が出せない。

しかし、もしも魔晶システムが奪われてしまったら、犠牲者は爆発的に増えることになるだろう。

クラウスは苦悩した。

「(命の重さは計れるものではないと信じている。けれど、ここでなにもしなければ犠牲は確実に増える。全員を救いたいという考えでは甘いのか……できないのか!)」

張り詰めた空気。

「ぎゃああああああ〜〜〜っ!!」

突然聞こえてきた謎の叫び声。

ゴールデンクルスも驚いて動きを止めてしまった。その瞳に映る人間口ケツ　ルーファス。

突然のことにゴールデンクルスはとにかく防御魔法を発動させようとした。

「シールド!」

ゴン!

顔面からルーファスはシールドに強打。透明なシールド面にルーファスのブタ顔がへばりついた。

稲妻のようなその身の熟し!

「ピコ・ボム!」

カーシャが放った魔法がゴールデンクルスの耳元で小爆発を起こした。

「ぐわあああああつ!!」

耳を押さえてうづくまるゴールデンクルス。

「うおおおおおっ、耳が、俺の耳が……クソオツ!」

さらにカーシャはゴールデンクルスの腹に蹴りを一発ぶちかました。

「妾の物だ！」

「ぐあっ！」

床に転がったゴールデンクルスをルーファスがすぐさま取り押さえた。

「エナジーチェーン！」

魔法の鎖で縛り上げ、さらに上に乗って押さえる。

「クソオオオツ今すぐ人質を皆殺しだ！！」

「やれるものならやってみるがよい、ふふっ」

カーシャは余裕の笑みを浮かべていた。

ゴールデンクルスも気づいた。

通信機が壊されていたのだ。

すべてはカーシャの作戦だった。

まずはルーファスを投げ飛ばすことにより、相手の驚きを誘うと共に、仲間に通信をさせる前にルーファスを防ぐという行動を強制させる。そこにすかさずカーシャの攻撃、狙ったのはゴールデンクルスが耳に取り付けていた通信機だ。

これで一段落だ。クラウス救出の次は、防御システムの解除と人質の救出だ。

しかし事は巻き戻ろうとしていた。

簀巻きにされているゴールデンクルスが、全身をバネのようにしてルーファスに蹴りを喰らわせた。

「クソガキがっ！」

「うわっ！」

吹き飛ばされたルーファス。

ゴールデンクルスにマナが集まる。

「ハアアアアッ！！」

怒号と共にゴールデンクルスは魔法の鎖を吹き飛ばした。ルーファスが魔力でつくった鎖を、ゴールデンクルスの魔力が上回ったのだ。

ゴールデンクルスが光の槍をつくりだす。

「死ねーっ！！」

「ルーちゃん！！」

ルーファスに槍が突き立てられる瞬間、ビビが立ちふさがった！

「きゃあッ！！」

「ビビ！！」

ルーファスの叫び。

光の槍はビビの腕を掠めた。

床に迸った血。

ルーファスの中で何かが切れた。

「許さないぞーッ！！」

我が身一つでゴールデンクルスに突っ込むルーファス。

カーシャも急いで駆け寄る。

「莫迦かつ、素手で向かってどうするルーファス！！」

クラウスも急いだ。

「ルーファス落ち着け！！」

光の槍が薙ぎ払われる。

ルーファスの胸が切り裂かれた。

言葉を失ったビビ。

クラウスも我を忘れた。

「フラッシュファイア！」

爆炎がクラウスから放たれ、直撃を受けたゴールドエンクルスが服を焦がしながら大きく吹き飛んだ。

ビビは自暴自棄になっていた。

「もうヤダ、ヤダヤダヤダ！ こんな物があるからいけないのッ！！」

大鎌を高く振り上げていたビビの姿を見て全員息を呑んだ。

激しい衝撃音が鳴り響いた。

魔晶システムの制御コンピューターに突き刺さった刃。

鼓動が聞こえる。

激しい鼓動。

まるで怒り震えるような鼓動の音。

すぐさまクラウスが機器をチエックした。

「大変だ、エネルギーが急激に上昇してる！」

カーシヤは最悪の事態を想定した。

「これはあれが起きる可能性があるな。エレメントツ爆発に加えてメルトダウンか……確実に王都は跡形もなく吹っ飛ぶだろうな」

その言葉にビビは我に返った。

「そんな……アタシ……」

「歴史に残る破壊神として名を残すことになるだろう（ある意味名譽だ）」

「そんなことになるなんて……アタシどうしたら……」

「歴史を伝える者がこの世に残っていればの話だ」

さらに最悪なことを口走ったカーシャ。

絶望するビビにさらなるカーシャの追い打ち。

「王都が吹き飛ぶくらいで済めば御の字だ。もつとも最悪なのは、爆発のエネルギーが巨大すぎてブラックホールを形成して星ごと丸呑みパターンだろうな（ふふっ、笑えん）」

絶望感が漂う中で、その空気をぶち壊す一声。

「あーっ死ぬかと思っただーっ！」

ビシツとバシツと立ち上がったルーファスだった。

「服ぱっくり切れてるよー、お気に入りのだったのになあ」

空気を読まずに服の心配をするルーファスだった。

でもルーファスを見て歓喜が戻った。

「ルーちゃん！」

ルーファスに駆け寄ったビビがそのまま抱きついた。

「く、首が絞まってるよビビ」

「よかった、どこもケガしてない？」

「切られたのは服だけだよ。それよりもビビは大丈夫？」

「人間に比べたら傷の治りが早いからだいじよだよ、血も止まってるし」

クラウスも駆け寄ってきた。

「よかったルーファス。でも喜んでいる場合じゃないんだ、も

うすぐ王都ごと消し飛ぶかもしれないんだ」

「……え？」

あまりの事の大きさに反応が小さくなってしまった。

地下が大きく揺れた。立っていられないくらいだ。

今の揺れでルーファスは事の重大さを身に染みて感じ取った。

「今スゴイ揺れたよ！ ど、どうにかならないのクラウドス！」

「残念ながら制御不能なんだ。とにかくまずは地上に戻って制御ルームに行こう。そこで防御システムを解除すると共に外部に事態を知らせて、王都にいるすべての者をできるだけ遠く離れた場所に避難させなくてはならない」

最後まで希望を捨ててはいけない。

「まあぶっちゃけそんな猶予残されてないがな、ふふっ」

希望をぶち壊すカーシャの一言だった。

魔晶が煮えたぎるマグマのように赤く輝いている。まるで噴火の時をまっっているかのようだ。

カーシャの言葉くらいではクラウドスは希望を捨てない。

「とにかく最後まで諦めずにがんばろう！」

部屋から逃げ出そうとする三人。

だがその前にゴールデンクルスが立ちほだかった。

「俺の野望を打ち砕いたあんたらを行かせるわけにはいかない。この手で八つ裂きにしてらなないと気が済まない……と言いたいところだが、死ぬのはごめん」

邪悪な笑みを浮かべたゴールデンクルスにマナが集まる。

このときビビは無我夢中でゴールデンクルスに飛び掛かって

いた。

ゴールデンクルスが魔法を放とうとする。

ルーファスも無我夢中だった。

「ビビだめだ！」

ルーファスがビビの身体を押し飛ばした瞬間、ルーファスの眼前にゴールデンクルスの手があった。

「マギ・フラッシュユ！」

眩い閃光が放たれた。

ルーファスの後ろに巨大な影ができる。

影の中にいたクラウスやカーシャですら目が眩んで何も見えなくなつた。

ビビはちょうど床に顔を伏せる形になっていたが、それでも目が開けられないほどだった。

誰も何も見えない中で男の呻き声が聞こえた。

「うう……ルビーローズ……生きていたのか……殺しはしないんじゃ……くっ」

ゴールデンクルスの声が途切れ、倒れる音が聞こえた。

いち早く視界が戻ったビビは見た。

氷の刃が腹に突き刺さつて身動き一つせず倒れているゴールデンクルス。

そして、床に膝を突き全身の力を失っているルビーローズ。

「即死は狙わなかつたわ……」

そのままルビーローズは気を失った。

クラウスやカーシャの視界も戻ってきた。

ルーファスは？

「……眼が……見えない……まっくらだ」

閃光によって光の残像がまぶたの裏に残っているのではなく、ルーファスの視界は完全な闇だった。

ビビは息を呑んで涙が溢れそうになった。

「ルーちゃん……ルーちゃん！」

カー杯ビビはルーファスの身体を抱きしめた。

「アタシのことかばったから！ アタシのせいでルーちゃんの眼が！」

「大丈夫だよビビ、きつと一時的なものだと思うし。ただここから脱出するのはちよつと困るけど」

「ルーちゃんのことアタシが連れて逃げるからだいじょぶだよ！」

ビビはルーファスに肩を貸した。そして、クラウスも同じようにルーファスに肩を貸す。

「急ごう時間ない」

廊下を急いで抜け、エレベーターに乗り込もうとした。

開閉ボタンを押したクラウスが叫ぶ。

「クツ、開かない！」

奥までに時間が掛かっているわけではない。動いている音すら聞こえない。完全に故障していた。

「逃げ道ならあるぞ、妾が通ってきた道だ」

「そんな道があるなんて僕も知りませんよカーシヤ先生！」

王すら知らない秘密の抜け穴をカーシヤは知っていたのだ。

急いで廊下を引き返す。

魔晶がある大広間に戻ってきたとき、また激しい揺れが襲った。

今度の揺れは今と比べものにならない。

「きゃっ！」

ビビの足下の床に小さなひびが入った。そのひびは徐々に口を広げ、ビビたちを丸呑みにしようとする。

眼が見えないルーファスの足が吞まれた！

「うわっ！」

吞まれた片足からバランスを崩して、そのまま地の底へ引きずり込まれた！

ルーファスが闇の中に消える。

ビビが亀裂に飛び込んだ。

「ルーちゃん！」

ビビの手がルーファスの手を掴んだ！

しかし、ビビもろとも闇の中に落ちてしまう！

今度はクラウスが両手を伸ばした！

「ビビちゃん離さないで！ 僕も決して離さないから！」

クラウスの両手はビビの足首を掴んでいた。

亀裂の真横で腹ばいになってビビの足首を掴んでいるクラウス。

ビビは亀裂の中に落ちながら宙づりで逆さまになりながら、しっかりとルーファスの片腕を掴んでいる。

そして、カーシャは。

「()ほっというて逃げるべきかどうするべきか……ここでルーファスを殺すのも惜しいな)」

最悪な考えで迷っていた。

それでも最終的にはカーシャも手を貸した。

カーシャはクラウスに手を貸して、ビビとルーファスを同時に引き上げる。

どうにか二人を引き上げて一息ついたが、周りの床は亀裂だらけだった。

さらに悪いことが起きてしまった。

何かが砕けた甲高い音。

それはカーシャの足下に落ちてきた。

「魔晶の欠片だ。もう限界らしいな」

「カーシャ先生まだ希望はあるはずだ！」

目の前の現実を見ればクラウスの言葉など虚しい。

ついにビビが泣き出した。

「ううっ……アタシが……うぐっ……ううっ……ぐ……」

ここを逃げ出せば終わりではない。

王都ごと消し飛ばせば、だれも生き残れない。

しかし、クラウスは希望の光を見た。

いや、それは現実の光が差し込む光景だった。

歪む空間。

カーシャは漏れ出してくる強烈なプレッシャーを感じた。

「ヤツだ」

魔法陣などを必用とせず、何者かが空間を越えてやって来る。

まず浅黒くしなやかな女の足が出た。

だがそれは下僕の足に過ぎない。

漆黒の翼を持ったボンテージの女 レディー・セルドレーダ。

そして、その胸に抱きかかえられた幼い童子。

「私の留守中にどこの誰だね、こんなことをしでかしたの
は？」

見た目は幼くとも、大人びた男の声。しかも、魔力が言葉の一つ一つに込められている魅言葉を常に操っている。

この男こそエセルドレーダの主人にして、クラウド魔導学院の学院長、そして世界でも三本の指に入ると謳われる魔人クラウドリーであった。

クラウドリーの視線はカーシャに向けられていた。

「ば、莫迦な、こつちを見るでない。さすがの妾もこんなことまではせんぞ……そこで死にかけてる金髪のにーちゃんが元凶だ！」

クラウドは一瞬だけビビの顔を見つめ、クラウドリーに向き直した。

「はい、そこにいる金髪の男が今回の事件、テロリストの首謀者で魔晶システムを破壊した張本人です」

「ほう」

と、クラウドリーは短く。

なにか察したかクラウドリーは？

しかし、それ以上の追求をクラウドリーはしなかった。

「まあよい。今はこやつを黙らせることが先決だ。エセルドレ
ーダ下ろしてくれ」

「御意」

丁重にエセルドレーダはクロウリーを下ろした。

クロウリーが自らの足で立つ姿は、ハイハイ歩きからやっと
立てるようになった幼児にも見える。

だが魔力が違う。

眼が見えないルーファスはそれをより強く感じていた。

身体の震えが止まらない。

眼ではなく、ほかの感覚で感じるクロウリーは、まるで巨人
がそこに立っているようだ。

カーシャが手に汗を握っていた。知る者が知れば、カーシャ
が汗を掻いたという事実は驚愕に値する。

「(人間ごときが……まさかなにをする気だ?)」

クロウリーの周りにマナフレアが発生する。これは協力的な魔
力が共鳴を起こしている証拠だ。さらにマナ風と呼ばれる魔力
の風が吹き荒れた。

地面が唸り声をあげて激しく揺れた。

魔晶が不気味に輝いている。

クロウリーの魔力に共鳴して魔晶がさらに暴走しようとして
いる！

指先から光を出してクロウリーが宙に魔法陣を描く。

「メギ・マフジオン！」

その呪文は今では伝わっていない古代魔法。

ありえない魔法が唱えられたことにカーシャだけが気づいた。「(シイラなど滅びた呪文……それ以前に人間が使えるわけがない!)」

しかし、呪文は発動された。

魔法陣は描かれたときよりも巨大に広がり、魔晶を丸呑みにしたのだ。

鼓動が静まった。

クロウリーは妖しく微笑んだ。

「アステア王、私が施した術は応急処置に過ぎない。魔晶システムの復旧には三日ほど頂きたい」

「たった三日で治せるのか!？」

「大目に見て三日。損傷具合を見て、材料調達もあるので早ければ一日半でしような」

「三日で直せるなら蓄えてある予備エネルギーで王都になんら支障をきたさない。助かるよクロウリー学院長」

「自分の庭が荒らされたら、早々に美しく整えるのが必定」

言葉を終えて、クロウリーの視線はビビとルーファスに向けられ、次の話題が続けられた。

「さて君たちの処分をどうするか……だが。魔晶システムを見られたからには生かしてはおけない」

「そんな!」

ビビは声をあげた。

だが、クロウリーの言葉には続きがあった。

「と言いたいところだが、私の愛しいローゼンクロイツの恨み

を買うのも心苦しい。ルーファス君、今後ともローゼンクロイツと仲良くしてくれたまえ。そしてビビ君のことも聞いている。ローゼンクロイツは異性の友人が少ないようだから、君も仲良くしてくれたまえ」

事件解決に貢献したからではなく、ローゼンクロイツの友人だからというのが理由らしい。

クロウリーは魔法陣を宙に描いて ゲート を開いた。

「お帰りはこちらだ。私はすぐに仕事に取りかかる、くれぐれも邪魔はしないでくれたまえ」

一目散にカーシャが ゲート をくぐった。

ビビもルーファスを連れて急ぐ。

「(なんか吐きそう……なにこの感じ)」

クロウリーの魔力に当てられたのだ。

クラウスも一礼して ゲート をくぐった。

ゲート の先は魔導学院の中庭だった。

すでに防御システムは解除されているようだ。

しばらくして ゲート の向こうから、ルビーローズとゴー

ルデンクルスが放り出されてきた。まだ二人とも息がある。

事件はすべて解決したのだろうか？

クラウスは廊下を歩くクラスメートを見つけて、ほっと息をついた。

無事に人質も解放されたようだ。

しかし、事件の余波はまだ残っている。

「早くルーファスたちを救護室に運ぼう。だれか人を呼んでく

るよ」

クラウスは近くにいる生徒たちに声を掛けに行った。

ビビは心配そうな顔をしているが、その表情はルーファスの瞳には映らない。

「ルーちゃんだいじょぶ？」

「泣きそうな顔しなくても平気だよ」

「見えてるの!？」

「ううん、見えてないけど声がそういう感じだから」

「え〜っ、そんなことないよぉ。アタシはいつも元気で笑顔のちよ〜カワイイ仔悪魔なんだから」

ビビは精一杯の笑顔をつくって見せた。

たとえルーファスが見えなくても、今ビビにできることは笑顔で居続けることだった。

第二二話 ルーファスエボリューション

《一》

壮大な音を奏でる目覚まし時計。

散らかって山積みになった物が今にも崩れそうだ。

そんな中でスヤスヤと寝息を立てているルーファス。

突然、部屋のドアが開いた。

「起きろルーファス！」

リファリスが部屋に飛び込んできたと同時に物の山が崩れた。

それでもルーファスは起きない。

目覚まし時計を握り締めたリファリス 次の瞬間！

「うるさい！！」

目覚まし時計が投げられた！

もちろん標的はルーファスだ。

顔面ヒット！！

「ばぎゃっ！！」

奇声をあげて飛び起きたルーファス。

痛そうな顔をしながらルーファスは目をこすった。

「（なんか頭がクラクラして目が霞む）リファリス姉さん……

起こしてくれるのはありがたいんだけど、もっとやさしく起こ

してくれないかな？」

「こつちだつて起こしたくて起こしてるわけじゃないんだ。わつちはね、あと三時間は寝たいんだ。それなのにいつもいつも、バカうるさい目覚まし時計の音で起こされて……たつく」

「そんなこと言うなら、ウチに泊まらなきゃいいだろ。姉さんいつまでウチにいる気？」

「いつまでいたつていいだろ。わつちの勝手だろ」

「……………（居候なのに態度がデカイ）」

建国記念祭のために帰ってきたリファリスだったが、祭りが終わっても未だに居座っている。

「（僕の悠々自適な一人暮らしが完全に壊されてる。かと言って面と向かつて出てけとは言えないわけで）」

ルーファスは溜め息を漏らした。

そう言えばリファリスが来てから、余計に家が汚くなったよ
うな気がする。

あと先にトイレへ入られたり、お風呂に入られたり、見たいテレビが見られなかったり、どんどんルーファスの生活が脅かされている。

「なんとかしなきゃ」

と、ルーファスは思わず口に出してつぶやいてしまった。

「なにをだい？」

「えっ、な、なんでもないよ！ 顔洗ってくるね！」

慌ててルーファスは部屋を飛びだそうとしたのだが、足下に
あった洋服の山に足を引っかけて大きく転倒してしまった。

「イッター！ 手ついたときにひねった……」

「ったく、ドジなんだから。ほら、早く顔洗ってシャキっとし
てきな」

「わかってるよお」

めんどくさそうにルーファスは言つて、ヨロヨロ歩きながら
洗面所に向かった。

洗面所で顔を洗い、目の前の鏡を見たルーファス。

「あれ？」

鏡に映った自分の顔をぼやけている。

もう一度、顔を洗ってから鏡を見てみた。

「あれ？」

まだぼやけている。

「おかしいなあ」

目を擦ってみてがかわりない。

「アーーーーーッ!!」

突然叫んだルーファス!

「どうしたルーファス!」

リファリスが駆けつけてきた。

どういふわけかルーファスの目が泳いでいる。

「べ、べつにたいしたことなんだ」

「いきなり家の中で叫び声なんてあげて、ビックリするだろ。
で、どうしたんだい？」

「それが……ちよつと視力が下がつちやつて、あははー」

「パソコンのやりすぎだろ」

「そうだね気を付けるよ」

「まったく人騒がせな弟だよ」

リファリスが去っていく。

その姿が完全に見えなくなっただけから、ルーファスはツバを呑み込んだ。

「(ちょっと下がったどころじゃないよ。一晩寝ればよくなるよ思ったに、ぜんぜんボヤけてるよ)」

口止めされているので、ルーファスはリファリスに本当のことを言えず誤魔化したのだ。

それは昨日、魔導学院で起こった事件だ。

相手の放った閃光魔法により、視力を失いながらも見えなくなつたルーファスだったが、病院での診察を断り、一晩寝れば大丈夫と自宅に帰ってすぐに寝たのだ。なにも見えなかつた昨日に比べれば、だいぶ見えるようになっていたが、目の前の鏡に映つた自分の顔がぼやけている。

「(みんなにも気づかれないようにしなきゃ。そうしないと病院に連れて行かれる)」

病院行けよ。

こうして視力が下がつたルーファスの一日がはじまるのだつた。

事件の翌日にはもう授業があるクラス魔導学院。

事件の大きさを隠蔽する理由もあるが、本当のところは単なるスパルタだったりする。テロという外部からの事件は滅多にあることではないが、内部での大事故などはそこそこあること

なので、そういう慣れもあって立ち直りが早いという理由もある。

学院の廊下を歩くルーファス。

向こうからツインテールの女の子がやって来た。

「おはようビビ」

「……………」

「黙っちゃってどうかした？（機嫌悪いのかなあ）」

相手の顔がなんとなく見えたとこでルーファスはハツとした。

「（ビビじゃないー）」

見事な見間違えだった。

ツインテールというところまでは同じだが、体重はルーファスの二倍くらいありそうで、ビビとは似ても似つかない女の子だった。

慌ててルーファスは誤魔化そうとした。

「あゝっ、ビビ、おはようビビ！」

遠くに手を振って、まるでそこにビビがいるかのように振る舞って、ルーファスは駆け出した。

ちなみにルーファスが手を振った方向にはだれもなかった。完全に変な人だと思われただろう。もしくは見えないモノが見えてる人。

誤魔化しきれなかったが、どうにかルーファスは危機を乗り切った。

教室に入ったルーファスは、周りに適当な挨拶しながら、自

分の席に座ろうとした。

が、その席には先客があった。

ここでルーファスは辺りを見回して気がついた。

「(自分の教室じゃない!)」

慌ててルーファスは教室を飛び出し、今度こそ自分の教室に入った。

周りの生徒を目を凝らして見る。クラスメイトたちに間違いない。

ほっとしながらルーファスは席に着いた。

すると、ツインテールの女の子が駆け寄ってきた。

思わずルーファスは身構えた。

「(本物のビビっ)」

さっきに失敗が思い出される。

「ルーちゃんおっはよ〜ん」

この声は紛れもなくビビだ。

「よかった……おはようビビ」

「よかったってなにが？」

「いや、べつにこっちの話」

「気になるよお」

プイツとした唇を尖らせた表情でビビが顔を近づけてきた。

ここまで近付くとちゃんとビビの顔を見える。

「べつにたいした話じゃないよ。ちょっとさっきビビと間違っ

て別の子に挨拶しちゃっただけだよ」

「(が〜ん、アタシと別の娘こを間違えるなんてショック)あは

はっ、そうなんだー」

ビビちゃん苦笑い。

そんなこともありつつ、この後もいつもどおり過ごしていたルーファスだったが、一時間目からトラブルが発生してしまっ
た。

「(字が……読めない)」

黒板に書かれた文字がよく見えないのだ。

ルーファスは隣の席に座っている生徒のノートをチラ見した。
「(こっちも見えない)」

他人のノートを写そうとしたが、こちらのほうがもつと見え
なかった。

そして、けっきょくノートを取れずに一時間目が終わってし
まった。

休み時間、席に座ってじっとしているルーファスは、青い顔
をして焦っていた。

「(ヤバイ、実技が苦手だから筆記でフォローしなきゃいけないのに、ノートが取れないなんて致命的じゃないか)」

「ねえ、ルーちゃんだいじょぶ？」

「(もしも筆記が赤点なんてことになったら……)」

「ねえってば」

話しかけているのはビビだが、ぜんぜんルーファスの耳には
届いていなかった。

「(退学とか留年とかになったら……父さんになんて言われる
か。今でも首の皮一枚って感じなのに、完全に絶縁になって国

から出て行けとか言われたでしょう(」

「ルーちゃん聞いてるう？」

「はあ……困ったなあ」

「ねえ、どうかしたの？」

「どうかしたもなにも……わっ、いつの間になっていたの!？」

ビツクリしてルーファスはイスから落ちそうになった。

「だいじょぶルーちゃん？」

「だ、ただ大丈夫だよ！ あははー」

「なに慌ててるの？」

「べ、べつに!」

「今日のルーちゃんなんか変だよお」

クリクリしたまん丸な瞳でビビが覗き込んでくる。

慌てたルーファスは話を逸らそうとした。

「えっと、次の授業はつと……(見えない)」

教室に張り出されている時間割表が見ない。

「次は錬金術の授業だよ。移動教室だから早く行かなきゃ遅れるよ？」

「そう、そうだった。うん、早く行こう」

教科書を持って席から立ったルーファスだったが、その袖をビビがグイッと引つ張った。

「ルーちゃんそれ錬金術の教科書じゃなくて、魔導史の教科書だけとお？」

「えっ!？」

普段からこーゆーミスが多いルーファスだが、今日は視力が

落ちたせいでミス連発だ。

ビビは心配そうな顔をしている。

「やっぱり変だよルーちゃん。なんかいつもよりドジっていうか、マヌケっていうか」

「(普段からそう思われてるのが軽くショックなんだけど)そんなことないよ、いつもどおりだよ(いつもどおりって言い方すると、いつもドジでマヌケってことを肯定することになっちゃうけど)」

「そうだね、いつものルーちゃんだよ(本当は心配だけど、ルーちゃんがそういうなら)」

「(うわっ、ショック。いつものって、ドジでマヌケってことじゃないか)そうそう、ビビの思い過ぎだよ。ほら、早く移動しなきゃ」

二人が教室を移動し終わると、ちようとチャイムが鳴った。すでに教室には錬金術教師のパラケルスがいて、すぐに授業がはじめられた。いつもパラケルスは時間に几帳面なので、少しでも教室に入るのが遅れるとアウトなのだ。

今日の授業は薬品の調査が行われた。

黒板に書かれたレシピを元に、ひとりひとり薬品を調合する。さっそくルーファスは黒板とにらめっこをしていた。

「(この培養液の中にこれを七口ツシ入れて、こっちは八三口ツシ入れるのか)」

液体の入ったフラスコに、二つの粉を入れてルーファスはよくかき混ぜた。

だんだんとフラスコが熱を持ってきて、なにやら煙が発生してきた。

「あれ……あちっ、あちっ！」

急激に熱くなったフラスコを持っていられず、思わず手を放してしまった。

ルーファスの手からフラスコが床に落ちる。

ドツカ〜ン！

バリーンとは割れずに、轟音を立てて起こってしまった小爆発。

辺りが煙に包まれた。

すぐさまパラケルススが近付いてきて、持っていた杖に煙を吸引させた。

「大丈夫かねルーファス？」

「げげげほっ……だ、だいじょうぶです。本当にごめんなさい」

「怪我がないならなによりじゃ」

パラケルススは柔和な顔をしているが、ルーファスの顔は文字通り真っ青。薬品で顔が青く染まってしまっていた。

周りからドツと笑いが漏れる。

いつものことにルーファスは肩を落として溜め息を漏らした。調査の失敗の理由は読み間違えだった。薬品の量を間違って読んでしまったのだ。

「顔洗ってきます」

と、言ってルーファスは教室を出て行った。

その背中を心配そうに見つめていたビビ。

「ルーちゃん」

ルーファスの後ろが姿は、なんだかいつも以上に肩を落としているように感じられた。

放課後になり、ルーファスの元へビビがやって来た。

「今日のルーちゃん、なんだかやっぱりいつものルーちゃんじゃなかったよ」

「そんなことないよ」

「あるつて。あつ、ローゼン！　ねえねえ、ローゼンもそう思うよねつ？」

ビビはふわふわと歩いていたローゼンクロイツに声をかけた。

「なに？（にや）」

「ローゼンも今日のルーちゃん変だと思わない？」

「ルーファスはいつも変だよ（ふにふに）」
バツサリ斬られた。

ルーファスはちよっぴりイヤな顔をする。

「君に言われたくないよ」
たしかに。

ビビは納得してないようだ。そんな顔をしている。

「うゝん、絶対今日のルーちゃんいつもよりもドジでマヌケだと思うんだよえ」

「ルーファスはいつもドジでマヌケでへっぼだよ（ふにふ

に」

「またもローゼンがバツサリ斬ってきた。」

「ひどくルーファスショック！」

「……そこまで言わなくても（自覚あるだけに胸がイタイ）」
「まだビビは納得していないようすでルーファスを見ている。
なにか理由をつけないと、いつまでもこうしていそうだ。」

ルーファスが視力を失ったあとのとき、ビビも近くにいた。
けれど、ローゼンクロイツはいなかった。事件の詳細は他言無
用とクローリーに圧力をかけられている。

ルーファスは詳細を省いて説明することにした。

「じつは視力が落ちちゃったみたいで、なんかここからローゼ
ンの顔もぼやあつとしちゃってるんだよね」

「一瞬、ビビは息を止めて驚いた顔をして、一気に大きな声を
出す。」

「だからちゃんと病院行つてつて言ったのに！！」

「寝れば治るかなあつて。実際、きのうよりは見えるようにな
ってるし、そのうち治るんじゃないの？」

「ルーちゃんのばか！ なんでちゃんと病院行つてくれない
の！」

「大丈夫だって、そんなに心配してくれなくても」

「軽く笑って見せたルーファス。ビビは怒りと心配が混じった
不安な表情をしている。」

「そして、ローゼンクロイツは恐ろしいまでに真面目表情をし
ていた。」

「なにかあったのルーファス？（ふーっ）」

口調は空に浮かぶ雲のようだったが、そのエメラルドグリーン
の瞳の奥で五芒星が妖しく輝いている。沸々と魔力が発動し
ているのだ。

目で見ることはできないが、ローゼンクロイツの変化をルー
ファスは肌で感じた。

「べ、べつにたいしたことないよ！（なんかわかんないけど、
なんだこのローゼンクロイツのプレッシャー）」

「もう一度聞くとルーファス（ふにふに）。なにかあったの？
（ふーっ）」

「えーっと、ちょっととした事故で視力が落ちちゃったみたいで
……」

「だからねルーファス（ふにふに）。ボクが聞きたいのは、ど
うしてそうなったのか聞きたいんだよ（ふーっ）」

ルーファスはたじろぎ答えない。
そこにビビが割り込んできた。

「ルーちゃんはきのう目の前で魔法を放たれて」

「待ったビビー！」

慌ててルーファスはビビの口を塞いだ。

このときビビはひどく辛そうな表情をしていた。

「（ルーちゃん……やっぱりあたしのこと庇って……。ルーち
やんの視力が落ちたのはあたしのせいなんだ、あたしのこと庇
ったりするから。なのに、そのことを言わないなんて、あたし
のこと庇ってくれてるんだ）」

あ のとき、ゴールデンクルスに飛び掛かったビビを止めようとルーファスがしなければ、ビビが視力を落としていたかもしれない。

だが、ルーファスはビビを庇っているわけではなかった。

「(本当のことローゼンクロイツに知られたら困るし、クロウリー学院長のクの字が出ただけでローゼンクロイツ機嫌悪くなるしなあ。それに視力が落ちたなんて言ったら、こうなるのはわかってたんだよ、病院行けっといわれるの。やだなあ、病院だけは行くたくないなあ)」

ただの病院嫌い！

ビビは落ち込んでいた。

「(あたしのせいで、あたしのせいでルーちゃんは……)」

でもルーファスは。

「(病院行きたくない、行きたくないなあ)」

そして、ローゼンクロイツは。

「きのこのテロが関係あるの？(ふにふに)」

「ドキッ！」

っとルーファスはした。

さらにそこにビビが涙ぐんでルーファスの胸ぐらを付かんで訴える。

「ルーちゃんお願いだから病院行ってよ！」

ルーファスはローゼンクロイツとビビに板挟み。

困ったルーファスは。

「そう言えば用事があったんだ！」

逃げた。

困ったときはとりあえず逃げる。

ルーファスの十八番だった。

《一二》

逃亡を図ったルーファスだったが、すぐビビが追いかけてきた。

「ルーちゃん病院！」

「病院なんて行かないよ、本当に大丈夫だから！」

逃げ続けるルーファス。

だが、本当に手強いのはビビではなくローゼンクロイツだった。

「ライトチェーン（ふあふあ）」

ローゼンクロイツの手から放たれた魔導チェーンがあっさりルーファスを拘束。

簀巻きにされたルーファスは身動きひとつ取れなくなった。

「ううっ……ひどいよローゼンクロイツ」

「ボクはひどくないよ（ふあふあ）。それよりも、ルーファスだれかに目をやられたの？（ふーっ）」

「まあ、そういうこともあったりなんかしたり」

そこへビビが割ってはいる。

「あたしのせいなの！ ルーちゃんがあたしのこと庇ってくれ

た代わりに……」

「詳しく教えてくれる？（ふにふに）」

ローゼンクロイツの瞳が妖しく輝いた。

こうしてビビは事件の詳細を語り、それが終わるとルーファスは酷く落ち込んだ。

「クロウリー学院長に他言無用って言われてたのに……」

溜め息を落としたルーファスをローゼンクロイツが見つめた。

「あいつに何を言われようと心配しなくていいよ（ふーっ）。ルーファスに手を出すようなことがあったら、絶対に許さないからね（ふーっ）」

いつもよりもローゼンクロイツが波立っていることにビビも気づいた。

「（もしかしてローゼン怒ってる？ ルーちゃんのことだから？ ルーちゃんとローゼンって……）」

こんな風にローゼンクロイツを感じたのは、ビビにとってはじめてだった。

ビビがルーファスやローゼンクロイツと知り合って、まだ一ヶ月も経っていない。出会ってからからは内容の濃い日々であったが、それでも二人の知らない一面もあるのだ。

ローゼンクロイツがビビに顔を向けた。

「それでゴルデンクルスはどこにいるの？」

「えっ、えーっと、どうなったのかなあのあと？」

ビビはルーファスに顔を向けた。

「私は知らないよ、目が見えなくてよくわかんなかったし」

二人ともゴールデンクルスのその後を知らないようだ。

ローゼンクロイツは斜め下に顔を向けた。

「ボクが傍にいればそんなことにはならなかったのに……目には目を、歯には歯を（ふっ）」

そして、ボソツとつぶやいた。

ビビはその発言を耳にしてしまつて寒気を感じたが、聞かなかったことにしてスルーした。

「そんなことより！ ルーちゃんを病院に連れて行かないや！」

「病院なんて行きたくないよ」

ルーファス拒否！

だが、ローゼンクロイツも同意する。

「そうだね、ルーファスをリューク国立病院に連れて行こう（ふにふに）」

「ヤダよ、あんな病院絶対行きたくないよ！」

ルーファス拒否！

でも、簀巻きのルーファスをビビが引きずつて動かす。

「ほら、早く行くよっ！」

「ヤダつてば、なんで病院なんかに、しかもリューク国立病院なんて絶対行かないよ！」

なぜリューク国立病院に行かなくていけないのか、そこにはちゃんと理由がある。そこんことをローゼンクロイツが説明する。

「魔導学院で起きた怪我や病気は提携しているリューク国立病

院が看ることになってるんだよ（ふにふに）。学割も利用できないし、あそこなら腕も確かだからね、絶対にルーファスの目はよくなるさ（ふにふに）」

「ヤダつてば、リユーク国立病院だけは絶対にヤダ、百歩譲つてほかの病院なら行くから、妥協してほかの病院ならいいから！」

だが、抵抗もむなしくルーファスはズルズルと引きずられた。

リユーク国立病院の診察室。

ルーファスは簀巻きからグレードアップして、ベッドに縛り付けられていた。そんな状況に追い詰められても、ルーファスは逃げようとジタバタ必死だ。

なぜなら。

「嬉しいよルーファス君。君が看て欲しいと言うから、今日の予約を全部キャンセルして予定を空けておいたよ」

甘く囁くような低い声。小さな声なのでちょっと聞き取りづらい。

ルーファスの顔を覗き込んでいるのは、蒼白い顔をした黒衣の魔導医ディーだった。

「（だからここの病院はやだったんだ）」

吐きそうなほど嫌そうな顔をルーファスをしていた。

リユーク国立病院に来たくなかった理由は、このディーが絶対にルーファスを見ることになるから。

病院自体に来たくなかった理由は？

「(病院に来るとあの夜のことか……)」

深夜の病院で起きた怪異。そして、その後の顛末である洗い立てのパンツ事件。あのことがキツカケで、病院というキーワードがトラウマになっていたのだ。

だからって、一晩して視力が多少回復したとはいえ、病院行けよって話である。そのまま失明する可能性だっただけであつたはずだ。なのに、ほっといてしまうテキストなどところが、部屋の散らかりようからもわかるルーファスクオリティだ。

身動き一つできないルーファスの顔にデリーの顔が近付いてきた。

「近いって、近い近い顔が近いよ！」

「ルーファス君の唾が私の顔に掛かっているよ。ところでルーファス君、唾の中にはどの程度の細菌が含まれているか、知っているかね？」

「そんなこといいですから、顔が顔が……っ!? (口が近い!)」

ルーファスは口をつぐんだ。

目と目が合う。さらに口と口もすぐ近くだ。キス寸止め状態。その光景を見守っていたビビはちょっとイヤそうな顔をしていた。

「(近い、近い、近いよこの二人……この副院長ってやっぱりそっち系!?)」

止めに入るか迷うビビ。

でもまだ未遂だ!

ただちょっと見つめ合っちゃって、口と口が触れあいそうなだけだ！

この展開にルーファスは冷や汗だらだら。

「(長い……長いよ、早く終わらせて顔を放して欲しいんだけど)」

ディーの瞳は少し赤みがかっている。そして、ルーファスの顔に吹きかかる息は冷たい。

三分間くらい顔が近付いたままで、やっと看終わったようでディーは顔を離した。

「ふむ。視力の測定をしてみよう」

ディーはそう言ってベッドを持ち上げた。

持ち上げた？

驚くルーファス。

「えっ、ちょっと、なに、なにする気!？」

決してもやしっ子というわけではないが、マッチョでもないディーがベッドを持ち上げて、なんとベッドを立ててしまった。ルーファスの視線は天井から壁へ、視力検査の表に向けられた。

と、その前に立ちはだかっていた空色の影。

ローゼンクロイツは独りで勝手に視力検査をしてルーファス放置をしていた。

「……右(ふに)。上、上、下、下、左右左右(ふにふに)」

だれも正解を答えてくれないので、検査にもなっていない。

ディーはローゼンクロイツを押し退かし、視力検査表の横

に立った。

「ルーファス君、以前の視力はいくつだね？」

「え〜つと（去年の健康診断で……）わかりません。とびきり良かったわけじゃないですけど、生活に困らない程度は見えてました」

「君の視力は右が一・〇、左が一・二だったと記憶しているが？」

「（知ってるなら聞かなくてもいいのに。というか、なんでそんなこと知ってるの？）はあ、そうなんですか」

おそろべしディー。

クラウス魔導学院の健康診断もこの病院が行っているので、きつとルーファスの詳細な診断書がディーの手元にあるに違いない。

白衣のポケットからディーは指示棒と取り出した。

「それでは右目から行おう。左目をつぶって、これがわかるかね？」

一・〇の並びのマークが指示棒で指された。

ルーファスは左目をつぶって、それをじ〜つと見つめた。

「見えません」

次々とマークが指されていく。

その度にルーファスは『見えません』と答えた。

ディーは指示棒の先端を床に向けた。

「では、次は左目だ」

言われてルーファスは右目をつぶろうとするが、頬が引きつ

ってうまく片目だけ閉じられない。

ものすごくブツサイクな表情になってしまっている。

「う……まく、つぶれないんですけど？」

「だれか目を押さえてやってくれないかね？」

ディーはビビとローゼンクロイツに顔を向けた。

ルーファスはベッドに拘束されているので、自分の手で目を隠すこともできない。

ビビが元気よく手を挙げた。

「はいはい、は〜い！ アタシがやりま〜す！」

さっそくビビはルーファスの目を手で覆った。

「……………」

ルーファス沈黙。

そして、ボソツと言った。

「なにも見えないんだけど？」

言われてビビはハツとした。

両手でルーファスの両目を隠してしまっていたのだ。

「ごめ〜ん！ 間違っちゃった、えへっ」

気を取り直して視力検査再開。

次々と指されるマークだが、やっぱり『見えません』の連続だった。

そして、検査が終わるとディーは深刻な顔をした。

「ふむ、両目とも〇・二以下だ。ここではこれ以下の検査はできないので、ほかの場所で精密な検査をしよう。そして手術だな」

「はっ？」

つと言ったままルーファスは固まった。

ルーファスの頭の中で『手術』という言葉がエコーした。

そして、ハツと我に返った。

「絶対イヤだよ！ 死んでもイヤだよ！ 手術なんてありえないよ、しかも目とか危ないじゃないか！」

ルーファスの頭に過ぎるニュース。王都のとある眼科で手術を受けた患者が次々と角膜炎を発症、視力が落ちた患者や失明寸前の患者まで出てしまった。当時まだ視力が悪くなかったルーファスは、『ふふふん』と思うだけだったが、その恐怖が今襲い掛かってきた。

妖しげにデイーは微笑んでいる。

「手術と言っても実に簡単なものだよ。もちろん私が執刀する」

「手術なんてしません！（しかもこの人が執刀したら、麻酔かけられてる間にどんなことされるか……怖っ）」

ちなみに通常、眼の手術は局部麻酔なので、あんなことやそんなことをされる心配はたぶんない。

ビビがルーファスを見つめた。

「視力が戻るなら手術したほうがいいよ！」

「人事だと思って、手術受けるの僕なんだからね！」

がくん、ビビちゃんシヨック！

ルーファスのためを思っていたのに、怒鳴られた。

落ち込むビビに代わってローゼンクロイツが促す。

「手術すればいいよ（ふあふあ）」

「ローゼンクロイツも人事だと思って！」

「うん、人事（ふあふあ）」

がくん、ルーファスシヨック！

投げたボールをそのまま打ち返された。

ディーがルーファスの目の前にまで近付いてきた。

「友人たちもこう言っているのだよ。今からすぐ手術をしようではないか」

「いやいやいや、気が早いですからディー先生。ちなみにその手術ってどんなものなんですか？」

「角膜をスライスして」

「はっ？ 絶対にありえないし、絶対に手術なんてしませんから！！！」

ルーファスはジタバタして暴れようとするが、拘束されていて身動き一つできない。

ディーはどこからともなく注射器を取り出した。

「手術中に暴れられると危険だから、全身麻酔にしよう」

笑った。ディーが妖しく笑った。全身麻酔なんてされて気を失つたら、なにかされる！

ルーファスは逃れるために必死だった。

「ヤダヤダヤダヤダーッ！」

叫んだルーファスが思わぬ力を発動させた。

魔力の暴走による爆発。

ルーファスを中心に小爆発が起き、ディーの身体が吹き飛ば

された。

「良い魔力だルーファス君」

爆発に巻き込まれながらディーは無傷。黒衣が多少焦げている。

思わぬ爆発にビビも驚いた。

「だいじょぶルーちゃん！」

そして、ローゼンクロイツは独りで視力検査！

「上上、下下、左右左右」

肝心のルーファスがベッドから解放され、さらにローゼンクロイツの魔導チェーンも破壊していた。

拘束を解いたルーファスはすぐさま逃亡。

「手術なんてイヤだーっ！」

診察室を飛び出したルーファスは病院の廊下を走った。

だが、前がよく見えずにいきなりだれかに大衝突！

ドン！！

看護婦が転倒。M字開脚でパンツ丸見えだが、今のルーファスにはぼやけて見えない。ちなみに純白のレース付きだ。

「ご、ごめんなさい！」

謝ってる相手が看護婦だったこともよくわかっていない。

すぐに後ろからはディーが追いかけてくる。

「そのの彼を捕まえる。麻酔を使っても構わない、怪我は絶対にさせるな」

ボソボソとした小さな声なので、周りのスタッフには届かなかった。

突然、ルーファスの頬を何かか掠めた。
まるでそれはダーツ。

ルーファスが振り返ると、ディーが注射器を投げてきた。
ビュン！

「うわっ！（注射器投げるとかありえないし！）」
さらにビュン！

ビュン、ビュン！

次から次へと投げられた注射器をかわすルーファス。
ディーは眉を細めた。

「私のダーツをかわすとは、良い瞬発力だルーファス君」
避けるのはだけは得意なルーファスだったりする。

ルーファスから外れた注射器は、そこらへんを歩いていたス
タッフや患者に刺さり、次々と深い眠りに落ちていく。

「なんでこんな人が副院長なんだよ！」
ルーファスは叫んで逃げた。

王都アステアでは実力主義なところがけっこうあるので、ア
レな人でもいいポジションにいる場合が多い。クラウス魔導学
院の教員もそんな感じだ。

とにかくルーファスは逃げた。
逃げて逃げて逃げまくるほどの被害拡大。

大量のスタッフが意識を失ったために、病院機能まで低下。
大惨事だ。

スタッフたちも必死でディーを止めようとする。
「副院長もうやめてください！」

「黙りたまえ」

デリーの投げた注射器にブスッとされて、止めに入ったスタッフも深い眠りに。

スタッフはルーファスを捕まえるグループにも分かれていた。

「大人しく捕まりなさい！」

でもなかなか捕まらないルーファス。

だって逃げるのは得意だから。

ついにイライラしてきたスタッフはルーファスに殴りかかってしまった。

そこへデリーの投げた注射器がブスッと、殴りかかったスタッフも眠らされた。

必死で逃げていたルーファスだったが、ついに廊下の端にまで追いやられてしまった。これ以上逃げ場はない。

この場にビビも追いついてきた。ちなみにローゼンクロイツは病院で迷子になっている。

ルーファスに迫るデリー。

「もう逃げ場はないよルーファス君」

「手術は……手術だけは……」

生唾をゴクンとルーファスは飲んだ。背中はまだ壁についてしまっている。

このままルーファスは一巻の終わりなのか!?

しかし、ここでルーファスはある言葉を叫んだのだ。

「メガネにしたいと思います!!」

言葉は瞬く間に廊下を駆け抜けた。

一瞬、デイーの動きが止まった。

「め、眼鏡だと……ルーファス君が眼鏡だと……眼鏡よりも私は手術を勧める！」

ルーファスの眼鏡発言は儂く散った。

手術を勧めるというか、このままだと強制手術展開だ。

だが、一瞬デイーが動きを止めたときに、ルーファスはすでにこの場を切り抜けて逃亡していた。

そして、ルーファスは病院からの脱出を成し遂げたのだ！

「ハアーツハアーツ、死ぬかと思った」

「ルーちゃんだいじよぶ？」

「大丈夫じゃないよ、あとちょっとで手術なんてされそうになつたんだから」

「あれ、ところでローゼンは？」

ビビは辺りを見回した。

この後、ローゼンクロイツは一時間かけて、病院ダンジョン自力で攻略したのだった。

《三》

リユーク国立病院で騒動があった翌日。

今日は学院も休みのガイアの休日で、ルーファスは目覚ましをかけずにスヤスヤ安眠。

のハズだったのだが。

「ルーちゃんおはよーぐると！」

部屋に飛び込んできたビビがルーファスの腹にエルボー！

「うげぶっ！！」

奇声を上げてルーファスがエビのように飛び上がった。

激痛で目を覚ましたルーファスだったが、目の前にいるビビがぼやけて誰かわからない。

「だれ？ リファリス姉さん……じゃないよね」

ルーファスビジョンでは、ビビの頭がちよつとカニっぽく見えている。ツインテールがハサミの部分だ。

「ちよ〜可愛い仔悪魔のビビちゃんに決まってるでしょ〜（やつぱり目よくなつてないんだ）」

「ああ〜、ビビか。つてなんで人の部屋に勝手に……」

「勝手じゃないよ、ちゃんとお姉さんに入れてもらったし」

「僕より先に起きてるのか……リファリス姉さん」

まるでいつも自分の方が先に起きているような言い方だが、いつも先なのはルーファスの目覚まし時計の音で起こされているリファリスだ。

朝　　と言つても昼近いのだが、元気ハツラツなビビちゃん。

「よしっ、張り切つてメガネ屋さんに行こーっ！」

「……めんどくさいよ」

テンションが低いルーファス。

「ルーちゃんもつと元気出さなきゃ一日がはじまらないよ！」

「低血圧なんだから仕方ないよ。きのうは遅くまでネットやつてたし（レベル二も上げられたし）」

まったく目をいたわる気ナツシング。しかもやってたのはおそらくオンラインゲームだと思われる。

だるそうにルーファスは上半身を起き上がらせた。無精全開なので、髪の毛が結わいたままだ。結わいたままで寝たせいで、ボサボサに毛羽立っている。しかも年季の入ったTシャツの襟がヨレヨレなのがチャームポイントだ。

ボリボリとルーファスは頭を掻いた。

「めんどくさいよ。眼鏡屋さんどこにあるか知らないし」

「それならちゃんと調べてきたよ！ そのお店今なら全品二〇パーセントオフだって！」

「ふ〜ん」

と言った直後に再び就寝。

「ルーちゃん起きて！」

「あと五分、いやあと一〇分、やっぱり一時間伸びている。」

「ルーちゃん起きてってば！」

身体を揺するが起きてくれない。

ビビちゃんエルボーはリファリスの目覚ましボールより効果が薄いらしい。

しばらくがんばったビビだが、大きく息を吐いてあきらめた。そして、部屋を出て行ってしまった。

部屋も静かになって安眠パラダイスに浸るルーファス。

だが、そこに恐怖が忍び寄っているとは思いつかなかった。ビビがりファリスを連れて帰った来た。

「起きろルーファス！」

リファリスはルーファスの両足首を掴んで、グルンと遠心力をつけて投げた！

投げた！ 投げた！ 投げたーっ！

カメラアングルが三カット切り替わるかのごとく三回言ってみましたが、投げられたのは一回です。

投げられたルーファスは壁に激突して、そのままマンガの山に落ちた。

「いつ……ててて……リファリス……姉さん……今のはちよつと……やりすぎ」

「ハア？ アンタがこんなカワイイ女の子を寝坊して待たせるのが悪いんだろう」

「（べつに寝坊したわけでもないんだけどなあ。勝手に家まで来たんだけど）」

あえて口には出さない。口に出したところで、リファリスを前にしたら意見は消されてしまう。

とりあえず目も覚めてしまったので、ルーファスは仕方なく出掛ける準備をすることにした。

「顔洗ってくるね。ビビはリビングで待つてて」

「うん、じゃあお姉さんとお昼ご飯食べてるね！」

「（ひとんちに押しかけて来て、昼ご飯まで食べる気なんだ。まるでカーシャだ）」

カーシャのほうがかつと厄介で、ルーファス宅にはカーシャ専用の食器が勝手に置かれていたりする。

昼食と身支度を済ませて、ルーファスとビビは街に出た。

王都での公共の移動手段はいくつかある。

十数年前に全路線が開通したアステア鉄道は、王都の外周を一周する路線にある四つの駅と、王都のほぼ中央にあるアンダール駅とが繋がっており、さらに外周の四つの駅からはほかの街への移動も可能だ。

もつと細やかな移動をするなら、乗合馬車だ。馬車は一定の路線を運行しているものと、自由に行き先を指定できるものとに分かれている。この馬車を引く馬は実際の馬ではなく、馬を模った魔導具である。なぜ馬の形をしているかというと、街の外観を損なわないための配慮である。

近年になって人口の増加などに伴い、乗合馬車を大幅に削減して、バスを導入する案が検討されている。

ルーファスとビビは馬車に乗って商店街までやって来た。

この場所は王都の中でも古くからの商店が建ち並んでいる場所、ここにあるドラゴンファングという鍛冶屋は王都アステアでも三本の指に入る名工がいる。

という場所でひととき目立つ新装開店の電飾。古くからの店が並んでいるとはいえ、たまには新参の店があったりする。

しかも、そのお店がビビの見つけてきたメガネ屋だったりする。ちゃんと二〇パーセントオフののぼりも出ている。

店内に一歩足を踏み入れると。

「おめでとうございます！」

店主がすっ飛んできて、こう続ける。

「開店から一〇人目のお客様でございます、コケッコー！
もしかして景品とかもらえちゃったりするんだろっか？

なんて淡い期待を抱くとか抱かないとかの問題ではなく。語尾に『コケッコー』がついてたとかいう些細な問題ではなく。

店主の顔が変だ！！

仮面舞踏会でよく見る鳥さんの羽根がいつぱいついた目元を隠すマスカレードマスク。よく見ると、目の穴にレンズがはめ込んであって……歴としたメガネだ！

「景品はとくになにもございませぬコケツ」

景品云々とかよりも、やつぱり語尾にも注目したくなる。

ちよつと帰ろうかどうか迷い出すルーファス。

「（このお店怪しすぎる……とくにこの店員なのかよくわかんない人が）」

でもビビはすでに店内を物色しはじめていた。

「ライブのときとかサングラスかけたらカッコイイかなあ」

さつそくビビは良さそうなデザインのサングラスを手を取っ

た。瞬間、店主が駆け寄ってきた。

「お客様はお目が高いコケッコー！」

「もしかして売れ筋のなの？ でも売れてるのだと、被っちゃ
うアタシの個性が引き立たないしー」

「いえいえ、なんとお客様が開店以来はじめて手に取った商品
でございますコケッコー」

新装開店で一〇人目の客ということなので、ほとんどの商品

がそうだろう。

「じゃあどこがお目が高いの？」

「お目が飛び出るほど高いの略でございますコケ」

「高いってどのくらい？」

「一〇万ラウルでございますコケ」

「高っ！」

自分の国に帰ればお金なんてどうとでもなるが、今のビビはなかなか貧乏だったりする。当面の生活費は、身につけていた高額なアクセサリーを売ってどうにかしたのだが、収入はゼロなのでそのうちお金が底を突く。

悩むビビちゃん。

「(来月から仕送りしてもらおうかなあ。でも家出したのに仕送りなんてカッコ悪いし。パパに頼んだら、お金じゃなくて国ごと奪ってやろうなんて言いかねないし。学費のこともあるし、ちょっとだけ、ちょっとだけママに仕送りしてもらおうつと)」

というわけで、現時点ではこのサングラスを諦めるしかない。ルーファスもメガネ選びをしていた。でも見つけたのは双眼鏡。手に取ると店主がすっ飛んできた。

「お客様、素晴らしい商品を手に取りましたねコケッコー」

「この双眼鏡そんなにいいの？」

「もちろんですともコケ。なんとその双眼鏡は他人の視界が見える双眼鏡なのですコケ」

「へえ」

と、ためしにルーファスが覗いた瞬間、見えてしまった光景は？

おっばい！

銭湯の女湯の光景だった。

「ぶはっ！」

鼻血ブー！

こういうことに免疫力のないルーファスだったりした。

「だいじょぶルーちゃん！」

すぐに床に倒れたルーファスにビビが駆け寄ってきた。べつの場所でもガネを見ていたので、なにが起きたのかさっぱりわからない。

ルーファスがうわごとつぶやいている。

「ジャングルが……秘境が……小高い山や巨大な山脈が……」

このヒントから店主は答えを導き出した。

「ジャングル探検隊の視界を見たコケ。それできつとおそろしい魔物に遭遇したコケ」

ある意味魔物だ。

いったいルーファスになにが起きたのかビビはまだわからない。

そこでビビも双眼鏡を覗いてみることにした。

「きゃーっ！」

叫び声をあげたビビ。

なんとビビが見たものとは……？

「ルーちゃんのえっち痴漢変態！」

ルーファスの視界（ビビのスカートの中）だった。

床に倒れていたルーファスから、たまたまビビのスカートの中が見えてしまったらしい。ちなみにピンクに白の水玉だ。

ここで店主が説明。

「見える視界はランダムですコケ。覗く度にどこかのだれかの視界が見えるコケ」

ルーファスの視界を当てたのは奇跡だ。

どうにか秘境から帰還したルーファスだったが、記憶がブツツリ途切れていた。

「あれ、ここどこ？」

そこからブツツリだった。

こんな店に新たな客が入ってきた。

「わあ、こんなところに新しいメガネ屋さんができてたんですね！」

登場したメガネっ娘にルーファスは見覚えがあった。

「あつ、ローゼンクロイツのストーカーだ」

その名もアイン！

アインの元へ店主がすっ飛んだ。

「おめでとうございます！ 開店から一二人目のお客様でございます、コケッコー！」

とか大騒ぎされると、やっぱりアインも期待してしまう。

「景品とかもらえるんですか!？」

「そんなのないコッコ」

この発言にアインは軽くショック。思わせぶりな店主だ。

アインは店内を見回した。

「(ほかの従業員は？ まさかこの変質者の仮面野郎さんしかない?)」

舞踏会でもないのにこの仮面はまさしく変質者！

まあ、店主が変態だろうと変人だろうと、ニワト……だろうが、商品がよければいいのだ。その商品も双眼鏡の一見で怪しいが、アインはそんなことなど知らない。

さっそくアインはメガネを手を取った。毎度おなじみのパターンで店主がすっ飛んできた。

「まさかそれをお選びになるとはお客様は通でございますコケッコー！」

「通とか言われるとちょっと良い気分ですね、下町っ子ですから。それでどんな風に通なんですか？」

「まずはそのメガネをお掛けになって、ちょっとばかり目の方に力を入れていただきますとコケ……」

「メガネを掛けてつと」

言われたとおりにやってみる素直ちゃん。

だが、次の瞬間、思わぬ悲劇が待っていた。

目から怪光線ドーン！！

アインの掛けた眼鏡からビームが発射され、ルーファスとビビの真横を向けて店の壁に大穴を開けた。ルーファスは腰を抜かし、ビビは凍り付いた。一歩ずれていたら死んでいたに違いない。

撃った本人も固まっている。

テンションが高いの店主だけだ。

「素晴らしいですお客様コケ！ まさかそのメガネをいとも簡単に使いこなしてしまうとは、そのメガネがお客様を選んだに違いないコケ。そこで特別に三〇パーセントオフで売って差し上げますコケッコッコー！」

「いりません！」

アインは目から怪光線メガネを元の場所に戻して、自分のメガネをかけ直した。

そろそろルーファスとビビは帰ろうと本気で思いはじめていた。

ルーファスは店内を見回した。

「まともなメガネあるのかな？」

「もしかしたらあるかもしれないよっ！（と、思ってもないことを言っちゃった）」

「そうだね、もう少し見てみようか」

「（あ、ルーちゃんに乗っちゃった）う、うん、そうだよっ！」

こうしてもうちよっただけメガネを見ることにした。

さっそくビビが自分用のサングラスを見つけた。

「あっ、このサングラスキュート（でもまた変なのだったり、高かったりして）」

さっそく店主がすっ飛んでくる。

「お客様、まさかその禁断のサングラスを手にとるとは怖い物知らずですねコケ、コケコケ……」

店主の音がちよつと震えていた。

ビビは固唾を呑んだ。

「禁断のサングラスつて……?」

「お掛けになればわかりますコケ」

禁断とか言われて掛けるのはちよつと勇氣がいる。

そこでビビはニツコリ笑顔でルーファスに手渡した。

「ルーちゃんきつと似合うよ!」

「えっ……そうかなあ? (なんか無理矢理押しつけられてる気が)」

そうです、無理矢理押しつけられています。

でも断ることのできないルーファス。さっそくサングラスを

掛けてみた。

「……………」

黙り込むルーファス。

ビビは心配そうな顔をした。

「どうしたのルーちゃん?」

「……なんていうか、真つ暗でなにも見えないんだけど?」

そう、サングラスを掛けた途端、視界が真つ暗。

店主が禁断の詳細を開かず。

「じつはそのサングラス……掛けるとなにも見えなくなるとい
う恐ろしいサングラスなのですコケッコー!」

それってただのアイマスクじゃ?

何事なかったようにルーファスはサングラスを戻した。

ビビはルーファス用のメガネも見つけていた。

「ルーちゃんこつち来て、このメガネとかどう見ても普通そうだし、掛けたら頭良さそうに見えるよ？」

「ホントだ、至って普通のメガネっばいね（これ掛けたら、頭良さそうに見えてみんなにバカにされなくなるかな？）」

バカっばい人が無理してメガネを掛けると、よけいにバカっぽく見える。メガネは自分にあつた物を選びましょう。

さっそくルーファスはそのメガネを掛けようとした。

そこにアインの接客をしていた店主が気づいて止めに入った。

「お客様そのメガネはコケツコツコーツツ！！」

だが、もうルーファスはそのメガネを掛けたあとだった。

とくに掛けたと言つてなにも起こらない。

ビビはニツコリ笑顔を浮かべている。

「ルーちゃん似合ううう」

「そうかなあ、ちよつと鏡で……か、あがががが……」

急にルーファスが全身を硬直させて、そのまま床に手をついてしまった。

「どうしたのルーちゃん!？」

ビビの叫びが店内に木霊した。

いったいルーファスになにが起こつたのかツ!

《四》

ルーファスはビビの前で膝をついた。

「こんな可愛らしいお嬢さん、今まで見たことがない。私の心は今、チョコレートのように甘く、そして少しほろ苦い恋に落ちてしまった!」

まさかルーファスの口からそんなセリフが出るなんて……。ビビは驚きのあまり声も出ない。

でも、ちょっと時間が経つてくると、ビビは顔を真っ赤にしてはにかんだ笑顔になった。

「えへへ、ルーちゃんどうしたの急に?」

「なんて素敵な笑顔なんだ。まるでひまわりのようだ……。いや、ひまわりを照らす温かい太陽の光のような笑顔だ。君は天使なのかい?」

「天使じゃなくて悪魔だけど……。え……。つと、なんだか恥ずかしくなってきた。まあ、ジョーダン言わないでよルーちゃん」

「ジョーダンなんて口が裂けても言わないよ。君は僕と出会うために生まれて来たんだ。運命というエンゲージリングが僕たちを結びつけてくれたのさ!」

あきらかにおかしい。いつもルーファスじゃない。そうはわかっていても、ビビは悪い気はしなかった。

ビビのニヤニヤが止まらない!

だが、次の瞬間にはルーファスがひざまずいていたのはアインの前!

「こんなところに女神様が!」

「えっ、わたしのことですか!? (ルーファス先輩……。頭でも打

「つたんじゃ？」

「その健康的な肌、身体、短い髪、健康美に溢れている。まさに自然の芸術だ！」

アインをくどくどルーファスを見てビビは白くなりかけていた。「ルーちゃん（あんな軽い男の人だったなんて……今まで知らずに過ごして来ただけなのかな……実家に帰ろうかなあ）」

ルーファスの新たな一面発見かつ！?

困ったアインは店主に助けを求めた。

「ルーファス先輩になにがあつたんですか!？」

「わからないコケ」

「わからないって、さつき必死で止めようとしたじゃないですか！」

「どんな眼鏡がわからなかったから止めたコケ」

そんなメガネを店に置くなよ！

店主が肩をすくめた。

アインが店主と話していると、再びルーファスはビビの元に戻った。

「どうしたんだい可愛らしいお姫様？」

お姫様というのは誉め言葉ではなく事実だ。

ビビがどんよりした空気を背負いながら、しゃがみ込んで動かさず口も開かない。

「黙っていはわからないよ。もしかして悩み事があるのかな？ ならば君の進むべき道を僕が示してあげよう。さあ、この舵を握って進路を取るんだ！」

ルーファスが親指で指し示したのは自分の股間だった。

「下ネタかっ!!」

閉鎖空間に入ってしまったているビビはツツコミもしないし、目の前にいるルーファスも目に入っていないかった。

「アインが駆け寄ってきた。」

「しつかりしてくださいルーファス先輩! (ここでルーファス先輩を正気に戻せたら、きつとローゼンクロイツ様の好感度があがるハズ!)」

「素晴らしい動機だ。」

「また逢ったね女神様。どうだい今夜は飲み明かそうじゃないか。君のためのこのボトルも空け」

「言わせませんよ!」

「アインは言葉を遮り、ルーファスの腕を掴んだ。」

「絶対にルーファスは自分の股間を指すつもりだった。」

「ルーファスに起きた異変。性格に変化が起きたことは明らかだ。原因はおそらくメガネ。」

「アインはルーファスのメガネに手を伸ばした!」

「だが、手を掴まれた。しかもただ掴んだだけではなく、互いの指と指をガツシリと組まれて離れない。」

「嗚呼、レディからダンスの誘いをさせるなんて失礼した。改めて僕からダンスを申し込もう。踊ってくださいますね、太陽の女神様」

「えっ、その……」

「とか口ごもっていると、無理矢理踊らされた。」

アインのダンスはぎこちなかったが、ルーファスは優雅に躍っている。

いつの間にか復活していたビビは、復活と共に冷静にもなつて、その状況は注意深く観察していた。

「ルーちゃんが踊ってる。運動神経のないルーちゃんがダンスなんて……？」

それもメガネの力なのか？

ビビはそらとルーファスの背後に近付いた。

「（メガネさえ奪っちゃえば……）」

そらと、そらと、ビビは気配を消して ルーファスに

飛び掛かった！

が！

ビビの両手がルーファスに掴まれた。

「君も僕と踊りたいのかい？」

アインが解放されて、次はビビとダンス。

足がもつれそうになるビビ。

「あつ、ちょ、待って……ああつ！」

はじめは見るも無惨な踊りだったが、ちょっとずつビビは可憐なステップを踏みはじめた。

まるでその一角は王宮の舞踏会。

ビビは幼い頃の思い出を浮かべていた。

「（社交ダンスの練習させられたんだった。先生がすっごいきびしくて、あのときは本当にイヤだったなあ）」

その練習がここで役に立っている。

気品漂う眼差しでルーファスが微笑んだ。

「まるで君の踊りは蝶の舞いのようだ」

「そんなこと言われると照れちゃうよお……あつ」

ビビの足がもつれた。

倒れそうになつたビビの腰を抱いてルーファスが支える。

見つめ合う二人。

唇と唇はすぐそこに……。

ビビは頬を赤らめた。

「（ルーちゃんの顔がすぐそこに……でも、でもでも、今のルーちゃんはいつのルーちゃんじゃない）」

「海の見える丘にある教会で結婚しよう」

「……えっ、ええええっっっっ！」

「夜はお祝いのボトルを」

「だめえーっっっ！」

ビビはルーファスを押し飛ばした。

尻をついたルーファスの瞳は輝いていた。

「なんて強い押しなんだ……押しの強い女性は嫌いじゃない

ッ！」

押しの意味が違うような気がする。

だが、次の瞬間にはルーファスの視線は、破壊されている壁の先を歩いていた若い女の子に向けられていた。

ルーファスが外の世界に飛び出した！

「貴女はマダルガスの絵画から出てきたのですか！」

マダルガスとは美人画で有名な画家の名前だ。

戸惑う女の子。

しかし、そんな女の子を放置してルーファスは近く似た女性をくどきはじめていた。

さらにほかの娘、ほかの、ほかの、ほかの、見境なくくどいている！

ルーファスの節操のない行動を見ていたビビの瞳がギラ〜ン！

イエローアイからレッドアイへ。

ビビは大鎌を召喚してルーファスに襲い掛かる。

「ル〜ウ〜ちゃ〜んツ〜！」

怒りに燃えている。ビビが怒りに燃えている。

「ばかぁー！ツ〜！」

大鎌がルーファスの首を狙う。

マジだ、マジでヤル気だ。

ビュン！

風を切った大鎌。

だが、ルーファスの首を斬れなかった。

目を丸くするビビ。

微笑んだルーファスは片手で大鎌を受け止めていた。正確には手にマナを集中させ、魔法壁で防いだのだ。

「殺したいほど愛されているんだね、僕は」

「……ルーちゃんのばかばかぁ！」

目だけではなく顔まで真っ赤にして、ビビは連続斬り！
だが、そのすべてを華麗にルーファスは受け止めた。

ビビは驚きを隠せない。

「(ルーちゃんが……強い!)」

しかしそう思ったの束の間だった。

酔っぱらったオツサンが近付いてきて、ルーファスをぶん殴ったのだ。

「彼女とのケンカなら別の場所でやれーッ！」

パンチを喰らったルーファスは地面に倒れてグルングルン回った。

倒れたルーファスにビビが斬りかかる。

「ばかあッ!!」

その一撃も素早く立ち上がったルーファスの手によって止められた。

再びそこで酔っぱらったオツサンが近付いてきた。

「だから別の場所でやれって言ってるだろーッ！」

オヤジの鉄拳!

またもルーファスは避けきれずに殴られ地面に倒れた。

この状況に入れずに見守っていたアインは、ある仮説を立てた。

「まさか……女の子には強くても、オヤジには弱い!」

あっ、ルーファスが逃げた!

オツサンから逃げた!

だが、逃げただけではない!

「君が美しすぎて立ち眩みが……」

それはきつとぶん殴られたからだ。

次から次へとくどいていたルーファスの足が止まった。その表情は驚きに満ちあふれている。

「後光が差している！」

その視線の先を歩いていたのは空色ドレスの麗人。

「まさに君こそ空に輝く真の太陽だ！」

ルーファスがローゼンクロイツをくどいたーっ！！

ビビ&アインショック！

大鎌がビビの手から落ちた。

「疑惑はあつたけど……あつたけど……あからさまにやおいなんて！！」

ローゼンクロイツのストーカーであるアインのショックも計り知れない。

「ローゼンクロイツ様の性嗜好に口出しなんて恐れ多いですけど、だれかのものになるなんて……許せません！」

アインは恋の炎を燃やした。

「ファイアーボール！」

炎の玉がアインの手から投げられた。

その攻撃を防いだのはルーファスではなくローゼンクロイツだった。

「ウォータービーム（ふにふに）」

一瞬にして炎は水に吞まれて消えた。

ローゼンクロイツの瞳は目の前のルーファスではなく、アインを見据えていた。

「おいたはダメだよ（ふあふあ）。ライトチェーン（ふにふ

に」

「ああんっ、ローゼンクロイツ様あ！」

アインは自らライトチェーンに巻き付いて簀巻きにされた。

ふあふあしているローゼンクロイツの前で、ルーファスはひざまずいていた。

「君には齒の浮くような飾った言葉なんて必要ない。君を表わす言葉はこの一言で十分だ　　莊厳！」

そう　　ごん【莊嚴】　　重々しくおごそかで立派なこと。威厳に満ちあふれているさま。

たしかにそのふあふあした感じは悟りの境地を開いたようにも見える。

その表情はアルカイツク・スマイル　　口の両端をかるく引き上げる微笑は、上機嫌や陽気や愉快といった感情を超越し、慈悲深い呪術的な神の領域の微笑。単純に若干アヒル口っぽいとも言えるが。

そのローゼンクロイツの口が言葉を言葉を紡ぎ出す。

「……呪われてるね、そのメガネ（ふにふに）」

エメラルドグリーンの瞳の奥で輝く五芒星ペンタグラムは多くを見通す。

さらにもう一言付け加えた。

「キミの名前は？（ふにふに）」

目の前にいるのはルーファス。ローゼンクロイツが知らないはずがない。

つまり……？

「嗚呼、なんとということだ。僕としたことが、己の名前を君の

心に深く刻み込んでもらうことを忘れていたなんて。僕の名前は愛の貴公子ことアル・ツヴァン三世！」

ルーファスじゃない!?

ビビとアインは大きな誤算をしていた。

ルーファスの性格が変になったのではなく、ルーファスの身体が別の人格に乗っ取られていたのだ。

どおりでローゼンクロイツが男だと知らずにくだいたわけだ。大鎌をしまったビビがルーファスの顔をまじまじと覗き込んだ。

「ルーちゃんじゃないの?」

「ルーちゃんとはこの身体の持ち主のことかい? 僕はこの身体を持ち主とはまったくの無関係の赤の他人の幽霊さ!」

おまけ付きならぬ、おばけ憑きのメガネだった。

「早くルーちゃんの身体から出てって!」

ビビは必死になってツヴァンのメガネを取ろうとするが、ヒラヒラリとかわされる。やっぱり女の子には強いらしい。

だったらローゼンクロイツならどうだ!?

でもローゼンクロイツはふあふあしているだけだった。

ビビはローゼンクロイツに顔を向けた。

「ローゼンも手伝ってよ、こいつをルーちゃんの身体から追い出して!」

「……めんどくさい(ふう)」

で片付けられた。

「まあ、ローゼンのばか!」

頬を膨らませたビビはひとりでなんとかしようかと奮闘。
でもやっぱりダメだ。

ツヴァンはルーファス以上にルーファスの身体を自由に操っている。息を切らせているのはビビだけだ。

ほんの一瞬、ツヴァンの動きが止まった。

ビビの手がメガネに伸びる。

バシッ！

その手は呆気なくツヴァンに捕らえられた。

「君に僕の自由は奪えない」

「ルーちゃんの身体から出てっ！」

「そんなにこの身体の持ち主が大事なのかい　この僕より

も！！」

「当たり前でしょ！」

そりゃ当たり前だ。

ツヴァンはルーファスの顔を借りて真面目な表情をした。

「君とこの身体の持ち主の関係は？」

「……ともだち。ただのともだちだけど、それがなにか？」

ちよつと怒ったような言い方だ。

「ただの友達か……まあいい。君が本当に僕にこの身体から出ていつて欲しいと願うのなら、一つ条件がある」

「どんな？」

「こんな僕だが、この世でただひとり……告白できなかった女性がいる。彼女に告白できなかったことで、僕は死んでも死にきれずに愛用していたメガネの呪縛霊となってしまうんだ。

条件は彼女を捜し出し、僕と合わせて欲しい」

呪縛霊になったいきさつは置いて、なんでそんなメガネ売ってんだよ！

ビビは条件を呑むことにした。

「うん、わかった。それでその女性の手がかりは？」

「運が良ければまだこの街に住んでいると思う。名前はクリスチャン・アリッサ」

少ない手がかりだ。

しかし、この名前に反応した者がいた。

「……知ってるよ（ふにふに）」

ただふあふあしてるだけじゃなくて、ちゃんと話を聞いていたらしい。

ツヴァンは驚いた。

「知ってるのかい!？」

「知ってるよ、どこで働いているか（ふにふに）」

「会わせてくれ、会わせてくれたら成仏でも何でもしてやる！」

必死に訴えたツヴァン。

「いいよ（ふあふあ）。そこに行く用事があったから（ふにふに）」

こうしてローゼンクロイツの案内でアリッサの元へ行くことになったのだった。

案内された場所は目と鼻の先だった。

アンダル広場を見下ろす聖リユーイ大聖堂。

この場所は観光のために一般開放されている部屋と、関係者以外立ち入り禁止の部屋に分かれている。

ローゼンクロイツが進んでいく先は関係者以外立ち入り禁止の場所。

先頭を歩くローゼンクロイツの姿を見ながら、ビビはとても心配そうな顔をしていた。

「あのローゼンが自信満々に歩いていく……絶対に迷うはず！」

方向音痴と言えばローゼンクロイツ。彼の知り合いだったらみんな知っている。

そして、ふとローゼンクロイツの足が止まった。

「……迷った（ふにゆ）」

やっぱり！！

わかっていた、わかっていた結果だ。なのにローゼンクロイツを先頭に歩かせたのが悪かった。

この場所にいるということまでわかっていたら、あとは簡単に見つかるかもしれない。聖リユーイ大聖堂に来たこと自体が迷った結果という可能性も捨てきれないが。

ツヴァンは近くにいたシルターに尋ねることにした。

「宗教画に描かれた天使のようなお嬢さん、クリスチャン・アリッサがどこにいるかご存じありませんか？」

「アリッサ様ならご自分の部屋でお仕事をなされていると思います。よろしければ部屋の目までご案内して差し上げましょう

か？」

「ありがとうございます。君のような美しい方にエスコートしていただけるなんて、僕は天の階段を昇る心地です」

ぜひとまささと駆け上って成仏して欲しいものだ。

シスターに案内され、ついに部屋の前まで辿り着いた。

ツヴァンはノックをすると、返事も待たずに部屋の中に飛び込んだ。

「僕が本当に愛していたのは君なんだ！！」

その視線の先には枯れ枝のようなバアさんが……。

ローゼンクロイツはペコリと頭をさげる。

「こんにちはアリッサ様（ふあふあ）」

どうやら本物のアリッサらしい。

どこからともなくピュ〜と風が吹き、ツヴァンは白くなった。アリッサは笑った。

「ふあふあふあつ、わしもまだ捨てたもんじやないみたいだね。若い子に誘われたんじゃ、デートのひとつもしてやらんとな」

骨と皮の腕がルーファスの腕に回された。

このときルーファスは呪縛から解放されて意識を取り戻した。「えっ、なに、どうなってるの!?(なにこの満面の笑みのおばあさん!?)」

アリッサに連れられてルーファスは行ってしまった。

呆然と立ち尽くすビビ。

「どーゆーこと?」

どうやらもうツヴァンは消えたらしい。

ローゼンクロイツは床に落ちていたあのメガネを拾い上げた。「昔はずいぶんと美人だったらしいよ（ふにふに）」

そう、じつはツヴァンが生きていたのは何十年も昔のことだったのだ。

愛した相手の変わり果てた姿。

共に同じ時間を過ごしていたら、違う結果になっていたかもしれない。

呪縛霊とは時間に取り残された存在なのである。

一方そのころ、どっかの道ばたでは。

「助けてくださいローゼンクロイツさま〜ん！」

アインは簞巻きにされたまま放置されていた。

第一三話 パンツに願いを

《一》

運命の日。

珍しく凜とした表情をしているルーファス。

その前には薄ら笑いを浮かべるファウスト。

しんと静まり返った召喚実習室。

ルーファスが息を呑んだ音が響いた。

そして、ファウストが重々しく口を開く。

「わかつているな？」

強烈なプレッシャーを含んだ声だった。

ルーファスの顔から滝のような汗が流れた。

「や、やっぱり今日はやめにしませんか？」

「ならば即、赤点決定だ！」

「……ですよねえー（ぐすん）」

温情に温情を重ねて、どうにか追試を受けられることになった。

これまでの失敗を考えれば、とつくに愛想を尽かされ、不合格にされているところだ。

そこをなんとか、不慮の事故ということ、追試に追試を重ねてきたが、さすがにそろそろ次はない。ファウストがそうい

うプレッシャーを放っているのだ。

ここでルーファスの召喚戦歴を振り返ってみよう。

九月四日シルフ　普通に召喚失敗で、追試が決定。

九月七日ハリユク　呼んでもないビビを呼びだしてしまう。

九月二二日ガイア　練習中に未知との遭遇をしまい王

都を巻き込んだ事件に発展。

九月二三日ノーム　呼んでもないビビの母親を呼び出して

しまう。

一〇月二日ノーム　呼んでもないユーリを呼びだしてしまう。

ユーリとは諸事情から地元を飛び出した女装ツ娘なのだが、ルーファスは未だにユーリが男ということ知らなかったりする。現在ユーリはカーシャの偽装工作によって、クラウス魔導学院に編入手続きをしている最中だ。詳しくはマ界少年ユーリを読んでね！

そして、本日一〇月四日シルフ。発端となった召喚試験から一ヶ月。ルーファスにとっては、怒濤の流れで過ぎ去る早いよな、内容が濃いために遅いような一ヶ月だった。

ファウストが一枚の契約書をルーファスの顔面に突き付けた。

「ここにサインするのだ！」

「……え？（これってファウスト先生お得意の悪魔の契約書じゃ）」

「今回の追試はいかなる理由があろうとも、失敗は許さん。言い訳ができぬように、ここにサインするのだッ！」

ファウストの気合いに押され、物怖じしたルーファスは契約内容をよく読まないでサインしてしまった。

満足そうに微笑んだファウストは、すぐに契約書をしまっってしまった。

サインをしまっけて、時間が経ってからルーファスはじわじわと恐怖が湧いてきた。

「……しまった（とんでもない契約書にサインしちゃったよ。カーシャとのやり取りを見てれば、取り立ての厳しさは知ってたのに）」

「では召喚の準備に取りかかるのだ」

「いや……心の準備が……」

「何度目の追試だと思っているのだ。心の準備など無用だろう！」

「は、はい！ 今すぐに取りかかります！」

焦って準備をはじめめるルーファス。この焦りが失敗に繋がらなければいいが……。

召喚の成功率を高めるための魔導具を並べ、魔力が注入されている召喚用の水性ペンキのバケツに巨大な筆を浸けた。

「用意できましたファウスト先生！」

「うむ、準備だけは上達しているようだな」

「魔法陣もテキストを見なくてもバツチリ描けます！」

「自慢できるほど難しい魔法陣ではないぞ。初歩の初歩の魔法陣だ。あんなもの、空で描けて当たり前だ」

「ですよねえー」

一氣にルーファストーンダウン。

「どんどん自信が失われていく。」

「なんかもう召喚術とか一生成功する気がしないんですけど」

「召喚士サマナーに弱気は禁物だ。召喚相手によって、こちらの態度を変えることは、契約成立の大きな要素である。無償の契約となれば、なおさらこちらの態度が重要なことを忘れるな。力に従う者には威圧や武力で接する必要がある」

「武力とか威圧とか苦手なんですけど」

「ならば、はじめから友好的な相手を召喚するのだな」

呼び出したい相手をちゃんと呼び出せるなら、これまでの失敗だってなかった。

なかなか魔法陣を描き始めないルーファス。ペンキが乾いてしまいそうだ。

ファウストが痺れを切らせる。

「早くしろ」

「トイレ行っちゃダメですか？」

「却下だ」

「追試内容をレポート提出とか変更できませんか？」

「却下だ」

「そこをなんとか……」

「ならんな。召喚を成功させる以外は認めん」

だが、ここでファウストは悪魔の笑みを浮かべて続ける。

「しかし、私とて悪魔ではない。サービスしてやろう」

「どんな？」

「どんなモノを召喚しようと、使役できたら合格にしてやる。もしも魔王級を使役できたら、A++をやってもいいぞ、クックッ」

また不慮の事故で予期せぬ相手を召喚してしまったも、とにかくその相手と召喚しろというのは、ある意味難易度が上がっているような気がする。最悪、生き物ですらないものを呼びだしてしまつたら、使役とか契約以前の問題だ。

けれど、呼び出す相手によつたら好条件で物事が運ぶかもしれない。

ルーファスは思った。

「(人なつっこい犬でもオツケーなのかな?)」

オツケーだとしても、犬を呼び出す魔法陣を知らなきゃダメだ。もちろんルーファスは知らない。そもそも、今回の試験では、召喚するものは固定されている。

固定されているのにも関わらず、違うものばかり呼び出しているから、追試に追試なのだ。

ルーファスは意を決して魔法陣を描きはじめた。

「よし、どんなものでドンと来い！」

固定されているのに、なにが飛び出すかわからない気満々だった。

魔法陣を書き終え、ルーファスが詠唱をはじめようとしたとき、実習室のドアが開いた。

「こちらが召喚実習室になります」

部屋に入ってきたのは事務員の女性と、そのあとに続いて来

たユーリだった。

事務員はファウストと目が合って慌てた。

「使用中でしたか、失礼しました。編入生に校内を案内していたところでして」

「まだ準備中だ構わん。せつかくだから、見学して行くがい」

ルーファスが目を丸くした。

「はっ？」

ただでさえ失敗確率が高いのに、見学者なんかいたら、ルーファスは緊張でさらに失敗してしまう。

活発そうでボーイツシュってゆーか、じつはボーイなユーリが瞳をキラキラさせた。

「見学させてもらえるなんて嬉しいです！（オーデンブルグ家の家訓　とりあえず人の好意は笑顔で受けとけ！）」

ぶつちやけ見学自体はどーでもいいと思ってるユーリだった。慌てるルーファス。

「見学なんてダメダメ、ダメ！　ファウスト先生、もしものことがあつたら大変ですよ！」

「失敗しなければいい話だ、ククッ」

その笑いは成功すると思つてない感じだ。

さらにユーリも白けた眼でルーファスを見ている。

「（あの人そーとー使えないし、失敗確実っぽいなあ。事故に巻き込まれないようにしなきゃ。あつ、軽く巻き込まれて損害賠償請求するっていうのも手かも）がんばってルーファス！」

心のこもってない応援だった。

ルーファスはプレッシャーで押しつぶされそうだった。自分に集まる視線から逃れられない。その視線の一つが『早くしろよ』という感じで睨んでいる。

ビビるルーファス。

「(怖いよユーリ。なんか僕にだけキツイ気がするんだけど……気のせい?)」

きつとそれは気のせいじゃない。

ユーリは事務員に眼を向けられた途端、スマイルを浮かべた。もちろん営業スマイル。

犬は群れの中で格付けをする。それはあくまで本能によるものだが、ユーリは打算でそれを行っている。そーゆー子なので、ユーリちゃんは。詳しくはマ界少年ユーリを読んでね！

追い詰められたルーファスは、前へ進むしかなかった。

もうすでに魔法陣は描き終わっている。

「じゃあ呼び出しますから、行きますよ、行くからね、行っちゃうよ?」

「早くしろルーファス!」

踏ん切りの付かないルーファスにファウストの叱咤が飛んだ。

急かされたルーファスは勢い任せに召喚した。

「出でよイ」

まだ最後まで言葉を発していないというのに、魔法陣が輝き何かが空間の歪みから飛び出してきた。

「「大当たり!」」

と声を合わせながら現れたぶかぶか浮いた二つのシルエット。召喚されたのはピエロのような衣装を着たちっこい少年少女だった。

啞然とするルーファス。

「……失敗した」

また予定外のことを召喚してしまったのだ。

だが失敗は失敗でも、不合格と決まったわけではない。

ファウストが口を開く。

「使役できたら合格だ」

そうだ、まだチャンスはあるのだ！

ルーファスはさっそく契約交渉をしようとした。

「ともだちになってください！」

友好による契約交渉だった。

ピンク衣装の少女がイヤそうな顔をした。

「キモイ」

ブルー衣装の少年が笑った。

「ぶぶつ、ダッセーメガネ」

メガネデビューしたばかりのルーファス。レンズはグルグル渦巻く分厚いもので、メガネによるイメチェンのマイナス効果を引き出してしまっている。

ルーファスはめげずにがんばる。

「ともだちになってください！」

「……しゅん。」

友好による交渉は無理そうだ。

ルーファスは気負いを入れてがんばる。

「こ、この野郎、私の言うことを聞いてくださいコンチキショ
ー！」

たぶん威圧したつもりなのだろうが、ぜんぜんなっていない。

少女は少年と顔を見合わせた。

「変な奴に呼び出されちゃったけどどーするーリリ？」

「決まりなんだからしかたねえーだろ。さっさとゲームしよう
ぜルル」

少女のほうがりリ。

少年のほうがるル。

ゲームとはいったい？

ユーリがハツとして眼を丸くした。

「思い出しました！ 伝説の妖精ユニットに違いありません。

性格が悪いですが、運良く召喚できた者には幸福を訪れるとい
うケツタツチンです！」

ファウストが頷いた。

「うむ、たしかにケツタツチンのようだ。私もはじめて見た」

幸運を訪れる妖精ケツタツチン。

ということとは？

「私に幸運を訪れるってこと!？」

ルーファス興奮。

チツチツとリリが舌を鳴らした。

「呼びただけじゃダメだぜ。オレとルルのケツを触れたら、
どんな願いでも叶えてやるよ」

「簡単には触らせないけどー」

ルルはお尻を突き出し、スカートから覗いたパンツをフリフリ振った。いちごパンツだ。

女の子のお尻にタツチなんて、痴漢プレイだ！

そんなことルーファスにできるはずがない。

「でも触れれば追試に合格できるんだ」

どんな願い事でも叶うというのに、欲がないのか、目の前のことしか見えていないルーファス。

だがユーリが違った。

大いなる願いを込めてルルに飛び掛かった。

「アタシは！（本物の女の子になりたい！）」

ユーリの手が宙をつかむ。いちごパンツまであと一歩で逃げられた。

「きゃはは、捕まえられるもんなら捕まえてみな。ウチのお尻だけ触っても願い事は叶わないよ。ほら、リリが逃げちゃうよ」

リリは宙を飛びながら部屋の外に出ようとしていた。その後ろ姿は中身丸見え。リリもスカートのような衣装になっていて、空飛ぶ後ろ姿は丸見えなのだ。赤いふんどしが。

愕然とシヨックを受けるルーファス。

「あ、あんなの触りたくない！」

男がふんどし姿の男のケツを触るなんて、変態行為だ。

ルーファスは痴漢にも変態にもなれず、もはや断念しようとしていた。

しかし中間のユーリはどっちもイける口だった。

「絶対に捕まえてやる！（そしてアタシは女の子になる！）」

どっちのケツを触ることに躊躇なし！

部屋を出て行った妖精たち。それを追ってユーリも姿を消した。

残されたルーファスの眼前に羊皮紙が突き付けられた。

「ルーファス、契約を忘れたとは言わせんぞ？」

ファウストと交わしてしまった悪魔の契約。

「べつに言い訳とかしませんよ。もう不合格でいいです」

「ならば契約に基づいてあることをしてもらうが、いいな？」

「へ？ 言い訳させないための契約じゃ？」

「予定外のモノを召喚し、それに対処できなかったときの契約だ。そう契約書には書いてあったはずだが？」

……勢いでサインしちゃったから読んでない！

が〜ん。

ルーファスシヨック！

「そ、そんなあ」

いつか悪徳商法に引つかからないかと、ルーファスのことが心配になる。

しかし、ルーファスに残された道はまだある！

あの妖精を使役できればいいのだ。

てっとり早い方法は、お尻に触って願い事を念じる。

「がんばろう。お尻に触るだけでいいんだ。でもやっぱりムリですよファウスト先生。男の子のお尻はがんばって触りますけ

ど、女の子はちよつと」

「こんなところで油を売っているヒマはないぞ」

「なんでですか？」

「編入生もそうだが、事務員も眼の色を変えてケツタツチンを追って行ったぞ。学院中に噂が広まるのも時間の問題だろう」

どんな願い事も叶えてくれる。そうなったら、だれもが眼の色を変えて妖精を追いかけられるだろう。

さらにファウストは付け加える。

「ケツタツチンに願いを叶えてもらえるのは一人だけだ。願いを叶え終えたケツタツチンはすぐに姿を消してしまうのだ」

「ますます急がないとダメじゃないですか（ますます合格できる気もなくなってきた）」

「わかつたら早く行け」

「ファウスト先生は行かなくていいんですか？」

「もちろん行くに決まっているだろう！」

行くのか！

ルーファスを置いてファウストも部屋を飛び出した。

独り召喚実習室に残されたルーファスも慌てて妖精たちを追った。

《一一》

急いで召喚実習室を飛び出したが、もちろん妖精たちを見失ってしまったルーファス。

とりあえず辺りを探してみると、廊下の壁にらくがきを発見した。

リリ様参上！

と、スプレーかなにかで描かれたらくがきは、若気の至り臭がぶんぶん臭っていた。

「本人が描いたのかな？」

学校関係者でこんな大胆なマネをする者はないので、とりあえずあの妖精の仕業に間違いないだろう。

ここから妖精はどこに向かったのだろうか？

ぼーつとらくがきをルーファスが眺めていると、だれかが後ろから近付いてきた。

「あーっ、ルーちゃん壁にらくがきなんてイケナイんだあ！」

「わ、私じゃないよ！」

ルーファスが振り返った先にいたのはビビだった。

「わかつてるよ、ルーちゃんにこんな大胆な犯行できないもんね」

「あの妖精が描いたんだよ、きつと」

「あの妖精？」

「召喚の追試で……」

「もしかしてまた失敗しちゃったのお？」

「で、でもまだ不合格って決まったわけじゃないんだ！」

「ふ〜ん（もう召喚とか一生しないほうがいいんじゃないの。

また騒動にならなきゃいいけど）」

騒動にならないわけがない！

そーゆー期待をルーファスは裏切りません！

少なくともルーファスを含めた四人が、妖精と追いかけてくをしている。この輪が広がれば大騒動に発展するのは間違いない。そして、ここでビビと出会ってしまったために、ビビの参戦フラグが立ってしまった。

ルーファスは騒ぎが大きくなる前に、さっさと事態を收拾しなきゃいけない。参戦人数が増えれば増えるほど、ルーファスは不利になっていく。

「じゃ、私は追試の続きがあるから！」

駆け出したルーファス。

「ちよつと待って！」

ビビが呼び止めた。

「そつち召喚室じゃないよ？」

首を傾げたビビ。

「逃げ出した妖精二人組を捕まえなきゃいけないんだよ。召喚は失敗したけど、使役できたら合格にもらえるんだ」

「だったらあたしも手伝うよ！」

「ホントに!？」

「うんうん、だってルーちゃんに合格して欲しいもん」

「ピンクの服を着た少女の妖精と、青い服の少年の妖精なんだけど、空を飛んでるから見たらすぐわかると思うんだけど、とにかく二人を捕まえて欲しいんだ。それで私が二人のお尻に触って願い事をすれば、どんな願いも叶えてくれるから、それで追試試験を合格にしてもらおうと思って」

キラ〜ンとビビの眼が妖しく輝いた。

……しまった。

うっかりルーファスは全部説明してしまった。

「願い事が叶うってホント？」

「そ、そんなことを言っていないよ！」

慌ててルーファスは否定するがもう遅い。

「絶対言ったもん。でもお尻に触るってどーゆーこと？」

「二人組の妖精のお尻を触るっていうのが、願い事を叶えてくれる条件らしいんだ」

「ルーちゃんのえっちな」

「しょ、しょうがないでしょ！ そーいう条件なんだから！」

否定したにも関わらず、質問に答えてうっかり認めたま同然。

ビビはヤル気満々だった。

「あたしも願い事叶えてもらおうと」

ルーファスを置いて駆け出したビビ。

「ビビー！」

急いで呼び止めようとしたが、もうビビはどっかに行ってしまった。

こうやって騒ぎはどんどん大きくなっていくのだ。

ライバルがまた独り増えてしまって、ルーファスはグズグズしてられない。

一刻も早く妖精を見つけたいが、手がかりもない。

廊下の向こうから女子生徒二人が雑談しながらやって来た。

「今の話本当かな？」

「本当なら、さっき見つけたときに触っておけばよかったー」

「でも一人だけじゃダメなんでしょ？」

まさかこの話って？

ルーファスは二人に声をかける。

「あのちよつといい？ その話ってもしかして妖精のお尻に触るとって話？」

「そうですけど」

肯定されてルーファスシヨック。

すでにウワサが広まってしまっている。

慌てるルーファス。

「その話だから聞いたの!？」

「ピンク色のツインテールの子からですけど。妖精を見なかったって聞かれて、願い事の話をしてくれました」

ビビだ。

ウワサを広めるのが早すぎる。このペースでビビが生徒たちに聞いて回ったら、あっという間に学院は大騒ぎになりそうだ。不幸中の幸いは、放課後で生徒たちが少なくなっていたことだろう。

しかし、妖精たちが学院の外にまで飛び出したら、ウワサもいつしよに街に飛び出してしまふ。

ルーファスは二人の女子生徒に頭を下げた。

「ありがとう、じゃ！」

急いでルーファスは駆け出した。

女子生徒たちと別れてから、ルーファスはハツとした。

「慌てて妖精をどこで見たか聞き忘れた」

闇雲に探すよりも聞き込みをしたほうが早そうだ。きつと追いかけてこをしている姿は目立っているだろう。けど、人に尋ねるときは、願う事のは伏せたほうが良さそうだ。

という考えは甘かった。

ルーファスは新たな壁のらくがきを見つけた。

デカデカと描かれているリリとララの似顔絵に添えられている言葉。

ウチらのお尻にタッチできたら、どんな願いも叶えてあげるよ（ハートマーク）。

「似顔絵……うまい」

そんなとこに感心してる場合じゃないぞルーファス！

辺りを見回すと、そんな感じの参加者を募って煽るようならくがきがいっぱいあった。

妖精たちにとってはゲームなのだ。

中庭から声が聞こえてきた。

「おい、妖精見つかったか？」

「いちごパンツなのは確認できたけど、触る前に逃げられた」さらに別の生徒がその輪に駆け寄ってきた。

「ファウスト先生が妖精を捕まえようとしたところに、カーシヤ先生が乱入して大騒ぎになってるらしいぞ！」

その話を遠くから聞いたルーファスは青い顔をした。

「またカーシヤったら……はあ」

犬猿の仲の二人はいつも顔を合わせるとそうだ。

こうやってどんどん騒ぎは大きくなっていく。

再びルーファスが搜索を開始しようと足を一步出すと、ちょうど校内放送が流れてきた。

《全校生徒のみなさんお知らせします。妖精が校内に紛れ込んでいますが、くれぐれも捕まえようとしないでください。生徒のみなさんは節度のある行動を心掛けてください》

騒ぎは驚異的なスピードで広まっているらしい。校内放送で注意がされるほどだ。

廊下で地鳴りがした。

ルーファスは眼を丸くした。

ララがこつちにやって来るではないか!?

またとないチャンスだが、その後ろからはトップを走るユーリと、その後ろにはバツファローの群れのような生徒たち。

ルーファスは命の危険を感じた。

「こつち来ないで!」

ドドドドドドド!

生徒の群れに呑み込まれたルーファス。

「ぎゃあああああゝ」

ルーファスの悲鳴も足音の地鳴りに呑み込まれる。

ドドドドドドド!!

欲望に駆られた生徒たちに眼中にはルーファスなど映っていなかった。

生徒たちが去った廊下には、服がボロボロになって潰れたルーファスが残されていた。

「うう……みんなヒドイよ」

そんなルーファスに手が差し伸べられた。

違った。

手を差し伸べるのではなく、襟首をつかまれて強制的に立たされた。

「妖精はどこだ？」

尖った氷のような脅すように尋ねてきたのはカーシャだった。

「ファウスト先生ともめてたハズじゃ？」

「ヤツと遊んでいるヒマなどない。足止めしてさっさと逃げて来たところだ」

どんな足止めをしたかわからないが、ファウストもなかなかの使い手だ。きつとすぐに復帰してくるに違いない。そうなたら、同じ妖精を追いかけてカーシャと張り合うことになるだろう。そしてまた鉢合わせしたら、甚大な被害が出ることは間違いない。

校内で攻撃魔法を容赦なくぶつ放すダメ教師には困ったものだ。それでも首にならないのは、実力主義のクラウス魔導学院の人事ならではだろう。つまりカーシャもファウストも、かなりの実力者ということだ。

クラウス魔導学院には教師以外の生徒も、かなりの実力者が勢揃いしている。

つまり今回の騒ぎが多くなれば実力者たちも参戦して、ルーファスのライバルがどんどん増えてしまう。ルーファスの追試合格なんて絶望的だ。

ギラリとカーシャがルーファスを睨んだ。

「わかつているなルーファス？」

「えっ……なにが？」

「妖精を捕まえたなら妾の前に差し出すに決まっているだろう」

「（決まっているってなにそれ）どんな願い事する気なの？（あんまり聞きたくないけど）」

「世界征服に決まっているだろう！」

きっぱりはつきり断言された。

決まってるとか言われても困る。世界征服とか子供ですら言わないような夢を語られても困る。しかもマジなところが本当に困る。

ケツを触って世界征服。そんなことで世界征服の願いが叶ってしまったら、征服されるほうは堪ったもんじゃない。

いちごパンツと赤ふん触ったら世界征服って……。

たしかにいちごパンツには夢がいっぱい詰まっているとはいえ、そんな方法で世界征服って……。

せめて七つのボールを集めて世界征服のほうがいい。

ふんどの先には二つのボールしかない。五個も足らないじゃないか！（つつこむところを間違っている）

カーシャのほかにも、とんでもない願いをする者がいるかもしれない。そうなる前にルーファスが願いを叶えて欲しいところだ。追試合格というスケールの小さくて、わざわざせつかくのチャンスを使って願うことなのかと思うが、世界の平和を考えるならだれにも迷惑をかけない良い願いだ。

だがしかし！

ルーファスの目の前に立ちはだかる巨大な壁。

カーシャ！

「妾を出し抜こうと思うなよルーファス、ふふふっ」

そんな恐ろしいことルーファスにできるはずがない。はずがないけど、カーシャに世界征服されるのも困る。そして、追試が不合格になるのも死活問題として困る。

こうなったら仕方ない。ルーファスの頭に過ぎる考え。

「もう不合格でいいよ。妖精も探すフリだけしよう」

ルーファスが願いを叶えれば、カーシャが出し抜かれたと思つて報復してくる。かと言つて、世界征服の手伝いもできないので、手伝うフリしてだけしてあとは、だれが平和的な願いをしてくれることを祈る。

追試をあきらめたルーファスは、他人任せを決め込むつもりだった。

だが、ルーファスは期待を裏切らない！

運命の女神はいつもルーファスを渦中に投げ入れる。

ルーファスの躰が宙に浮いた。

「な、なに!？」

驚くルーファスはカーシャの肩に担がれていた。

「行けルーファス！」

「はあ~~~~っ!？」

意味もわからないままルーファスミサイル発射！

ルーファスが投げ飛ばされたのは、生徒の群れの中だった。

その先頭を走って逃げているリリの姿！

ここまへ行けばルーファスとリリが正面衝突。

あくまでリリがその場を動かなかった場合の話だ。

ひょいっとリリが避けた。

ルーファスはリリの真横を飛び抜け、勢いよく生徒の群れに突っ込んだ。

ドーン！

まるでボーリングのピンのように次々と倒れる生徒たち。

叫び声や呻き声は廊下に響いた。

そんな生徒たちを見ながらリリが笑いながら去っていく。

「ばーか！ オレを捕まえるなんて一〇〇〇年はえんだよ、あははははは！」

逃げられた。

生徒たちに潰されているルーファスは、死にそんな顔をして手を伸ばした。

「圧迫死する……うっ……」

伸ばされたルーファスの手に触れた柔らかい感触。

ぶにぶに。

思わずルーファスはそれを揉んでしまった。

生徒たちが立ち上がったてはけてくると、ルーファスは自分が触っているものが、なんだか見えはじめた。

ピンクのストライプのパンツ。

そう、ルーファスが触っているのはお尻だった。

ついにルーファスは女の子のお尻に触れたのだ！

でもそれはララのお尻ではなく……。

顔を真っ赤にしたビビと目が合った。

「ルーちゃんのえっち！」

バシン！

ビビの平手打ちが炸裂。

「ぶへっ！」

珍獣の叫びをあげながらルーファスの顔が変形した。

ルーファスが触っていたのは、ビビのお尻だったのだ。

「もお、ルーちゃんなんか大っキライ！」

顔を真っ赤にしたままビビが逃げるように走り去っていく。

そして、ルーファスの頬も真っ赤だった。

ルーファスは頬についた手のひら痕にそっと触れた。

「ヒリヒリするし口の中も切っちゃったよ。事故なんだから、あんな力一杯叩くことないのに」

カーシヤに投げられ、ビビのビンタを喰らい、散々な目に遭ってしまった。

だが、ルーファスの災難はまだまだはじまつたばかりだ。

ルーファスを取り囲む生徒たちの視線。身体がチクチクする

ほど痛い視線を浴びせられている。

「おまえのせいで逃げられたじゃないか！」

「あとちよつとで捕まえられたのに！」

「どうやって責任取ってくれるんだよ！」

欲望に駆られた人々は怖い。

身の危険を感じたルーファスは咄嗟に遠くを指差した。

「あつちに妖精が！」

ルーファスの叫び声に合わせて、一気に生徒たちの視線が指先に向けられた。

今のうちにルーファスは全速力で逃げた。

だが、すぐに生徒に気づかれた。

「あいつ逃げたぞ！」

「追え！」

数人の生徒がルーファスを追ってきた。

妖精じゃなくて、いつの間にかルーファスが追われる展開に

!?

「なんで私が追われてるのさ！」

欲望に目が眩んで、判断能力が落ちている。

ルーファスは一つ学んだ。

「(欲望は人を狂わせるんだなあ)」

だからこそ欲望に忠実で私利私欲なカーシャはいつも狂ってる。

狂ってっというか、ぶっ飛んでる。

数々の危機に直面してきたルーファスは、その危険を本能的に悟って急いで伏せた。

カーシャに集まるマナフレア。

「ホワイトブレス！」

校内で攻撃魔法をぶっ放したカーシャ。

妖精を狙うライバルを蹴散らすつもりだ。

ルーファスの頭上を抜けていった凍える吹雪。

このままでは生徒たちが危ない！

ジャラジャラと鳴る魔導具の音。

そんな大量の魔導具を身につけているのはあの人物しかない。

「ファイアプレス！」

ファウストの手から炎の渦が放たれた。

ピンチだったとは言え、校内で攻撃魔法をぶつ放したファスト。

カーシャとファウストは遣りたい放題だ。

放たれた炎によつて吹雪が相殺させた。

唇を噛んだカーシャ。

「くっ……また妾の邪魔をしおつて」

「カーシャ先生、生徒を殺そうとするとは許せませんねえ」

「殺すわけないだろうが、ばーか。瞬間冷凍なら、適切な解凍さえすれば命に別状はない。おまえだつて現にピンピンしてるだろうが！」

「先ほどは、よくも氷付けにしてくれましたね。そのお礼をさせてもらいますよ！」

二人がマジでやり合ったら、そりゃもう大変なことになってしまう。

だが、これはルーファスにとってはチャンスだった。

「（ファウスト先生には悪いけど、押しつけて今のうちに逃げよう）」

コソコソっとルーファスはこの場から逃げることにした。

ファウストに気を取られているカーシャの眼中には、ルーフ

アスのなんて映らない。

ドッカーン！

爆発音が聞けてきたが、ルーファスは決して後ろを振り返らなかつた。

《三》

とりあえずカーシャから逃れられたが、これからどーしたものかと迷うルーファス。

「やっぱり妖精探したほうがいいのかなあ」

追試不合格。プラス悪魔の契約書発動。

「カーシャにバレないようにすれば……バレてもお菓子とか差し入れれば」

ぶつくさ呟きながら歩いていると、廊下の向こうからぶかぶかと人影が飛んできた。

ララだ！

後ろから追ってくる生徒たちはいない。

ルーファスにチャンス到来だ！

「お、お尻触らせてください！」

頭を下げて懸命に頼むルーファス。

どう見ても変態です。

ララはルーファスを完全に見下していた。

「キモイ」

「お願いします、お願いします！」

「触りたいなら触れば？」

「ホントにいいの!？」

「痴漢で訴えるけど」

「……………」

ダメじゃん！

余裕でララはその場からぶかぶか飛んでいく。

「ばっかじゃないの、きやははは」

ルーファスを小馬鹿にしてララは消えてしまった。

床に両手両膝をつけてルーファスシヨック。

「触れなかった……………」

こんな調子じゃ、ルーファスはいつまで経っても触れないだろう。

ルーファスよ、変態になるのだ！

女の子に襲い掛かってお尻を触る変態になるのだ！

心を変態にして挑まなければ、この難局は乗り切れないぞルーファス！

ルーファス！

変態に目覚めるのだ！

ルーファスはイメージトレーニングを試みた。

スカートの中に手を突っ込んで、その先のいちごパンツを触る！

ブホワッ！

鼻血が噴き出た。

イメトレだけで鼻血を噴き出すとは、どんだけ耐性がないんだルーファス。

情けないぞルーファス。

「……思い出しちゃった（ビビのお尻の感触がまだ手に残ってる気がする）」

ララのお尻を触るイメトレをしていたのに、いつの間にかビビのお尻の感触を思い出してしまったのだ。

そこへ丁度やって来た桃髪のツインテールをフリフリさせる少女。

「ルーちゃん！」

「ぶはっ！」

ルーファスは噴き出しそうになった鼻血を堪えようと、鼻を押さえた。

「だいじょぶルーちゃん？ 鼻から血が出てるよっ！」

「あ……だ、大丈夫だよ、ちょっと壁に顔面ぶつけちゃって」

「ルーちゃんったらドジだなあ」

「あははー（本当に理由は絶対言えない）」

愛想笑いをするルーファスにはあまり余裕がなかった。

ビビの顔を見るとある方程式が頭に浮かんでしまうのだ。

ビビ＝お尻の感触

頭から振り払おうとすればするほど逆効果。

ぶにぶにっとしたお尻の感触が思い出されてしまう。

悶々とするルーファスにビビが不思議そうな顔を向けた。

「どうしたのルーちゃん？」

「えっ、なに、お尻がどうしたって？」

「はあ？」

「ご、ごめん、お尻のことで頭がいっぱいで。じゃなくて、妖精のお尻を触って追試合格しなきゃいけないことで、頭がいっぱいなんだ！」

ルーファスの頭の中はお尻のことでいっぱいです。

ツーツとルーファスの鼻から鼻血が垂れた。

「ルーちゃん、また鼻から血が出てるよ？」

「だ、大丈夫だから！」

「ティッシュあげるね」

ビビはポケットティッシュを出して、容赦なくルーファスの鼻にぶっ込んだ。

ブスッ！

「ぐほっ！」

「ごめんねルーちゃん！」

「だ、大丈夫だよ……ありがとう（ビビって見た目は少女なんだけど、人間よりも力があるんだよね）」

悪気がないところも、仔悪魔として大事な要素です。

わざとやっつけていても、それはそれで仔悪魔っぽいです。

鼻血も落ち着いてきて、ルーファスは気を取り直そうとした。
「ところでビビ、もうどつちかの妖精の……その……アレに触れた？」

口に出してしまうと、また頭を過ぎってしまうので、本人的には伏せたのだが、逆にアレとかいうほうが健全じゃない。

「ぜんぜんだめ、見失っちゃうし、だれかもう願いたい事叶えてもらったひといるのかなあ？」

「願い事を一つ叶えると、すぐに姿を消しちゃうらしいよ。今さつき女の子のほうの妖精を見たから、まだだれも叶えてもらってないと思うけど」

「そうなんだ、なら早く見つけなきゃ！」

「ところでビビはどんなお願いするの？」

「えっ!？」

ビビはひどく驚いて瞳をまん丸にした。

すぐにビビは取り乱した様子で口を開いた。

「べ、べつに大したお願いじゃないんだから！」

「だからどんなお願い？」

「本当に大したお願いじゃないから、本当なんだから！」

「なにムキになってるの？」

「ムキなんかなくてない！」

「(ムキになってると思うけど)大したお願いじゃないなら、ビビも私の追試が合格できるようにお願いしてくれないかな？」

「それは……」

「そうだよ、みんな自分のお願いをしたいよね。自力でがんばるよ」

「……ルーちゃん」

なんだか哀しそうな顔をするビビ。

どうしてそんな顔をされるのかルーファスはまったくわからなかった。

「どうしたの？」

「なんでもないよ！　じゃあルーちゃんとあたしライバルだね。早い者勝ちだからね、恨みっこなしだよ？」

「わかってるよ」

「うん、よかった」

哀しい顔から一変して元気な笑顔。

ビビの表情の変化を見ながらルーファスは余計に首を傾げた。

ドドドドドドド！

廊下に響き渡る地鳴り。

来る！

逃げるリリが大群を引き連れてやって来る。

なんだか生徒の数がどんどん増えているような気がする。

ここでポーツとしていたら、また生徒たちに踏みつぶされてしまう。

ビビが俄然ヤル気で群れの中に飛び込もうとしているが、ルーファスが取った行動とは？

逃げる！

リリに背を向けて走り出すルーファス。

思わぬルーファスの行動にビビは目を丸くした。

「ルーちゃんどこ行くの!？」

「そこにいたら押しつぶされちゃうよ!」

追いかけるべき妖精から逃げる構図になってしまっているルーファス。

こんなことやったら、願い事を叶えるとかそりゃ一生無理ですよ。

ビビがリリに飛び掛かった。

しかし、リリの後ろからは生徒の大群が押し寄せている。このままではビビが呑み込まれる！

ひらりとビビを交わすビビ。赤いふんどしがチラリン！

すぐに生徒たちもリリに飛び掛かり、怒濤の中にビビが呑み込まれそうになった。

「ビビ！」

ルーファスが叫ぶ。

「きゃっ！」

大群の中から聞こえてきた少女の叫び声。

山積みになった生徒たちが土砂のように崩れる。

ビビはあの山に埋まってしまっている。

果たしてビビは無事なのか！?

生徒の山が崩れると、その下からドーム状のバリアが顔を覗かせた。

ビビだ！

バリアに守れているビビ。

そして、バリアの中にはもうひとり、ビビを守った者がいた。

その者はビビを抱きしめながら顔を見合わせた。

「大丈夫かい？」

「クラウドス!? 助けてくれたのありがとう！」

「大丈夫なようだね」

爽やか笑顔を浮かべたクラウドス。

周りから生徒たちがはけると、クラウドスはバリアを解いた。

「まったく、節度のある行動を心掛けるようにと校内放送があった筈なんだが……情けないうちの生徒たちは」

なんでも願いが叶う。

それによつて目の色を変えてしまった生徒たち。

わからなくもないが、廊下でへたる生徒たちを見てリリはあざ笑っていた。

「あははは、ばかな奴ら。だれもオレのケツ触れねえでやんの！」

欲望に駆られた生徒を弄んで愉しんでいるのだ。

クラウスがビシツとバシツとリリを指差した。

「騒ぎの張本人は君だな！」

「そうさ、オレは妖精ケツタッチンのリリ。オレと双子のララのケツを触れたら、どんな願い事でも叶えてやるぜ」

「その話も本当かどうか怪しいところだ。ありもしない餌をちらつかせて、僕らを弄んでいるように思えてならないな」

「弄んでるのは認めるけど、願い事はホントだぜ。ウソかどうか、アンタがオレらのケツ触ってみるよ？」

「ならば世界平和でも願ってみるか。というわけだから生徒諸君、争いはやめて僕に願いを譲って」

クラウスが言い終わる前に、生徒たちがリリに飛び掛かった。願いを叶えるのは俺だ！」

「世界一の魔導士になるのは私よ！」

ドドドドドドド！

逃げるリリ。

追いかけていく生徒たち。

残されたクラウス。

「……………」

だれもクラウスの話なんて聞いちゃいなかった。

クラウス挫折。

床に両手と両膝をついてしまった。

「学院では普通の生徒として扱ってくれて言ってるけど……

言ってるけど……これでも一国の王なのに！」

王の権威もなにもなかった。

ポンとルーファスがクラウスの肩を叩いた。

「王様扱いされないのはいいことじゃないか。みんなクラウス

のことを仲間だと思ってる証拠だよ！」

「……そ、そうなのか（単純に願い事に目が眩んで無視された

ように感じたが）」

クラウスの思っているとおり！

辺りを見回したクラウス。

「ところでビビの姿が見えないようだが？」

「ビビならもうとくに妖精追っかけて行っちゃったよ」

「……そ、そうか（恩を売るつもりはないが、この扱いは……

シヨックだ）」

助けたビビにまで軽く扱われ、ちよっぴり傷心のクラウス。

だが、一国の王として、この程度のことですらでも落ち込

んではいけない。

アステア王国の繁栄を担う王として、クラウスは攻めの姿勢

を表意した。

「僕もみんなの輪に入って妖精を捕まえてやる。それで願いを叶えてもらえば、だれも文句を言わないだろう。僕は行くぞ、だれにも負けない、僕は妖精のお尻を触ってみせる！」

お尻を触って見せる、お尻を触って見せる、お尻を触って…

…。

クラウスの言葉が廊下にエコーした。

ただの変態発言にしか聞こえない。

一国の王が『お尻を触る』なんて、政治問題に発展しそうだ。熱く燃え上がるクラウスに感化されて、ルーファスの闘志にも火がついた。

「私だってお尻を触ってみせる。クラウスにだって負けない

よ！」

「望むところだルーファス！」

漢おとこと漢は互いの手をガツシリと握り合った。

勇気！

友情！

その先にあるのは勝利！

果たして勝利の栄冠をつかむのはルーファスかクラウスかッ

!?

クラウスはルーファスの瞳を見つめた。

「行くぞルーファス！」

「おう！」

ルーファスならぬ男らしい返事。

今のルーファスはいつもとひと味もふた味も違うぜ！

廊下を駆け出すルーファス。

が、それをすぐにクラウスが止めた。

「待てルーファス！」

「なに？」

「廊下は走っては駄目だ！」

「……そ、そうだね」

「僕は生徒たちの模範にならなくてはいけないからね」

優雅に廊下を歩き出すクラウス。

せつかく燃え上がってたルーファスの心が、急速に冷えていく。

「（クラウス……本気で妖精捕まえる気あるの？）」

あるにはあるだろうが、こんな調子で歩いていて、捕まえられるかどうかは不安だ。

ルーファスはクラウスとは別の道を進むことにした。

「私があっちの廊下を探すよ」

「健闘を祈る！」

「あ、うん、クラウスもがんばって（なんだかなあ）」

クラウスと別れたルーファスは、妖精を探して歩き回った。

いったい妖精たちはどこにいるのか？

それはね、クラウスが歩いて行った方向です！

リリが飛んで行った方向にクラウスは歩いて行ったのだ。

つついっルーファスはクラウスと別れてしまったが、自ら妖精の手がかりを手放しのだ。

まあ、あのままクラウスと一緒にいても、歩いて妖精を捕まえられるかどうかは怪しいかったが。

今からリリのほうに行つて、途中でクラウスに会つてしまうのも気まずいし、ルーファスは道を変えずに進むことにした。

騒ぎはどんどん大きくなっているようなので、きつとすぐにララのほうも見つかるだろう。

ドドドドドドド!

ほらさつそく見つかった。

パンチラしながら逃げるララ。

先頭を走つてララを追っているのはユーリだ!

「待ちやがれポケット!」

ちよつと素が出てますよユーリちゃん。

ここでポーツとしてたり、逃げてしまつたら、さつきと同じ結果になってしまう。

ルーファスは妖精ララを捕まえないならない!

と言つても、ルーファスにはなんの作戦もなかった。

ルーファスが戸惑っている間にも、ララと生徒の大群が押し寄せてくる。

ララはもう目の前だ。

「メガネ退け!」

「えつ、私のこと?」

ララに言われても、自分ことだと理解するのにルーファスは時間を要した。まだメガネに慣れていないのだ。でも名前じゃなくてメガネ呼ばわりされるってことは、すっかりメガネキヤ

ラの仲間入りだねルーファス

ルーファスの瞳に映ったいちごパンツのドアップ。

次の瞬間、ルーファスの顔面が踏みつけられた。

「ごべっ！」

ララに踏んづけられたルーファス撃沈。

そこへユーリも突進してきた。

「邪魔邪魔退いてーっ、きゃっ！」

可愛らしく悲鳴を上げたユーリとルーファスが激突。

後続の生徒たちも倒れたルーファスたちにつまづいて、将棋倒しになってしまった。

ユーリはすぐに起き上がろうとしたのだが。

「きゃっ、だれアタシのお尻触ってるの!？」

ユーリの目の前にはルーファスの顔。

ぶにぶに。

ユーリを抱きしめながら倒れていたルーファスの手は、小振りなヒップを鷲掴みにしていた。

「……わ、わざとじゃないんだ！」

ぶにぶに。

「死ね！」

顔を真っ赤にしたユーリちゃんがグーパンチを放った。

「ぶへっ！」

思いっきり顔面を殴られたルーファス。

虫の息のルーファスは鼻血を出しながら床にへばってしまっ
た。

「ビンタじゃなくてグーって……ひどいよ（ぐすん）」
しかも女の子じゃなくて、じつは男のグーパンチという……
可哀想なルーファス。
さらにユーリも生徒もララを追っかけてすでに行ってしまった。

鼻血の海に沈みながら、ルーファスは力尽きたのだった。

トトトトトトトト！

そこへまたも地響きが聞こえてきた。

逃げるリリがこっちへ向かってくるではないか!?

先頭で追いかけているのはカーシャとファウストだ。

「邪魔だファウスト！」

「カーシャ先生こそもう一匹の妖精を追いかければよいでしょう！」
うー！」

「あいつに先に目を付けたのは妾だ！」

「私は召喚されたときから目を付けていたのですよ！」

妖精を捕まえるとか、願い事を叶えてもらうとか、そんなことじゃなくて、張り合うことがメインになってる二人だった。

ルーファスはこの場から立ち上がれなかった。

うさぎさんのパンツが見えた！

ベゴツ！

「ふぎゃー！」

カーシャはルーファスを踏んだが眼中にない！

さらに後続の生徒たちもルーファスを踏んづけて行く。

トトトトトトトト！

瀕死状態のルーファスを遅れてやって来たピンクのストライプパンツが踏んづけた。

「うげっ」

もう声というか、空気の変な音だった。

「ルーちゃんごめん！」

最後にルーファスを踏んづけたのはビビだった。

意識が朦朧とするルーファス。

瞳に映るのは真上にあるパンツ。

「お尻を……お尻を触り……た………かった」

ガグッ。

力尽きたルーファス。

「ルーちゃん！」

ビビの叫びが木霊した。

涙の粒を零すビビは誓った。

「ルーちゃんの犠牲は無駄にしないから！」

心を燃やして走り去るビビ。

だが、まだルーファスはちよつとだけ意識があった。

「犠牲とかいいから……保健室に………連れって………て………
ガグッ。」

今度こそ、ホントにホントに力尽きたルーファス。

ここでルーファスはリタイアしてしまうのかっ!?

ベッドで目覚めたルーファス。

「はっ……ここは!？」

ちよつと薬品臭い。

「保健室か」

廊下で倒れたはずなのに、いつの間にか保健室のベッドで寝ていた。

「(だれか運んでくれたのかな。親切なひともいるんだなあ)」

その親切なひとはここにはないらしい。

保健室にはだれもいなかった。

ベッドから起き上がって、辺りを見回して目に付いたのは、ホワイトボードだった。

妖精を見つけに行つてきます。

と、今日の予定に書かれていた。

「(保健室の先生まで……放課後で本当によかった)」

もしも生徒が多くいる時間だったら、騒動はもっと大きくなつていた。

その騒動の発端はルーファスだ。

「お腹痛い」

責任感でお腹が痛くなつてきた。

「(もうちよつとベッド寝てようかな)」
責任放棄!

ルーファスがベッドで横になっていると、物音が聞こえてきた。

ドドドドドドドド!

ドーン!

ドガガガ!

ピロロロロ!

ズドン!

きつとどこかで派手な追いかけっこが展開されているのだらう。

そんなことには構わず、寝続けようとするルーファス。

ドツカーン!

爆発音と共に部屋が揺れ、ベッドが跳ね上がった。

「な、なに!?!」

驚くルーファス。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!

天井が崩れ落ちてきた。

砂煙が舞い上がり視界を覆う。

「ホワイトプレス!」

猛吹雪が崩れた天井辺や砂煙を呑み込んだ。

「な、なんなのあのバカ女!」

叫び声が聞こえた。ララの声だ。

上の階から落ちてきたララを追ってカーシャが姿を見せた。

そして、ルーファスはベッドの下に姿を消した。

遣りたい放題のカーシャからララは必死に逃げているらしい。

そして、ルーファスもカーシャから逃げた。

ベッドの下に身を潜めてカーシャに気づかれないようにする。

ここで顔を合わせたら、渦中に巻き込まれるのは間違いないのだ。

保健室を飛び出して逃げるララ。

その背中にまたもカーシャが魔法をぶつ放す。

「ホワイトプレス！」

保健室もろとも一瞬して凍り付く。

だが、ララには逃げられてしまった。

「チツ」

カーシャは舌打ちして保健室を出て行った。

ベッドの下から身を震わせて這い出してきたルーファス。

「ハックシヨン！」

鼻水ブー。

いろんな意味でルーファスは震えが止まらなかった。

「やりすぎなんだよ……カーシャは」

保健室が氷河期になってしまったせいで、ここにはいられなくなってしまった。

仕方がなくルーファスも保健室から出た。

ルーファスはどっと溜め息を落とした。

「はぁ……（早くだれか願い事叶えて終わってくれないかな）」

このままずっと追いかけてこが続くと思うとゾツとする。

「（もう帰っちゃおつかない）」

追試はとっくにあきらめたので、そのほうがいいかもしれない。

でも気がかりなのは……。

「(どんな契約だったのかな?)」

ファウストと交わってしまった悪魔の契約。

「(先生は悪魔じゃないから魂を要求してやることはないと思うけど)」

悪魔の契約のことを考えると憂鬱になる。

「(やっぱり妖精探ししようかな)」

優柔不断なルーファス。

でも足は校舎の外へと向かっていた。

中庭が見通せる廊下を通ったとき、ルーファスの足がふと止まった。

なにやら騒がしい。

中庭に群がる生徒たち。

追いかけてくっことをしている雰囲気じゃないが、いったいなんの集まりだろうか?

気になったルーファスは中庭に足を運んだ。

人混みを掻き分けてその中心に向かう。

声が飛び交う。

「押すなよ!」

「触った奴はさっさとどっか行けよ」

「やった、これで一人目のお尻触れた!」

生徒たちが群がっていたのはリリだった。

なんとリリは亀甲縛りにされて身動きを封じられ、さらに白目を剥いて、ついで泡まで吐いて気絶していたのだ。

今がチャンスと生徒たちはリリに群がり、ペタペタ、もしくはペシペシとお尻に触っていく。すっかりリリのお尻はお猿のように真っ赤になっている。

とりあえずルーファスも人混みを掻き分けて、リリのお尻に触ることにした。

赤いふんどしでキュツと締められた小振りなお尻に触れる。ちよつとひんやりして気持ちいい。そして、ちよつと硬い。

止まっていた鼻血がツーツと出た。

慌ててルーファスは鼻を押さえてその場から離れた。

べつに男のケツを触って欲情したわけじゃない。

そう、ルーファスは二人のお尻の感触を思い出してしまったのだ。

ビビのお尻は小柄な身体の割には大きくて揉みごたえがあった。

ユーリのお尻は小振りだったがとても柔らかかった。

「つて、なに思い出してるんだよ！」

セルフツツコミ。

ルーファスは煩惱を消し去るため、今見たばかりの赤ふんのケツを懸命に思い出した。

「うう……なんか気分悪くなってきた」

なにが楽しくて男が男のケツなんか妄想しなきゃいけないんだ！

でも、そのおかげでルーファスの鼻血は止まった。

青ざめた顔をしてルーファスは廊下に戻った。

とりあえずラッキーにも、なんの努力も苦勞もせずにリリの尻をゲットできた。

「(それでもにしてみだれが縛り上げたんだろっ?)」

しかも、早い者勝ちの勝負なのに、みんなの目の触れる場所にリリを残していくなんて？

「(犯人は抜けてるひとか!?)」

間抜けのルーファスに抜けてるとか言われたおしまいだ。

なんにしても、これで残すはララのお尻だけだ。

ララの姿はさっき見たばかりだ。必死こいてカーシャから逃げていた。

安易にリリのお尻に触ることができるようになったことで、追跡者たちの標的はララの集中するだろう。ここからが激戦だ。

「(やっぱり帰ろっかな)」

戦う前に心が折れそうなるルーファス。

「(でもあと半分なんだから、ラッキーでどうか……ラッキーか)」

ラッキーはラッキーでも、いつもルーファスはアンラッキーだ。

ユーリがトロボと肩を落として歩いてくる。

「どうしたのユーリ?」

「はあ。カーシャさんには殺されかけるし、妖精は見失っちゃうし(ホントなんなのあのバカ女教師は)」

ホント困ったもんですカーシャには。

あれだけ派手な追いかけてこをすれば、すぐに見つかり

そんなものだが？

今度はビビが駆け寄ってきた。

「ルーちゃん！」

ビビの姿を見たユーリはちよっぴり頬を桜色にした。

「(ビビ)ちゃん今日も可愛いなあ、むふふ)」

女の子の格好をしていて、女の子になりたいと願っているのに、じつはユーリちゃんソツチ系なのです。詳しくはマ界少年ユーリを読んでね！

ビビはユーリの顔を覗き込んだ。

「え〜っと、ユーリちゃんだっけ？ こんにちは！」

「アタシの名前ちゃんと覚えてくれたんですね、嬉しいです！

(カーシャさんに頼んだ惚れ薬早くできないかなあ、むふふ)」

惚れ薬の話はマ界少年ユーリを読んでね！！

ビビはルーファスに顔を向けた。

「あと女の子のお尻を触るだけでいいのに、見つからないんだけどルーちゃん知ってる？」

「保健室でカーシャに追いかけられてるの見たけど、そのあとはさっぱり」

二人の間にユーリが割り込んできた。

「ビビちゃんはどうなお願い事をするんですか！」

興味津々。

「え……それは、うん、ちよっとしたお願いだよ。ユーリちゃんは？」

「えっ……そ、それは（女の子になりたいなんて口が裂けても言えない）か、彼氏ができますように、みたいな！」

「ユーリちゃん彼氏いないの？（あたしもいないけど）」

「ちよつと前までいたんですけど（思い出すだけでも腹立つ。

あいつのせいで地元にいられなくなっただし、マジムカツク）」

く・わ・し・く・は、マ界少年ユーリを読め！（宣伝しつこすぎ）

ブフオオオオオオオン！

廊下の角から噴き出してきた猛吹雪。

これは!?

いっしょに廊下の角から飛び出してきたララの姿！

すぐ近くにいた男子生徒がララの飛び掛かるうとした。

「見つけた！」

ほかの生徒たちも一斉にララに飛び掛かった。

前からは生徒の群れ、後ろからはカーシャに追い詰められ、

ララは冷や汗を流した。

「バカ雪女いつまで追ってくる気！ リリは捕まっちゃったみたいだし、ウチが逃げ切らないと……」

ほかの生徒たちに負けじとビビモララに飛び掛かっていた。

ルーファスはおどおどして踏み切れず、その場から動けない。遅れてユーリもララに飛び掛かるうとしたが、嫌な感じがし

てすぐに立ち止まった。

ララの周りにマナフレアが集まっている。魔法を使うつもり

だ！

生徒たちをなぎ倒してビビがいちごパンツに手を伸ばした。

「これで願いが！（ルーちゃんの目を治して！）」

あと少しでビビの手がいちごパンツに触れる瞬間、ララがニヤリと笑ったのだ。

ユーリが叫ぶ。

「ビビちゃん逃げて！」

「えっ？」

目を丸くしたビビ。

だが、もう遅かった。

ララが魔法を発動させる。

「デパンツ！」

ララの手から放たれた謎の光を浴びたビビと生徒たちに異変が！

パサっ、パサパサっと、床に落ちる大量のいちごパンツ。

な、なんと光を浴びたビビや生徒たちがパンツに変えられてしまったのだ！

さらにパンツに変えられても、意識は残っているらしく、しかもしゃべれちゃたりもするらしい。

「うわっ、あたしパンツになっちゃった!？」

ビビの声だ。

みんな同じいちごパンツなので、声でだれなのか判断するしかない。

ユーリはすぐにパンツビビを拾い上げた。

「ビビちゃんがパンツに変えられてしまうなんて……心配しないでください！」

「早く元に戻してよお！」

「アタシが大事にはいてあげますから！！」

はくんかい！

しかも、ユーリちゃん生えてますけど大丈夫ですか？

カーシャの身体を包む冷気。

「あの妖精め好き勝手やりおつて！」

それはあんたでしょうが。

魔法を唱えようとしていたカーシャの前に立ちはだかるファ

ウスト。

「探しましたよカーシャ先生！」

探す相手が変わってるし。

またこの二人は派手にやるつもりだ。

激突しようとしたカーシャとファウストの間に漆黒の翼が壁をつくった。

「おいたが過ぎるわ二人とも。これ以上、我が君の城を壊すことは万死に値する！」

二人の間に割って入ったのは、学院長クロウリーの忠実なる

エセルドレーダだった。

エセルドレーダの鞭がしなった。

この隙にララは逃げようとしていた。

「バカなヤツら」

吐き捨ててララは廊下の角に消えてしまった。

ユーリがパンツビビを頭に被ってルーファスに顔を向けた。
「なにぼさつとしてるんですか、追わないとビビちゃんも助けられませんかよ！（そしてアタシの願いも叶えなきゃ！）」

ララを追ってユーリが駆け出した。

遅れてルーファスもユーリとララを追った。

廊下に点々と落ちていているいちごパンツ。ララが行く先々で生徒をパンツに変えているのだ。

落ちているパンツを目印にララを追い続け、ようやく前方に浮かぶ影が見えてきた。

ユーリが叫ぶ。

「待ちなさいパンツラ女！ ビビちゃんを元に戻して！」

「元に戻して欲しいなら、ウチのお尻触って願えば？」

「願い事とビビちゃんを元に戻すことは別問題です！」

キツパリと言い切った！

ちよっぴりシヨクなビビちゃん。

「別問題って……あたしがパンツのままでもいいの!？」

「よくはないですけど、万が一の戻らなくても大事にはいてあげますから！」

「はいてくれなくていいから、ルーちゃんもどうかし……て……」

ビビの声がか細く力を失っていく。

「どうしたのビビ!？」

ルーファスが叫んだ。

「意識が……ぼーっと……」

さらにビビの力が失っている。

「ララが笑った。」

「きゃはは、デパンツでパンツに変えられたヤツは、ほっとくとホントのただのパンツになっちゃうんだもんね！」

しゃべれないパンツはただのパンツだ！

このままではビビはただのパンツになってしまう。人生最後がパンツになって終わりなんて酷すぎる。さらにその後、変質者の手に渡ったりなんかしたら、はかれたり、臭いを嗅がれちゃったりするのだ。

恐ろしすぎる！！

ルーファスの頭に過ぎった考え。

「(あつちの妖精はふんどしに変える魔法を使えるのかな。そんなの恐ろし過ぎる！)」

たしかに恐ろしいが、今はそんなことを考えている場合じゃない。

ユーリは迷っていた。

「(本物の女の子になりたいけど、パンツのビビちゃんじゃ可愛さ半減以下。大好きなビビちゃんのためなら仕方ない！)」

なにを思ったのかユーリがルーファスを担いだ。

この体勢は!?

ルーファスミサイル発射!

「やっぱり〜！」

投げられたルーファスが叫んだ。

本日二度目の発射だった。

ユーリが叫ぶ。

「そのまま妖精のお尻を触って！」

ぐんぐん加速するルーファスはララに向かって手を伸ばした。

「デパンツ！」

ララから光が放たれた。

パサツとパンツが床に落ちた。

「ぎゃああああ僕までパンツに！！」

パンツにされてしまったルーファス。

ユーリは冷めた目で見ていた。

「まあ、期待はしてませんでしたが」

ちよつとくらいは期待してあげてください。

ララは余裕だ。

「じゃあね」

悠々と逃げていくララの後ろ姿をユーリは終えなかった。

「（迂闊に近付けばアタシまでパンツに。アタシまでパンツになつたら。だれがビビちゃんをはいてあげるの！）」

ちよつと問題がズレている。

しかし、変質者にパンツが渡ってしまったらと考えると、だれがパンツを所有するかは大事な問題だ。

ただ、ユーリちゃんは生きてますけど！！

ユーリがララを追って走り出した。

「ビビちゃん、今戻してあげますから！（誰かに先を越されて願う事されたら、アタシがなんとしてもお願いしなきゃ！）」

走るユーリの足下にパンツルーファスが落ちてている。

ベチヨ。

「うぎゃー！」

踏まれるのはお約束です。

踏まれたパンツルーファスは、ユーリの靴に絡まって引きずられる。

「ぎゃあああ！」

「なに？ あっ、なんでアタシの足にくっついてるんですか変態ですか！」

「ユーリが踏んづけたんじゃないか！」

「早く離れてくださいよ、痴漢で訴えますよ！」

「だからユーリが……（訴えたいのは僕のほうだよ）」

そうこうしているうちに、ララの姿が見えてきた。

悲鳴が次々とをあがっている。

生徒たちが次々とパンツに変えられているのだ。

ユーリは素早く靴を脱いで投げた！

もちろんパンツルーファスごと。

「ぎゃあああ！」

ルーファスの叫び声でララが飛んでくる靴に気づいた。

そして振り向いた瞬間、ゴン！

ララの顔面に靴がヒットした。

「マジいった〜い！ くっさいクツ投げたのだけ！」

「臭くないから！」

すぐにユーリは否定した。

ララの周りにマナフレアが集まる。

「クツのお返しに、あんたは男物ブリーフに変えてやるんだから！」

「そ、そんな恐ろしいことしたら訴えてやる！」

「デパンっあう！」

急にララが変な声をあげた。

ぶにぶに

「きゃっ！」

小さく悲鳴をあげたララは慌てて自分のお尻を見た。

そこにはなんと可愛らしい手がぶにぶにとしているではないか!?

「これで願い事叶えてくれるんだよね？（ふにふに）」

その空色のドレスを確認してユーリが叫ぶ。

「愛しのローゼンクロイツ様！」

なんと最後の最後で突如現れたローゼンクロイツ。

ララは驚きを隠せない。

「まさかウチらケツタツチンが負けるなんて、一〇〇〇年以上無敗だったのに！」

「ボクの願いは」

「願いなんか叶えてやるもんか。死んじゃえば無効だもんね！」

ララが殺気を放った瞬間、ローゼンクロイツの瞳に五芒星^{ペンタグラム}が浮かび上がった。

「ライトチェーン！（ふにふに）」

ローゼンクロイツが放った光の鎖がララを拘束する。

「きゃっ、離しなさいよばーか！」

瞬時に縛られたララ　その縛り方は亀甲縛り！

まさか!?

「七味唐辛子を切らしちゃったから買って来て（ふあふあ）
すごいマイペース。」

流れとか、周りのテンションとか無視して、願い事をさらっ
と言ったローゼンクロイツ。

ララは啞然とした。

「どんな願い事でも叶うのに七味って……しかも買って来いっ
てパシリ!?　まあルールはルールだから、ゲームはあんたの勝
ち。買って来てあげるからこの鎖解いて」

顔を膨らませているララ。この結果に納得してないらしい。

ユーリはシヨックを受けていた。

「まさかこれでビビちゃんは元に戻らない……」

と言った瞬間、ユーリの頭にビビのお尻が落ちてきた。

「ふぎゃー！」

ビビに押しつぶされたユーリが呻いた。

廊下の向こうではルーファスも元の姿に戻っていた。

「あれっ、戻れたの？　よかったあ」

ほっとするルーファスにララが顔を向けた。

「ゲームが終わったら元に戻るに決まってるでしょ、ばか」
決まってるのか知りませんが！

ララは七味唐辛子をローゼンクロイツに渡した。

「はい、これでいいんですよ」

「仕事が早いね（ふにふに）」

一瞬にして買って来たらしい。さすがどんな願いでも叶える
と豪語してるだけのことはある。

「ララがあっかんべーをした。」

「じゃあね、バイバイ死んじまえ！」

こうしてララはパツと消えてしまった。

大騒動も一件落着して、学院も静かになるだろう。

だが！

ジャラジャラと鳴る音が近付いてくる。

「ルーファス！」

「は、はい！」

慌てて返事をしたルーファスの先にはファウストが立っ
ていた。

「どうやら使役に失敗したようだな」

「あつ、そういえば試験の最中だった!？」

「追試不合格だ！」

が〜ん。

ルーファスシヨック！

見事、追試に不合格になったルーファスの顔に、ペタリと悪
魔の契約書が張り付いた。

悪魔の契約書によって、ルーファスはどーなってしまうのか
ッ！

それはまた別のお話である。

第一四話 鉄扇公主はラブタイフーン

《一》

ビビちゃんシヨック!

猛烈なキッスを道ばたで目撃してしまった。

馬乗りになっっている袴姿の女の子。

乗られちゃってるのは、我らがルーファス!

なにこの、ルーファスが押し倒されて襲われちゃってる構図は?

漂白された顔面で硬直しているビビ。

ようやく唇を解放されたルーファスは、目を白黒させてビビと顔が合ってしまった。

「ち、違うんだってこれは、その……事故なんだ!」

慌てるルーファス。

だが、ここで一発、女の子は破滅の呪文を唱えた。

「心からあなたのことをお慕い申しております」

「は?」

ルーファス硬直。

代わりにビビの硬直が溶けた。

「ルーちゃんの変態!」

ピンクのツインテールをふりふりさせながら、ビビは走り去

ってしまった。

「ち、違うんだって!」

虚しくビビの背中に伸ばされた手。

さてルーファス、この状況をどう釈明する?

まっ、釈明して誤解を解くにしても、目撃者は走り去ってしまったけど。

乱菊の着物に烏羽色の袴。黒髪は後頭部に高く束ねられ、滝のように美しく流れ、ルーファスの首元をくすぐっている。

少し切れ長の目の奥の黒瞳で見据えられ、ルーファスはドキツとした。

「あ、あの、ちょっとどいてくれないかな? (腿に膝とか当たってるんだけど)」

「離れたくありません」

「でも、今の状況は…… (野次馬がいつの間にか)」

下校途中のクラウス魔導学院の生徒たちが、いつの間にも集まってきた。

これだけ目撃者がいたら、大スキャンダル確定だった。

若い学生さんたちは、この手の話が大好きですから、ルーファスも運の尽きですね。まあ元々運なんてないけど!

実力行使でルーファスは女の子の体を押して退けようとしたが!

強く抱きつかれて状況悪化。

「なぜ拒むのですか、もしやわたくしのことが嫌いになったのか!」

「キライとかキライじゃないとか、そういう次元の問題じゃないか、そもそも私たちにもないよね？」

「結婚の約束は嘘だったのですか！」

野次馬が一気にざわめいた。

さらに鈍器のような罵声がルーファスに投げつけられた。

「結婚まで約束した子を振るうなんて最悪だな！」

「こんな綺麗な子を振るなんて男じゃねえ！」

「まさかルーファス君がこんなひとだったなんて……」

「振るんだったら俺にくれ！」

「今日のパンツ何色？ げへげへ」

「ひとりだけ抜け駆けなんて許さないぞルーファス！」

「お前だけは俺たちを裏切らないと思ってたのによ、ひとりだけ彼女づくりやがって！」

さまざまな声が飛び交った。

慌ててルーファスは野次馬に視線を配った。

「誤解だつてば、婚約なんてした覚えはないし！」

「今さつきしたではありませんか！」

と、女の子。

すぐさまルーファス反論。

「さつき会ったばかりで、そんな約束するわけじゃないか。だって君はいきなり空から降ってきて、私とぶつかって……ごによごによ」

「恥ずかしがらずにはつきりとおっしゃってください。わたくしと接吻を交わし婚約したと！」

「キスはごめん、事故だったんだよ事故。でも婚約はしてないじゃないか！」

「なにをおっしゃっているのですか、その接吻こそが婚約ではありませんか。代々我が家では初めて接吻した相手と契りを交わすという掟があるではありませんか」

「知らないよそんな掟！」

だが、女の子の眼は本気と書いてマジだ。

だが、ルーファスだつていきなり結婚なんて無理な話だ。

掟だかなんだかわからないが、ここはどうか事を治めなければ。

「出会ったばかりのひとと結婚なんて、君はそれでいいの？」

「私たちお互いの名前すら知らないんだよ？」

「わたくしは前々からお名前を存じ上げております、ルーファス様。わたくしはセツと申します」

「いつの間に名前を!？」

「さきほど周りの方がそう呼んでおられたので」

「ぜんぜん前々じゃないじゃないか……（この手のタイプは説得とか無理そうだ）」

ルーファスは溜め息を漏らした。

周りから野次が飛んでくる。

「結婚しちやえよルーファス！」

「しないよ！」

「すぐさま言い返したが、すぐさま言い返してくる。」

「ここで逃したら一生結婚できないぞ！」

「好きでもないひとと結婚なんてできないよ!!」

少し怒ったルーファスの声が響き渡った。

耳にした女は固まった。シヨックを受けたのかもしれない。

「ルーファス様はわたくしのこと……好きではないのですね……

……でもわたくしは好きなので問題ありません!」

なんとというポジティブ。悪い言い方をすれば、なんて強引なんだ。

野次馬も敵と化している今、ルーファスに残された手段はこれしかあるまい!

「ごめん!」

ルーファスはセツを大きく突き飛ばし、逃走!

困ったときは逃げるに限る。

逃走を図ったルーファスだが、すぐにセツが追ってきた。

体力勝負では女子にすらルーファスは負ける。しかも悪いことに、セツは足が速かった。追いつかれるのも時間の問題だろう。

前方に空色物体発見!

すぐさまルーファスは駆け寄り、ローゼンクロイツに助けを求め、セツがついに追いついた。

そして、セツがついに追いついた。

「ルーファス様、逃げるときにちよつとわたくしの胸に触れましたよね。事故など装わずに、触りたいなら触りたいとおっしゃってくればよいのに!」

「えっ、ごめん、触る気なんてなかったんだ！（じゃなくて…ここで相手のピースに呑まれたら負けだ）」

急にルーファスはキリツと真面目な表情になり、ローゼンクロイツの背中を押して紹介した。

「じつはもう結婚してるんだ、このローゼンクロイツと。だから君とは結婚できない、ごめん」

が〜ん！

シヨックを受けたのは、木陰からローゼンクロイツをストーリーしていたユーリ。

さらに別の木陰にいたアイン。

おまけにたまたま通りかかったビビは再起不能に陥った。

衝撃の波及はこれだけでは済まなかった。このひとまでもシヨックを受けた。

「そうだったの!?（ふにゃ）」

瞳を丸くしたローゼンクロイツ。

ルーファスは思わず呆気にとられた。

「いやいやいや、そういつ」とにしてって段取り話じゃないか」

「そう言えばそんな話もあったね（ふあふあ）」

「はっ!? しまったネタバレしてしまった!」

ルーファス自爆。

まあルーファスの考える作戦なんて、所詮は浅知恵です。

ユーリが木陰から飛び出してきた。

「そんなことだろうと思いました。ローゼン様がこんなへっぽ

「魔導士と結婚なんて見え透いた嘘もいいところですよ」

見え透いた割にはシヨックを受けていたが……。

さらにアインも飛び出してきた。

「そうです、ローゼンクロイツ様はみんなものなんです！」

それを聞いたセツは妄想した。

「みんなのもの……（自主規制）」

ポツとセツの頬が桜色に染まった。なにを妄想したんだ、なにを。

ここでビビも飛び出して　と行きたいところだが、未だシヨックから立ち直れずに白い灰と化してしまっている。

アインはササッとセツに名刺を差し出した。

「ローゼンクロイツ様のファンクラブ会長のアインです。こう見えてもローゼンクロイツ様は男の娘こなんです。ローゼンクロイツ様に興味がありましたら、ぜひこちらのサイトにお越しください」

信者獲得に余念が無い。

セツは名刺を受け取らずにルーファスの腕に抱きついた。

「わたくしにはルーファス様がおりますから、浮気なんてとんでもありません。しかしルーファスは存分になさってもらって結構ですよ、浮気は男の甲斐性ですから」

「浮気とか以前に、私たち付き合ってもないから」

「今こうして付き合っているではありませんか」

「……………（ダメだ）」

ルーファス諦めモード。

口での説得は無駄。ちよつと逃げたくらいじゃすぐ追いつかれる。押し掛け女房の鑑だ。

ユーリはローゼンクロイツの背中を押した。

「(他人の幸せを見てると眼が腐る)ローゼンクロイツ様行きましよう、こんなへっぽこはほつといて」

強引にローゼンクロイツは連れ去れてしまった。アインはまた木陰に隠れてストーリーカの続き。

二人つきりで残されたルーファスは心底困った。

「とりあえず、体から離れてくれないかな？」

「嫌ですか？」

「イヤとかイヤじゃないとかじゃなくて」

「恥じらつておられるのですね。まあ、なんと可愛らしい殿方なのでしよう。仕方ありません、ルーファス様がそうしるとおっしゃるなら」

セツはルーファスの体から離れた。でもまだ近い。隙間に手が入るかは入らないかくらいだ。

「ついでにもうひとつ、婚約破棄したいんだけど」

「それは掟ですから、いくらルーファス様の頼みでも聞くことはできません」

「ですよねー(やつぱり持久戦か、でもどうしよ。嫌われればいいのか、なにかひどいことをして……)」

意を決したルーファス。

震える手でおっぱいタッチ！

「ああん、ルーファス様ったらお気が早い」

紅潮させた顔でセツは色っぽい声を出した。

ルーファスの作戦では、えっちなことをして、ピンタでも一発食らって嫌われるハズだった。なんと幼稚な作戦。まあルーファスに、女の子にヒドイことしろっていうのも無理がありそうだが。

バシーン！

ルーファスの頬に決まった強烈なピンタ！

まさかの作戦成功かつ!?

「ルーちゃんの変態！」

ルーファスを打つ叩いたビビは、ピンクのツインテールをふりふりさせながら走り去ってしまった。

「ご、誤解だつてば！」

鼻血を垂らしながら虚しく伸ばされたルーファスの片手。一方はビビの背に、一方はセツの胸に。ちなみに鼻血はおっぱいタッチの負傷だ。

ハツとルーファスは手の中の感触に気づいた。

「ご、ごめん！」

すぐさまルーファスはセツの胸から手を離れた。

「謝らなくとも、セツの身も心もルーファス様のものでございます」

「クーリングオフとかないの？」

「掟ですから」

「そんなに掟とやらが大切なのだろうか。」

「掟じゃなくてさ、君の気持ちとかもあると思うんだけど」

「ルーファス様のことを好いておりますゆえ、なんの問題もないかと」

「(問題大アリだよ)なんども言ってるけど、会ったばかりなんだよ私たち？」

「時間など些細な問題ですわ。好きなものは好き、それでよいではありませんか」

「(よくないよ)そもそも私のどこが好きなの？(って、聞いて恥ずかしくなる!)」

「乙女の口からそんなことを言わそうなどと、さてはルーファス様、ドSなのですね！」

「違うよ！」

SかMかで言えば、きっとルーファスはMだろう。自称Sと言い張ろうと、周りのいじめっ子たちがそれを許さないだろう。とくに某魔女とか。

ドツとルーファスは溜め息をついた。疫病神に憑かれたわけではないが、こんな押し掛け女房といたら疲れてしまう。ルーファスに気がない限りは、疫病神と同じかもしれない。

だってなんだか突き刺さる視線が痛いんだもん！

下校途中の男子学生たちが、ルーファスに鋭い視線を向けている。

「と、とにかく場所を変えよう！」

ルーファスをセツの腕を引っ張り走り出した。

学院に戻り、人気のない教室に飛び込む。

なぜか恥じらいを見せて、落ち着かない様子のセツ。

「こんなところに連れ込んで、どんなプレイをなさる気なので
すか？」

「ブハッ！」

鼻血を噴き出すルーファス。

「ご、誤解だよ！　ひとに見られると変なウワサが広まるか
ら！」

「ひとに見られるか見られないか、そのドキドキがルーファス
様は好きなのですね」

「違うから！」

叫んだせいでさらに興奮して、ビュッと鼻血がさらに出た。

おっぱいタッチに続き、放課後の教室に連れ込み。裏目裏目
だ。

ルーファスはセツの腕を掴んで走り出す。

人気のないところで二人つきりになるから、イケナイのだ。

ひとの多い場所、多い場所　とルーファスがやって来たのは、
学院近くにあるカフェだった。

軽くメニューを注文して、一息ついたルーファスは向けられ
ているセツの視線に気づいた。なんだか嬉しそうなのだ。

「どうしたの？」

「だって初デート……人生初のデートですもの」

ドッカ〜ン！

ルーファスの脳ミソ爆破。

あまりにも迂闊すぎるぞルーファス。

どう見てもデートです。

しかも、ここはケーキが美味しいと女の子に人気のカフェ。その名もメルティラヴ。

甘い物好きのルーファスは、いつも周りの視線も気にせず来てるもんだから、うっかりこの店を選んでしまった。いつもは気にならない視線も、今日はちよつと刺さります。

ルーファスにその気がなくても、セツが醸し出すラヴの香りが、あれが絶対にデートだと周りに確信させてしまっている。

どこにセツを連れて行つても裏目。メニューも注文してしまつたし、ルーファスはここで決着をつける決意をした。

「やつぱり結婚なんてできないよ」

ルーファスの発した言葉で店内が一気にざわめいた。そして、すくつと静まる。

次の展開に人々は耳を傾けている。

セツは真剣な顔をした。

「わたくしが間違つておりました」

「だったら婚約は破棄で」

「まずは結婚を前提にお付き合いをするのが道理。しかし、ここでこうしてデートをしたのですから、次のステップは結婚ですわ！」

「……………（もうすごすぎるよ、君）」

完全にルーファスが押されている。出会ったときからずーつと押されっぱなしだ。

だが、ここで負けちゃダメだ！

ルーファスは踏ん張りを見せる。

「何度も言ってるけど、知り合ったばかりだし、お互いのことよく知らないし」

「そんなにもわたくしに興味を持ってくださるなんて、愛を再確認いたしました」

「いやいやいや、なんでそうなるのさ」

「生まれはワコク、ここよりずっと東にある小さな島国です。しかし、メイドインワコクと言えば、どの国でも知られる安心安全超高品質のブランドと言っても過言ではありません。そんな国に生まれたわたくしは、当然のように科学者としての英才教育を受けました」

「科学者って意外だなあ。東方のワコクって言ったら、うちの学校にも学生や先生がいるよ。そうそうちよっと行ったところにあるももやさんっていう和菓子屋さんも、ワコク出身だって言ってたっけ」

「歳は一五、七月二日生まれのA B型」

「って君、私の話聞いてないでしょ？」

「好きな男性のタイプはルーファス様」

「ちよ、ちよっと」

「将来の夢はルーファス様のお嫁さんになること」

「聞こうよ人の話を」

「ルーファス様のお話なら一字一句漏らさずに聞いております。『科学者って意外だなあ。東方のワコクって言ったら、東方のワコクって言ったら、うちの学校にも学生や先生がいよ』続きも復唱しましょうか？」

「しなくていいから」
「ずっとセツのペース。」

流れを変えようにもルーファスのやることはこれまで裏目裏目。ここでだれかが流れを変えてくれないものか？

そこへちようどケーキと飲み物が運ばれてきた。

「ご注文はこれでいいな？」

なにこの接客する気ゼロのプレッシャーは？

まったく、この店員の教育がなっていないつたらありやしない。

と、ルーファスはメニューを運んできた女を見た。

《 二 》

凍り付きそうになるルーファス。

「か、かーしゃ!?」

なんとメニューを運んできたのはカーシャだった。べつにここでバイトをしているわけでもなく、普通に私服でメニューを運んできた。なんだか遠くではウエイトレスのひとりだが、カーシャに異様なまで怯えている。

セツが首を傾げてカーシャを見つめた。

「こちらの方はお知り合いなのですか？」

ルーファスはあまりのプレッシャーに口を開けない。

そのプレッシャーの塊は、強引にルーファスの横に座った。

「妾はカーシャ、ルーファスの保護者のようなものだ。こいつ

が結婚すると聞いてな、本来ならそちらから挨拶に来るのがしかるべきだが、こうしてわざわざ妾から出向いてやったのだ」
ウワサはすでにカーシヤまで届いていた。

ただでさえ手の焼ける問題だったのに、ここでカーシヤの介入があつたら混乱は必須。

「まあルーファス様の保護者の方ですか。ご挨拶が遅れました、わたくしはルーファス様と婚約したセツ・ヤクシニと申しませう」

「土産もなしに挨拶とは、いい根性をしておるな（これがドラマでよく見る嫁いびり。ふふっ、なかなかおもしろい）」

カーシヤさんなら、きつと良い姑になれます。そーゆー意味で。

すぐさまセツはルーファスのケーキをカーシヤの前へ。

「どうぞ、つまらないのですが」

「ふむ、本当につまらないものだな（さすがルーファス、この店で一番美味しいケーキを注文しておるな）」

なんだかちよつとカーシヤは嬉しそう。

なんだかちよつとルーファスは悲しそう。

「（僕のケーキが……）」

セツがケーキをカーシヤに渡さなくても、きつとカーシヤなら無断でルーファスのケーキに手をつけるだろう。結果は同じだ。

カーシヤはケーキを頬張りながら、二人に視線を向けた。

「で、二人の馴れ初めを言ってみる（美味しいな、口の中で蕩け

る食感が堪らん」

「食べるか聞くか、どっちかにしなさい。

「お慕いしているルーファス様から、ある日突然に唇を奪われました。我が家では初めて接吻を交わした相手と契りを結ぶと掟で決まっているので、心置きなくルーファス様と結婚できるというわけです」

嘘ではないが、説明の仕方が極端に寄っているような気がする。

「すぐさまルーファスが口を挟む。

「キスは事故だったんだよ、本当だから。それに結婚なんて、いくらなんでも」

ギロつとカーシャがルーファスを睨む。

「それでも男かルーファス。男なら責任を取れ！（だがこの場合、どちらに転んだほうが面白いのか。やはり結婚には反対しておくべきか？）」

つまり面白ければいいってことですね。さすがカーシャさんです。

このやり取りを店の片隅で覗き見していたビビ。

「（……そーゆーことだったんだ。ルーちゃんがモテるわけないもんね、へっぼこだし）」

ビビはバレていないつもりだったが、カーシャはその気配に気づいていた。

「（コソコソ尾行なんぞしおって、ここは一発）二人の結婚、妾の権限で認めよう。明日はちょうど休日だ、結婚式は明日で

決定でいいな！」

ブホオオオツ！

ビビは思わず口からアツプルティーを噴き出した。

「だ、大丈夫ですかお客さん！」

ウエイトレスが慌てたことによって、店内の視線がビビに向けられた。

ルーファスたちに気づかれまいと、ビビはササツとテーブルの下に身を隠して、鼻を摘んで口を開いた。

「だ、だいじょーぶ！」

そんな鼻声だけを遠くの先から聞いたルーファスは、

「（あのひと風邪なのかな）」

と、ぜんぜんビビに気づいていない様子。

カーシャはひとつ咳払い。

「コホン、とにかーく！ 式は明日だ、会場と招待状は妾が手配してやろう（祝儀の八割は懐に入れるとして、祝儀成金も夢ではないな、ふふっ）」

お金に目が眩んでいるカーシャ。

ルーファスは席を立ってテーブルを叩いた。

「冗談じゃないよ！」

「冗談で結婚はできん、つまりこれはマジ結婚だ！」

「茶化せないでカーシャ！ とにかく、結婚なんて考えたこともないし、まだ僕は学生で一六歳なんだよ！ 結婚なんてできるわけないじゃないか！」

セツはルーファスの手を握って瞳を輝かせた。

「ご心配ありませんわ。わたくしも昨日まで結婚のケの字も考えておりませんでしたから。それに一五歳のわたくしができると言っているのですから、一歳も年上のルーファス様にやってできないことはありません！」

相変わらず一步も引かないどころか押してくる。

このままでは結婚の流れで進んでしまう。

ルーファス逃亡！

「やっぱり結婚なんてできないよ！」

店を飛び出してしまったルーファス。

すぐにカーシャが立ち上がった。

「おのれルーファスめッ！ 食い逃げし追って許るさんぞ！」

いやルーファスは食ってない。ルーファスのケーキを食ったのはカーシャだ。

カーシャはセツの腕を掴んで店を飛びだそうとした。

が、ここで店員が待ったを掛ける。

「お客さんお金！」

「金ならあいつが払う！」

カーシャはビシツとバシツと、店の隅にいたビビを指差した。

そして、店を出て行ったのだった。

残されたビビはショックを受ける。

「バ、バレてた（……）しかもなんでアタシがみんなの分まで）」

ビビはお財布を開けて溜め息を落とした。

ドーにか、コーにか、セツたちを巻いたルーファスは自宅に帰ってきた。

「はあ、疲れた（とりあえず飲み物飲み物つと）」

キツチンに向かったルーファスは、そこで半裸のリファリスに遭遇。日が昇ってるうちからビール片手に上機嫌だ。

「また姉さんお酒ばっかり飲んで（太んないのが不思議だよ）」

「よオ色男！」

「はいはい、お酒もほどほどにね」

「いいじゃないのさ、なんたつてあなたの結婚祝いの酒なんだから」

ちゅど〜ん！

「はあ〜っ!?」

思わずルーファスは大声を上げてしまった。

ウワサはすでにここまで広まっているらしい。

リファリスはルーファスの肩を抱いた。

「自分の弟にこんなこと言うのもなんだけど、世界が滅びるほうが先だと思ってたからね」

「（それはこっちのセリフだよ）」

「しかも相手が幼なじみのローゼンクロイツだなんて」

ちゅど〜ん！

「はあ〜っ!?」

「あんたが幸せなら姉ちゃんはないよ、たとえ相手がオカマだろうとね。違うか、そういうのびーえるとかいうんだ

る、ローザが前に教えてくれたよ」

「ぼ、僕がローゼンクロイツと結婚なんてするわけないだろ！
（てゆうか、ローザ姉さんの口からなんでBLなんて言葉が…

…」

「違うのかい？」

きよとんとしたリファリスは少し考え、ポンと拳を手のひらの上に叩いた。

「ならビビちゃんか」

「違うよ！」

「カーシャと結婚したら一生尻に敷かれるぞ」

「違うってば！」

「そうかそうか、小さいころよくエルザに付きまとってたな」

「それは子供のころの話だろ！」

「ほかにだれか……」

二人の間にタケノコのように人影が生えてきた。

「わたくしですお姉様！」

不法侵入セツ登場！

驚いたルーファスは一步後退った。

「どこから入ってきたの!？」

「もちろん玄関からに決まっているではありませんか、泥棒じやあるまいし」

まったく悪びれていない。

リファリスはセツのつま先から頭のとっぺんまで、じっくりと舐めるように見定めた。

「ふゝん、なかなかのべっぴんじゃないか、ルーファスにはもつたないくらいだ。見たところワコクの出身みたいだけど、クソ親父が見たら反対されるだろうね、異文化を認めない頑固親父だから」

「お姉様、つまらないものですが」

セツは隠し持っていたビール樽を出した。

それを見た途端、リファリスはセツを抱き寄せて上機嫌になった。

「今日からあんたはわつちの妹だよ、あつはは！ クソ親父なんぞガツンと言つて結婚に賛成させてやるさ！」

酒で落ちた。

リファリスはルーファスを置いて、セツをリビングに案内した。

「まずは妹のローザと母さんを仲間に引き入れるんだ。そうすりゃ、クソ親父もウンというだろうさ。クソ親父もあの二人だけには弱いからね」

「お二人の好きな物はなんでしょうか？」

「そうさねえ」

答える前にルーファスが二人の間に割つて入った。

「ちよつと勝手に話進めないでよ！」

「ルーファスは黙つてな！」

リファリスの手に顔をグウゝと押されてルーファス沈没。

ピンポーン

家のチャイムが鳴った。

リファリスはセツと話し込んで出る気配がない。仕方なくルーファスが玄関に向かった。

「どなたですか？」

ドアを開けると、そこに立っていたのはクラウスだった。

「水くさいじゃないかルーファス」

「私は結婚」

「するそうじゃないか！」

「しないってば！」

「そうなのか？　だがもう祝いの品を持ってきてしまったぞ？」

言われてルーファスが玄関の外を見ると、道に山住にされたお宝の山と高級食材の数々。

「こ、困るよ、あんな物もらったら！　そもそも結婚の話はデマなんだし！」

ウワサが広まり、騒ぎが大きくなると、誤解でしたじゃ済まされなくなる。それをルーファスは悟った。

お付きで来ていたエルザは兵士たちに撤収をかける。

「これより運んできた物を再び城に持ち帰る！」

「いや、待て」

と、リファリスはエルザの肩を叩いて続ける。

「せつかくだ、酒くらいは置いてけ」

「久しぶりだなリつちゃん。お前が帰ってきていたことは知っていたが、忙しくてな」

「再会を祝して飲むぞ！」

「いや、私は酒は……」

「そうかエルりんは下戸だったな。そんなことはいいとして、いつしよに飲むぞ！」

よくないだろ。飲めない相手を飲ますな飲ますな。

エルザがリファリスに拉致され、ルーファスが大量の祝いの品の前で頭を抱えている中、セツはクラウスにご挨拶をしていた。

「この度、ルーファス様を婚約いたしましたセツと申します」

「僕はルーファスの古くからの友人のクラウス。この国の王をやっている者だ」

「まあ王様なのですか。ルーファス様の交友関係は広いのですね」

「君のような美しいひとがルーファスと結婚してくれるなんて、僕は友人として嬉しく思うよ」

道の向こうから、なにやら大勢が押し寄せてくる。

「ルーファス結婚おめでとう！」

「ふざけんなルーファス！」

「俺より先に結婚しやがって！」

「うらやましくなんてないからな！」

「パンツ見せてくれませんか！」

「呪つてやる！」

結婚のウワサを聞きつけて、知人友人が駆けつけたらしい。しかもほとんどがお祝いじゃなくて、呪いをぶつけに来たらしい。

こんな状況なら、誤解でしたてみんな喜ぶんじゃないだろうか？

ルーファスは一步前へ出て息を大きく吸い込んだ。

「みんなよく聞いて欲しいんだけど、結婚の話は」

「順調に進んでおります。ぜひ、みなさま明日の結婚式に来てくださいまし」

と、セツが途中で割り込んできた。

負けじとルーファスは一步前へ。

「結婚なんて絶対に」

「します！」

「またもセツが！」

だが、ルーファスは負けない。

「しません！」

「そう、離婚は絶対にしません、幸せになります！」

セツも譲らなかつた。

このままではラチが開かない。

こういうときはお決まりの　ルーファス逃亡！

だれかが叫ぶ。

「ルーファスが逃げたぞ！」

「あれがウワサのマリツジブルーかつ！」

「パンツの色教えてくれないとイタズラしちゃうぞ！」

「花嫁が花婿を追いかけはじめたぞ！」

とにかく逃げるルーファス。

しかし！

恐ろしいことに、恐ろしいことに、恐ろしいほど体力のないルーファス。

「ゼーハーゼーハー」

息切れして立ち止まっていた。

そこへちようどやってくる暴れ馬。

「馬!？」

ど〜ん!

狙っていたように馬に跳ね飛ばされたルーファス。

すぐさま犯人が馬から下りてきて倒れるルーファスに駆け寄った。

「大丈夫ルーファス!？」

どうやらルーファスの知り合いらしい。

朦朧とする意識でルーファスは顔を上げ、その人物を見た。

「ローザ……姉さん……」

「ローゼンクロイツと結婚するって本当なの!？」

「は?」

「お姉ちゃん、それはそれでアリだと思っの」

瞳をキラキラ輝かせているローザ。

瀕死だったルーファスがビシツと立ち上がった。

「ローゼンクロイツと結婚するわけないでしょ!？」

「はい、わたくしと結婚します」

いつの間にかセツ登場。

すかさずセツはローザを連れてルーファスに背を向けると、とある本を手渡した。

「お姉さまがお好きだと聞いて、どうぞつまらない物ですが」

「まあ、すごい！」

「気に入っていただけでしたか？」

「ええ、すごいモノをお持ちで」

「いったい何の本をプレゼントしたんだツ！」

「ちょっと顔を赤らめたローザが、スタスタつとルーファスの前までやって来た。」

「修道女として、なにより姉として、ルーファスの結婚を心から祝福します。この二人に幸あれ！」

「ローザまでもセツの味方に！」

「どどんルーファスが四面楚歌（四方を敵に囲まれて孤立無援なこと）になっていく感じだ。」

「だ〜か〜ら〜、僕は結婚なんてしないって」

「で、式場はどこがいいと思うルーファス？」

「ぎゃつ、カーシャ!?（いつも神出鬼没）」

式場のパンフレットを持ってきたカーシャが突然現れた。

「妾としては学院で式を挙げるといいうのもいいと思うぞ（タダで使えるな）」

「だから僕は結婚なんて」

「するだろう？」

鋭い眼光でカーシャがルーファスを睨む。

ここでNOなんて言おうものなら、そりゃー大変なことになる。が、YESなんて言えばそれはそれで大変だ。

答えが出せないときは　ルーファス逃走！

ドテッ！

走り出した瞬間にルーファスがコケた！

「二度も逃がすか、たわけ」

ロープを握っているカーシャ。そのロープの先はルーファスの足首に結ばれていた。

セツはカーシャの前で瞳を輝かせた。

「ありがとうございます、夫を捕まえてくださって」

「ふむ、保護者のようなものとして当然だ」

ここでボソツとルーファスが口をはさむ。

「まだ夫じゃないし」

だが、それも時間の問題に思えてくる。

逃走を封じられた今、ルーファスに残された技はあの究極奥義。

土下座！

「お願いだから婚約破棄して！」

おでこをしつかりと地面に付ける華麗なる土下座スタイル。

決死の土下座を見せつけられたセツ。

「男が土下座など、こんな無様な姿を見せられてしまっ

ては

婚約破棄か？

「わたくしが結婚してあげなければ、婿のもらい手がありませんわ！」

逆効果！

冴える裏目！

リバーズアイ！（そんな単語ありません）

うなだれるルーファス。

「本当に婚約破棄できないの？」

「掟ですから」

と、セツがキツパリ。

突然、カーシヤは折りたたまれた紙を読みはじめた。

「ふむふむ、其の一、自分より強い者と結婚してはならない。

其の二、婚約者が新たに他の者と接吻した場合は無効とする。

其の三、同性には掟そのものが適応されない」

それを聞いていたセツがハツとした。

「婚約破棄の方法を記した秘伝書がどうして!？」

さつきまで本を読みふけていたローサが答える。

「本の中に挟まっていたの」

ついに婚約破棄の方法が見つかった！

しかし、果たしてルーファスにそれが実行できるのか!?

《三》

ルーファスは真剣な顔をした。

「じつは今までみんなに黙ってた秘密があるんだ……じつは、あたし女の子なの！」

がぐん。

セツシヨック！

「ルーファス様がおなごだつたんなんて！」

ローザシヨック！

「どうして今までお姉ちゃんに教えてくれなかったの！」

カーシャはルーファスの後ろに回り、パンツごとズボンを一気に下ろした！

「これのどこが女だ！」

パオ〜ン

ポツとセツは顔を赤らめた。

「まあ可愛らしい」

続けてローザは聖母の笑みを浮かべた。

「幼いころとぜんぜん変わらないのね」

なにがデスカ？

慌ててルーファスはズボンをはき直した。

「な、なにするんだよ！」

下半身大露出で作戦失敗。てゆか、信じかけたローザっていつたい。

ルーファスに残された婚約解除法はあと二つ。

構えるルーファス。

「(別の女の子とキスなんて……)」

セツとのキスが脳裏に過ぎってしまったルーファスは、あの柔らかな唇の感触を思い出して　ブフォツ！

鼻血が出た。

「(キスなんてできるわけじゃないじゃないか。そうなるとセツに勝たなきゃいけないんだけど、女の子に手を上げるなんて)」と

「ところでなんで強い者と結婚しちゃいけないの、普通逆なんじや？」

「元々は男子の代に作られた掟だからです。強い嫁を貰うと、尻に敷かれるということらしいですわ」

と、セツが答えてハツとした。

「まさかわたくしを倒すおつもりじゃ!？」

「そんなつもりじゃないから安心して!」

ルーファスは否定したが、その言葉はセツの耳には華麗なるスルー。

「これが愛の試練なのですな。ルーファス様はその気なら、わたくしも本気を出させていただきます」

鉄扇を構えたセツはヤル気満々。

その姿を見てルーファスは逃げ腰。

「(ヤバイ、あの殺気……殺される)」

「ルーファス様、そちらから来ないのなら、わたくしから旋風!」

軽くひと扇ぎされた鉄扇からつむじ風が放たれた。

ルーファスが風に飛ばされた!

「うわあっ!」

うまい具合に地面に着地したルーファスは、飛ばされた弾みを利用してそのまま逃走!

走り去るルーファスの背中姿。

……………。

しばらくしてセツはハツとした。

「逃げられ……逃げられたやないかド阿呆！」

ゴリラのような顔をしてセツが怒鳴り散らした。

そのあまりの変わりようと気迫に唾然とするカーシャとローザ。

だがすぐにカーシャは納得した。

「（美人のクセにルーファスを追い回すくらいだ。このくらいの欠点はあって当然か）」

自分に向けられている奇異な視線に気づいて、セツはすぐさま顔を元に戻して微笑んだ。

「ど、どうかなさいました？（み、見られた。見られてはあかんものを見られてしまうた）」

ササツとそっぽを向くカーシャ。

空気を讀んだローザも本に夢中になった。

「まあ、こんな立派なモノが……きゃっ」
「だからどんな本読んでんだよ。」

しゅん。

三人無言。

変な空気が流れはじめた。

堰を切ったように慌ててローザが口を開く。

「そうだ夕飯の買い物に行かなきゃ！」
「カーシャも続いた。」

「そうだペットにエサをやらんと」

そして、便乗してセツも。

「そうだルーファス様を追わないと」

そして三人は頭を下げ、別々の方向に進みはじめたのだった。

だいがセツを巻くことに成功したルーファスは、若者が多く集まるオサレストリート、通称にゃんこ通りに来ていた。

クラウド魔導学院は週休一日だが、多くの企業や学校は週休二日のところも多く、ハリユクの今日は休みの若者も多い。

オサレファツソンのブテックを立ち並ぶ通りは、若者でひしめき合っている。ルーファスは人混みに紛れる作戦だ。

しかし、そんなルーファスの浅はかな知恵が悲劇をもたらすことになるのだった。

片膝をついてバズーカを肩に構えたセツ。

「科学の力でルーファス様を捜して見せますわ！」

発射！

科学の力がどーとかこーとか以前に、どー見ても無差別攻撃です。

必死にミサイルを避ける若者たち。ひとの群れが左右に割れ、その先にルーファスが見えた。

ドーン！

そして、結果は大爆発。

爆発に巻き込まれたルーファスは、ボロボロになりながら立ち上がった。

「うう……死ぬかと思った」

とか弱ってる間にセツは目の前まで迫っていた。

「ルーファス様、召し上がれトリモチ！」

バズーカからミサイルではなく、今度はトリモチが発射された。

避ける避ける避ける！

運動神経のないルーファスだが、避けるのは得意だったりする。ドッジボールで最後まで残っちゃって、ボールも取れずに困るタイプだ。

ルーファスが避ければ避けるほど、周りの若者たちがベツトベツトのトリモチに捕らえられていく。

「うわっ、なんだこれ！」

「きゃっん、助けて！」

「取れないぞ！」

君たちの犠牲は忘れない！

逃げるルーファス。

逃がさないセツ。

「メイドインワコクは甘くありませんわよ！」

巨大な魔人の手がルーファスに襲い掛かる。違う、それは機械の手だ。セツの左腕に取り付けられたメカニカルアームが意のままに動く。

避けられたルーファスの代わりにポストがメカニカルアームが握られた！

ぐちゃ。

あ、ポストが潰れた。

顔面蒼白になるルーファス。

「あんなのに握られたら死ぬし！」

一瞬で死ねればいいが、下手に死ねないと、関節が逆方向に曲がったり、内臓が××で××な状態でしばらく死ねない可能性もある。まさに生き地獄だ。

セツが鉄扇を扇ぐ。

「逆風！」

放たれた風を受けた者が、進行方向とは逆方向に飛ばされてしまうという必殺技。

ひとたびルーファスが逆風を受ければ、あつという間にセツの前に飛ばされてしまうが。

が！

風を受けた若者たちが大津波になってセツに襲い掛かる。

「きゃあつ……つて、おんどりやに用はないんじゃアホ！」

ゴリラの形相でバズーカ発射！

晴れときどき人。

驚いたルーファスは振り返ろうとした。瞬間に、セツは顔を元に戻す早業だ。ルーファスはセツの変貌に気づいていない。

セツはもう目と鼻の先。

「ルーファス様！」

「うわっ、お願いだからあきらめて！」

襲い来るメカニカルアーム！

紙一重でかわしたルーファス！

だが、メカニカルアームから網が発射された。

ルーファスに避ける余力はない。

「にゃあ」

突如、セツの目の前に現れたネコ。

ゴクンとつばを飲み込み固まるセツ。

「にゃあ」

「きやあああゝゝゝっ！」

血相を変えてセツは逃げ出してしまった。

尻餅をつくルーファス。

「ふう……助かったの？」

通称にゃんこ通りのゆえんは、野良猫が多いことからその名がついたと云われている。

「はい、お待ちどおさま」

クレープ屋台の兄ちゃんから、ストロベリーチョコ生クリームクレープを受け取り、ビビは笑顔で歩き出した。

「（仕送りがあると無駄遣いが多くなっちゃう。けど、いつか）」

あゝん、と大きな口を開けてクレープを頬張ろうとしたとき。

「どいてどいて、ビビ!？」

飛び込んでたルーファス!

グチヨ。

「ああっ!」

ビビが叫んだ。

チョコとクリームまみれになったルーファスの顔。せっかくのクレープが台無しだ。

「ルーちゃんひどい!」

「ご、ごめん、でも今はそれどころじゃ……」

すぐ後ろからはセツが追ってきていた。

「鬼ごっこは終わりですわよルーファス様。でもその前に一言申し上げたいことが……両目についたいちごは取った方がいいですわ」

変態イチゴ男！

ルーファスは指摘されて、目についたイチゴをパクリと口に放り込んだ。

続けてビビがルーファスにハンドタオルを手渡す。

「顔も拭いたほうがいいよ」

「ありがとう」

受け取ったハンドタオルで顔をゴシゴシ。

しかし！！

水で落とさないとベトベトです。

ブーン。

虫の羽音。

ハチだ！

甘い香りに誘われてハチが現れた。狙いはもちろんルーファス。

「ぎゃ〜っハチ！」

逃げるルーファス。

すぐさまセツが追いかける。

「どうして逃げるのですかルーファス様！」
ハチに追われているからです。

都会の八ちは花の蜜だけではなく、人間の食べ残した甘い物、溢れたジュースなども採取してたくしく生きているそうです。

とかミニ情報をはさんでいる間に、八ちはいつの間にか大群に。ちよつと不自然に多くありませんか？

ところで。

「なんでいつしよに逃げてるの？」

と、ルーファスは並走するビビに尋ねた。

「なんとなくその場の雰囲気で……。てゆか、ルーちゃんあの八チ大変だよ、どうにかして！」

「どうにかって言われても」

「そういえばルーちゃん、今日授業で使った魔法マジックポーション薬ちゃんと洗い流した？」

「えっ？（今日の授業で……）あっ！」

「八チなどの動物が寄ってくるからちゃんと落とすようになって注意されたじゃん！」

クレープの匂いではなく、授業で使った魔法薬が大群の八チを引き寄せたらしい。

前方に見えてきた噴水。

「あれだ！」

叫んだルーファスは一目散に噴水の中に飛び込んだ。なぜかビビの腕を掴んだまま。

「なんであたしもっ！」

バシャーン！

噴水の池の中で八チをやり過ぐす。

「ブハーッー！」

息が続かなくなつて二人同時に水飛沫を上げて池から出た。どうかハチはやり過ぎたらしいが。

「今度こそ、鬼ごっこは終わりですわ……ルーファス・さま」

満面の笑みでセツに出迎えられた。

辺りを急いで見渡すルーファス。

噴水の周りに立てられた謎の柱たち。柱から発せられた電磁フィールドが檻を形成していた。

逃げられないと悟つたルーファスは、ビビの瞳を真っ正面から見つめて、深く頷いた。

そして、バシツとセツに顔を向けた！

「ビビと私はすでに結婚してるんだ！」

衝撃告白！

でも、明らかにウソです！

セツは鼻で笑つた。

「ならば、今ここで二人の接吻を見せてくださいまし！」

切り返しに切られるルーファス。

「うぐっ！（ビビとキ、キスなんて……）」

横を見るとビビがこちらを潤んだ瞳で見つめていた。

ルーファスはガシツとビビの両肩を掴んだ。

頬を真っ赤にするビビ。

「ル……ルーちゃんのばか！」

ゲーパーンチ！

強烈なグーを頬に食らったルーファスはぶっ飛び、さらに電磁フィールドに当たって感電した。

「ギャアアアアアアッ！」

ビツショビショだったので電気をよく通す。うん、ルーファスツイてないね

可哀想なルーファス。彼に手を差し伸べたのは、セツだった。ルーファス様、なぜあんな嘘をおっしゃったのですか。あのおなごに嫌われているのは、明らかではありませんか」

ガーン。

「ぼ……僕ってビビに嫌われてたのか」

ルーファスシヨック！

セツはルーファスに肩を貸して立たせた。

「さあルーファス様、あんなおなごのことは忘れ、わたくしと結婚いたしましょう」

密着するセツとルーファス。

ビビは背を向けて走り出した。

自然とルーファスの手がビビの背に伸びた。

「待ってビビ！」

「ルーちゃんなんて、ルーちゃんなんて……デデデデッ！
ビビちゃん感電。」

「危ないって言おうとしたのに」

ボソツとルーファス。

前を見ないで走ったビビは見事に電磁フィールドに体当たりしたのだ。

ビビは気を失ってしまった。

電磁フィールドが解かれ、セツにルーファスがズルズルと引きずられていく。

「ルーファス様のお父上にもごあいさつをしないと」

「（それは絶対に困る！）だ、だったらお土産のひとつも持って行かないと」

「お父上はなにがお好きなのですか？」

「これなんだけど……」

ルーファスは懐から大量の写真を出して手渡した。

「きゃあああ〜〜っ！」

叫び声をあげたセツは、ルーファスをほっぽり出して、はるか後方まで神速で後退った。

地面にバラまかれた写真。その写っていたのかわいらしいにやんこたち。

セツの反応にルーファスは一汗拭った。

「ふう、生じやなくても効果あるんだ、よかつたあ」

ここまでくればセツのネコ嫌いは確定的だろう。

震えるセツは全身の毛を逆立てていた。

「たばかりましたわね、ル〜ファスさま〜」

亡霊のような声を発したセツの毛はさらに逆立った。

それはまさに怒髪天。怒髪上って冠を衝く。頭髪が逆立ち、怒りに充ち満ちている。ただしゴリラ顔ではないが、頬がピクピクしているので時間の問題だろう。

今セツは壮絶な戦いを繰り広げていた。

「（ルーファス様に見られている……駄目よ、駄目よ、怒っては駄目よ）」

類人猿 ヒト 類人猿 ヒトの繰り返し。

最後に勝つのはヒトかサルか！

今、ついにヒトとサルの最終戦争がはじまるうとしていた！
なんていうのはウソで、す〜とセツの毛が静まった。

が、セツの目の前にネコの写真が!?

「きゃあああ〜〜〜っ！」

膝を突きうなだれるセツ。

写真を見せたのはカーシャだった。

「この写真を見せるとなにか起こるのか？（カーシャちゃんワ
クワク）」

さすがカーシャ。混乱を起こす行動を自らやります。

怒髪天。

「ルーファス様、お下がりになって！」

鉄扇から放たれた強烈な突風によってルーファスがぶっ飛んだ。遠く遠く空のサヨウナラ。

この日、ルーファスは夜空の星になった。

ルーファスがこの場から姿を消したことによって、セツの怒りは解放された。

「おんどれえっ、地獄見せたる！」

髪を結わいていたヒモがブチッよ音を立ててキレた。

解放された髪が渦巻く。

美しい黒髪が根本から燃えるように紅く変わっていく。

螺旋を描き天を突く紅髪のセツ。

はだけた着物から首筋が覗く。

色気に満ちたセツの肢体　でも顔はゴリラ！

カーシヤは後退った。

「な、なんとというブサイク！」

言っちゃった。言っちゃったよ。

魔力が多く集まる場所に現れるマナフレア。セツの周りに浮かんでいたマナフレアが、弾け飛んだ。

「ブサイク言うたな、ブサイク言うたな。わしが気にしてることをぬけぬけと！」

鉄扇　怒りの炎の舞い。

扇がれた鉄扇から炎が風に乗って放たれた。

カーシヤの周りにマナフレアが集まる。

「ウォーターカーテン！」

流れる水のカーテンによつて炎が防がれた。

カーシヤの瞳が冷たい色を放つ。

「妾に攻撃を仕掛けるとは良い度胸だ。お前の結婚なんて手助けしてやるもんか、明日の式もやめだやめだ、やゝめた！」

「こつちから願い下げじゃ！　勝手に式挙げたるわ！」

「勝手にやれるもんなやるがよい、妾がぶち壊してやるぞ！」

「ひとの幸せ壊して楽しいか、さてはモテへんな！」

「絶世の美女を前にして、お前の眼は腐つとるのか？」

「腐つとるんはおんどのれ頭じゃ！」

言い合いをしているだけならいいが、二人の間には熱気と冷

気が渦巻き、暴風が発生していた。

怒れる風は噴水の彫刻を破壊し、近くにいた人々も吹き飛ばした。

さら噴水や池の水も暴れ回り、辺りは暴風雨に晒されたように荒れに荒れた。

もはやこの場には何人たりとも近づけまい。

……ハズだったのだが。

空色ドレスが何食わぬ顔でふあふあつと現れた。まったく周りの惨状が見えてないご様子。

しかも、争う二人の間に割って入って、

「聖カツサンドラ修道院がどこにあるか知ってるかい？（ふあふあ）」

その場所はローゼンクロイツが下宿している場所だ。

つまり、道に迷ったんですね！

ローゼンクロイツ君ったら極度の方向音痴だから！

「は、は、はつくしゅん！（にゃ）」

あつ、ローゼンクロイツがくしゃみした。

そう……ローゼンクロイツは方向音痴だけでなく、クシヤミをしちゃうと大変なことになるのだ。

「きやあああ~~~~っ！」

セツの叫びが木霊した。

ネコミミ&ねこしっぽのローゼンクロイツ見参！

「ふあふあ〜」

寝惚け眼まなこのローゼンクロイツから、大量のねこしゃんが噴出した。

出たッ！ ねこしゃん大行進だ！

目を開けたままセツ気絶。

身動き一つしなくなってしまうたセツだが、なにやら様子がおかしいぞ？

セツの体からゆらゆらと煙が立ちのぼり、やがてそれはモクモクと巨大な煙の塊になった。

巨人だ。

おそらくは思念体かなにかだろう。

トラ柄のビキニを着た頭に角が生えた巨大なねーちゃんが出現したのだッ！

カーシャが見上げながらボソツと。

「鬼だな」

そう言つて、何食わぬ顔でこの場から立ち去ろうとしたのだが、巨大な鉄扇が地面に突き立てられ壁をつくった。

「逃がすか！」

鬼女はカーシャとやり合うつもりだ。

振り返り様にカーシャは強烈な吹雪を放つ。

「ブリザード！」

巨大な鉄扇で鬼女は吹雪を防いだ。

なぜが笑うカーシャ。

「ふむ、実態はあるようだな」

セツの体から現れた思念体は、霧のようなものではなく、形あるものということだ。その証拠にカーシャの吹雪を防いでいる。

「ならば凍らせるのみ！」

マナフレアがカーシャの周りに集まる。

だが！

ドーン！

この場にはローゼンクロイツもいるのだ。

カーシャはねこしゃん爆弾の直撃を食らって、ボロボロになりながら地面でへばった。

イツちゃってるときのローゼンクロイツは無差別攻撃。むしろ攻撃っていう概念ですらないかもしれない。

そう、今のローゼンクロイツはフリーダムなのだ！

巻き起こる爆風。

鬼女もねこしゃん爆弾の総攻撃を食らっていた。

「おんどりゃ、皆殺しにしたる！」

巨大な鉄扇を振りかざす鬼女。カーシャに視線を向けた。が、そこにいたハズのカーシャが、ピンクのウサギのぬいぐるみになっていた。

……逃げたのだ。

「皆殺しじゃ皆殺しじゃ！」

鬼女は怒りで本当に燃え上がって炎に包まれていた。

「……付き合ってもらえん（が、そのうち復讐してやるから待つてるよ、ふふっ）」

ボロボロになりながらも、何食わぬ顔でスタスタと歩くカーシャ。

前方からルーファスがやって来た。

「あつ、カーシャ！ どうしたのその格好？」

「クリスちゃんとお前の許嫁にやられたのだ。両方ともお前の関係者なのだから、さつさとカタをつけて来い」

「は？ なんで僕が？」

「いいから逝ってこーい！」

カーシャのスクリューアッパーがルーファスに決まった。

竹とんぼのように、グルグル回転しながら遙か空にぶっ飛ばされたルーファス。

そのままルーファスは地面に激突。

「うう……（ひどいよカーシャ）」

ヒドイのはいつものことです。

床にへばりながらルーファスが顔を上げると、そこには巨大な影が二つ。

「……なにこの妖怪大戦争」

ルーファスは見なかったことにして、気絶しているフリをして顔を伏せた。

巨大な二つの影。

一つは鬼女なのだが、もうひとつは空色の影。

巨大化したローゼンクロイツ現る！

おそらく本人が巨大化するわけがないので、魔力を練ってつくった氣の塊かなにかだろう。

現状を確かめようと、ルーファスがそくと顔を上げようとしたとき、突然目の前に飛び込んできた立て看板！

ゴフツ！

工事中の看板に攻撃された。

「この変態、ローゼン様のパンツを見ようなんて一万年早いですよ！」

この声はユーリだ。

再び顔を上げようとしたルーファスだったが、後頭部を鷲掴みにされて地面に叩きつけられた。

「うぐっ……痛い」

「そんなにパンツが見たいんですか変態！」

「違うよ！顔を上げようとしただけじゃないか、それに男のパンツなんか見て何になるんだよ！」

「女のパンツだったら見たいってことじゃないですか、この変態！」

「うぐっ！」

再びルーファスは後頭部をグツと押された。

巨大化しているローゼンクロイツ。つまり真下に潜り込めば、パンツが見放題と言うことだ。

で、ユーリちゃんはここに何しに来たの？

「ちよつと眼を離れた隙にローゼン様を見失ってしまって。で

もこうやってスカートの中が覗けるなんてツイてる！（嗚呼、お兄様……ユーリはしかとローゼン様のパンツを目に焼き付けると誓います、どうか見守っていてください）」

つて、パンツ目当てじゃないか！

ユーリは勢いよく顔を上げた。

「……………」

ユーリ硬直。

そっつとルーファスも顔を上げた。

なんてことはない、スカートの中身はズロースだった。

ズロースとは、つまりいわゆるカボチャパンツの下着版のようなものである。

「こんな物、ぜんぜんエロくもなんともないじゃないですかーっ！　ぐわーん！（ううっ、お兄様……世の中って無情なのですね。でもアタシはめげません！）」

シヨックを受けたユーリは、両膝をつけてその場から動こうとしない。

さっさとルーファスは逃げることにした。

サササツ、サササツ、虫のようにルーファスは地面を這って逃げようとした。

が、途中で鬼女と目が合った。

「お主、セツの嬪殿じゃな？」

「違います、違いです。こう見えても妻子持ちの、子供なんて三人いますから。長男は今年幼稚園に入学したばかりでして……」

ウソすぎる！

鬼女は憤怒した。

「おんどれ、見え透いた嘘で逃げようとしおつて！」

巨大な手が伸び、ルーファスの体を軽々と掴んで持ち上げた。すっぽりと鬼女の手に乗まってしまっているルーファス。比較対象があると、いかに鬼女が巨大なのかわかる。そして、目の前のローゼンクロイツも。

ブウウウンツ！

ローゼンクロイツのしっぽが振られた。

電流を帯びた伸縮自在のしっぽ　しっぽふにふにが繰り出された。

ねこしゃん大行進もヒドイが、このしっぽふにふにも負けず劣らず無差別攻撃だ。

しかも、最悪なことに今のローゼンクロイツは巨大化している。

ズザザザザアアツ！

近隣の建物が無残なまでに薙ぎ払われた。

このまで強大すぎる力はもはや神。今やローゼンクロイツは破壊神なのだ！

ローゼンクロイツが破壊神なら、こっちは鬼神だ。

「物騒なもん振り回すなアホ！」

鬼女は巨大な鉄扇をひと扇ぎした。

ふあふあつとローゼンクロイツは竜巻をかわした。

ブオオオオオオツツツ！

巨大竜巻は近隣の建物を巻き上げて、晴れときどき瓦礫の山を降らせた。

顔面蒼白のルーファス。

「最悪だ」

このままでは王都アステアが一夜にして滅びる。

あしたの朝には死の荒野。地図の書き換えが必用になってしまふ。

近隣住民の避難、遠くから見えてくる軍隊。魔剣連隊を引き連れるエルザの姿を見た。

「王都と脅かす化け物め、成敗してくれるわ！」

エルザが切っ先を向けたのは鬼女だけ。

「（見えない見えない、私にはローゼンクロイツなんて見えないぞ）」

現実逃避の真っ最中だった。

一斉砲撃！

飛んでくる砲弾をもるともせず、鬼女は鉄扇をひと扇ぎしてすべて送り返した。

魔剣連隊は一斉に防御魔法で壁をつくり砲弾を防いだ。

防御魔法が解かれ、エルザは冷や汗を拭った。

「危なかつた……ッ!？」

砲弾を防いだのも束の間、巨大なしっばが連隊を薙ぎ払った。ルーファスが惨状から目を背けた。

「最悪だ」

悪夢であって欲しい。

鬼女の笑い声が木霊した。

「婿殿を奪おうとするからじゃ！」

そういう展開なの!?

いつの間にかルーファスをめぐる戦いになってるの!?

人質「ルーファス」元凶。

が〜ん!

ルーファスシヨック!

「僕のせいなのこれ!?(マズイよ、絶対にマズイよ。どうにかしなきゃ)」

これがもしルーファスをめぐる戦いだったとしてら、少なくとも鬼女にとつてそうなのであれば、解決方法はあれしかあるまい!

お祭り騒ぎに誘われて、いつの間にかカーシャが戻ってきていた。

「責任を取ってセツと結婚しろルーファス!」

でも冷静に考えて、本当にそれで事態が收拾するのか?

だってローゼンクロイツはセツとルーファスの流れに関係なく、フリーダムに暴れてるだけだし!

それはそうなのだが、この緊迫した流れに押されて、ルーファスの思考は八〇パーセント低下していた。

「やっぱり僕が結婚するしかないのか……」

妙に納得しちゃったルーファス。

空が輝いた。

半透明のドーム。

周辺一帯がいつの間にか防御結界に封じ込められていた。妖怪大戦争が手に負えないと悟った魔剣連隊が、とりあえず隔離処置をしたのだ。

エルザがボソツと。

「色恋沙汰に国は介入せず」

防御結界の中で思う存分やれということだ。

「なんで妾まで、ホワイトプレス！」

結界を壊そうと躍起になっているカーシャ。いつしよに閉じ込められたのだ。本人の口ぶりでは無関係だと思っっているらしいが、原因の一端は明らかにカーシャにもある。

カーシャも巻き込まれて当然だ！

逃げ場のない結界内はサバイバルでバトルロワイアル。

ねこしゃん大行進！

この状況で最悪災狂の技が発動されてしまった。

しかも、今回のねこしゃんはいつもより巨大。

爆発の連鎖。

巻き起こった爆煙が爆風に掻き消された矢先から、次の煙が辺りを覆う。

ねこしゃんの突進爆発を食らった鬼女がよろめいた。

「くっ……」

揺るんだ鬼女の手からルーファスが落ちた。

ひゅん、ドスツ！

高い場所から落ちた当然の結果がルーファスを待っていた。瀕死のルーファスは地面を這って逃げようとした。

そこに運悪く無差別攻撃の電撃しつぽ！

「ギャアアアアッ！」

しつぽふにふに吹っ飛ばされ、再びルーファスは地面に叩きつけられた。

「死ぬ……もう死ぬ」

周りにはねこしゃんたちも自由気ままに走り回っている。

「婿殿はどこじゃ！」

鬼女の声が響き渡った。

見つかつたら大変だ。

瓦礫の山に隠れながらルーファスは地面を這った。

いったいこの妖怪大戦争はどうやつたら決着はつくのか？

瓦礫の頂上に立ったカーシャ。その腕には何者かが抱かれている。

「ええい、静まれ！ この娘がどうなってもいいのか！」

カーシャに抱かれているのは気を失っているセツだった。

鬼女の動きが止まった。

「おのれ、人質を取るとはおんどれは鬼か！」

ここで鬼女の顔面にねこしゃん爆弾が直撃。

ドーン！

さすがローゼンクロイツ。フリーダムに流れをぶっ壊しくれる。

鬼女のこめかみに血管が浮かび、鋭い牙が剥かれた。

「おんどりゃー！」

キレた鬼女が炎を纏った扇を振り回した。

ビキニ姿の鬼女が踊り狂う。

炎舞によって辺りは刹那に火の海だ。

窮地に追いやられたカーシャはセツを放り出して構えた。とてつもない量のマナフレアが発生した。

「メギ・ホワイトブレス！」

世界を一瞬にして凍てつく死の大地に変貌させる吹雪。

魔法に冠されたメギは、最大級を意味する言葉だ。

走るルーファス。逃げているのではない。逃げるならもっとコッソリ逃げる。

放物線を描いて落下するセツ。

「セツ！」

落下地点に滑り込んだルーファス！

ドスツ！

見事ルーファスは背中でセツをキャッチした。

目を覚ましたセツ。

「ルーファス様……わたくしの尻に敷かれて、さてはドMなのですね！」

「違うよ！ 落ちてきた君を助けたんだよ」

「っ!? ルーファス様……（こんなにポロポロになってまで、わたくしのことを守ってくださいるなんて）」

ポロポロなのはセツを守ったせいだけじゃありませんけど。頬を赤らめたセツはルーファスに抱きついた。

「やはりわたくしは一生ルーファス様をお慕い申します」

「ちよつとそれは……」

「二度もこうして命を救っていただき、わたくしの身も心も命さえもルーファス様のものです！」

「二度？ 一度目は？」

ルーファスは首を傾げた。

そして、ハツとルーファスは気づいた。

セツはあの時のことを語り出す。

「上空でマシントラブルに見舞われたわたくしは、為す術もなく地面に叩きつけられて死ぬのだと覚悟いたしました。しかし、奇跡は起きたのです。ルーファス様がわたくしを受け止めてくださり、しかも接吻まで……思い出すだけで胸が熱くなってしまう」

「（たまたま通りかかって、空から落ちてきた君に押し潰されただけなんだけど。キスはぶつかった弾みの事故だし）そ、それはね」

「命を張ってわたくしを助けてくださったルーファス様に、わたくしはすべてを捧げると決めたのです！」

なんとという美談！

にセツの脳内では変換されていた。

ただここで一つハツキリしたことがある。遊びや酔狂でルーファスに言い寄っていたのではなく、掟というのもしかにかあったかもしれないがそれだけではなく、マジではの字だったということだ！

モッテモテだねルーファス！

「こ、困るよやっぱり結婚なんて！」

「掟ですから」

やっぱり掟は絶対なのだ。

掟プラスほの字。最強タッグにルーファスは追い詰められているのだ。

恋心と掟、どちらが優るのか？

婚約を破棄する三箇条を思い出してみよう。

其の一、自分より強い者と結婚してはならない。

其の二、婚約者が新たに他の者と接吻した場合は無効とする。

其の三、同性には掟そのものが適応されない。

三番目は論外なので、残るは二つ。

「(セツに手を上げるなんて。かと言ってほかの女の子とキスなんてできないし) どうしたらいいんだ！」

「わたくしと結婚なさればいいのです！」

それで一件落着だ。

頭を抱えて悩むルーファス。

聞こえてくる爆発音。まるで近くで戦争をやっているようだ。

でもそんな騒ぎなんて今のルーファスには関係ない。

結婚するのか、しないのか！

悩み続けるルーファスの耳に、微かな声が届いた。

女の子の声だ。

この場にいる女の子？

近隣住民は避難して、防御結界の中にいるのは……。

「助……て……だれか……」

その声を聞いてルーファスは力強く立ち上がった。

「ビビ!？」

紛れもなくビビの声だ。

よくよく思い出して見ると、騒ぎがここまで大きくなる前、たしかビビは電磁フィールドに感電して、そうだ気絶したのだ!

ということとは　　ビビもいっしょに防御結界に閉じ込められた!

しかも最悪なことに、ビビは炎の海に囲まれて身動きができなくなっていた。

「ビビ!」

ルーファスはセツの体を振り払って走り出した。

「待ってルーファス様!　わたくしを置いていく気ですか!」

「ごめん!」

ルーファスはセツに顔を向けることなく走った。

燃え広がる炎の海。

「ビビ!　そっち側にいるんでしょビビ!」

「ルーちゃん、ルーちゃんなの!?　炎の壁が立ちふさがって…

…あついっ!」

「大丈夫、今助けに行くから!」

二人を隔てる炎の壁。

ルーファスの周りにマナフレアが発生する。だが、安定感に欠け、現れては消える。

「ブリザード!」

ルーファスの放った吹雪が炎を呑み込んだ!

しかし、駄目だ。炎の勢いが強すぎて、呑み込んだ矢先から呑み返される。

「マギ・ウォータービーム！」

水を出そうとしたが、安定せずに蒸気と化して消えてしまった。

焦るルーファス。

焦れば焦るほど安定した魔法は使えない。

「げほっ、げほげほっ、ルーちゃん！」

ビビの悲鳴が聞こえてくる。

ルーファスは歯を食いしばった。

マナフレアが安定する。

「マギ・ウォータービーム！」

滝のような水がルーファスの手から噴射された！

これならいけるか！

愕然とするルーファス。

水は炎に触れることも叶わず、刹那にして水蒸気を化した。

膝を突いてうなだれるルーファスの傍に、セツが現れた。

「これは普通の炎ではありません。並大抵の魔法では消すことは不可能。これを消すことのできる芭蕉扇がここにあります」

それはセツが武器として使っていた鉄扇だった。

「すぐに貸して！」

ルーファスは手を伸ばしたが、セツは鉄扇をすつと引いた。

「貸して差し上げるのには条件があります」

「いいから早くかして、そうしないとビビが！」

「わたくしと結婚してください。そうすれば、この芭蕉扇を貸して差し上げます」

「……………」

ルーファスは真剣な顔をしたまま、身動きを止めた。

そして。

「わかった、結婚するよ」

「男に二言はごさいませんね？」

「それでビビを助けられるなら！」

「(“そ”までしてあのおなごを…………)」

複雑な表情したセツ。

炎の海はビビだけでなく、ルーファスたちも呑み込もうとしている。

もう一刻の猶予も残されていない。

ルーファスはセツから芭蕉扇を奪うように取った。

「これで扇げばいいんだよね！」

体をねじり、ルーファスはフルスイングで鉄扇を振るった。

巻き起こるタイフーン！

これまでセツが起こしてきた風よるも強い。

すべてを薙ぎ払う風。

炎の海が風の波に呑み込まれ消えていく。

ルーファスを中心に巻き起こった風はすべてを吹き飛ばす。

ここでひとつ問題が起きた。

風の中心にいるルーファスはいわゆる、台風の眼の中にあるようなもので安全なのだが、外にあるものはすべて暴風に見舞

われる。

「きゃあああつ、助けてルーちゃん！」

空に舞い上がって竜巻に巻き込まれているビビ。炎は免れたがこのままでは！

ビビが竜巻の外に放り出された。

このままでは加速するビビは地面に叩きつけられてしまう。

「ビビー！」

鉄扇を投げ捨てルーファスが走った。

「（絶対に絶対にビビを受け止めるんだ！）」

駄目だ、ルーファスの足では間に合わない。

そのときだった！

鉄扇を拾い上げたセツがルーファスに向かって風を起こす。

「追い風！」

風によって背中を押されたルーファスが加速する！

ビビが地面と激突する！

世界が静まり返った。

「ルー……ちゃん」

「ビビ……」

「ルーちゃん！」

ビビは涙を流しながら自分を抱きかかえているルーファスに抱きついた。

間一髪、ルーファスはビビを受け止めたのだ。

へっぽこ魔導士と呼ばれる（主にカーシャが言い広めている）ルーファスが、ここぞという場面で決めたのだ。

でも、そんなルーファスは長続きしなかったりする。

空から空色の物体が飛来してくる。

元の大きさに戻ったローゼンクロイツだ。

ガッン！

落ちてきたローゼンクロイツがルーファスにナイス跳び蹴り！

倒れたルーファス。

そして、覆い被さったローゼンクロイツ。

一瞬して辺りの空気が凍り付いた。

接吻！

見事なまでに決まった男同士のキッス！

慌ててルーファスは気絶しているローゼンクロイツを退かして立ち上がった。

「事故だよ事故に決まってるじゃないか、みんなだっけ見てたでしょ！」

「ルーちゃんの変態！」

ビビのビンタがルーファスを打ちのめした。

そして、セツもショックを受けていた。

「ルーファス様との婚約が破棄……」

其二、婚約者が新たに他の者と接吻した場合は無効とする。ルーファスは女の子としないとイケナイと思っていたが、どうやら同性でもよかつたらしい。

ローゼンクロイツの発作も治まり、鬼女の姿もいつの間にか消えていた。

これで一件落着　　というわけにはいかなかった。

「ルーファス様、もう一度わたくしと接吻を！」

「えっ……もう婚約なんてこりこりだよ！」

逃げるルーファス。

追うセツ。

結局、なにも解決していなかった。

第一五話 白い月が微笑むとき

《一》

自宅地下の実験室。

今までにない手ごたえを感じるルーファス。

魔法陣が淡く輝く。

そして、ルーファスは最後の一言を声高らかに叫ぶ。

「出でよ、インぶはっ!？」

いきなり、魔法陣から飛び出した影に膝蹴りを喰らい、ルーファスは鼻血ブーしながら転倒した。

明らかな召喚ミス。

ルーファスが最後まで言葉を言えなかったことから、無理矢理召喚に乱入してきたことが伺える。

召喚されたのは燕尾服を着たスマートな男が立っている。実にこの男はナゾに包まれている。どこがナゾかって、首から上が黒子の頭巾だからだ。

黒子は腕にはめたパペット人形をルーファスの眼前に突きつけた。

「オイ、ソナトコニ突ツ立ツテタラ、危ネエーダロ！」
腹話術だった。

「ご、ごめんなさい」

蹴られたルーファスが謝ってる構図。

黒子は自分の首を動かさず、パペットで辺りを見回した。

「此処八何処ダ。教ヤガレ、スットコドッコイ！」

「え〜つと、国から言ったほうが宜しいんでしようか？（こ、この人形怖いよお）」

「才前人間ダロ、ダツタラ此処ハのーすダロ。のーすノ何処ダ、スットコドッコイ！」

ノースとは人間界のことを示す言葉であるが、人間たちは自分たちの世界をガイアと呼ぶのが一般的であり、ノースと呼ぶのは別世界の住人である。

「アステア王国の王都アステアですが……ちなみにここは私の家の地下室です」

パペットは手を広げて驚いたりアクションをした。ちなみに黒子はまったく無反応で、見える透明人間に徹している。

「オオ、ヤツパあすてあ王国ナノカ！ オイ、ウチノ小娘ヲ見ナカッタカ？」

「小娘つてどのような感じの？」

「世界デ一番ぷりていな小娘ダ。名前ハゆーり・しゃるる・どろ・おーでんぶるぐツテンダ」

「それなら知ってますけど」

知ってるもなにも、ユーリもルーファスが召喚したのだ。

「オイ、サツサト吐ケ。知ツテルンダロ、サツサト言ワネエート、ヌッコロスゾ！」

黒子は持っているパペット人形を、ルーファスの顔面にグリ

グリしていた。

「何デ、言ワネエーンダヨ。隠スト、ヌッコロスゾ！」

「そ、それはあなたが僕の顔をグリグリするから……（窒息し
そうだったし）」

苦しそうなルーファスは、謎の黒子に追い詰められている。

「ウツセンダヨ、ノロマ！ モウイイ、俺様が自分デ探ス！」

そう言つて、パベットと黒子は嵐のように姿を消した。

「……なに今の人？」

今日は休日で、ルーファスは朝から召喚術の特訓中だった。

そして、呼びだしてしまつたのが今のパベットと黒子。

とりあえず召喚は大失敗だ。

気を落としながらルーファスは地下室を上がつた。

ピンポン

玄関のチャイムが鳴つた。

「ルーちゃんあゝそぼ」

「ルーファス様、遊びに参りました！」

不機嫌そうに顔を見合わせるビビとセツ。二人はルーファス
宅の玄関前で鉢合わせしてしまつたのだ。

覗き窓からその様子を見たルーファスは、居留守を使うこと
にして回れ右。

そこに立ちはだかる姉の姿。

「未来の妹を邪険に扱うんじゃないよルーファス」

そう言つてリファリスは玄関を開けた。その顔はなぜかニヤ
けている。

玄関を開けると、何食わぬ顔でセツはビビを押しつけて一歩前へ。

「ごきげんようお姉様。頼まれていた焼酎をお持ちしました」
「よく来たねセツつん、おみやげまで持って来てもらっちゃって、悪いねえ〜。これをみやげにダチとやってくるのでしょうかね」

むふふ。と笑いながらリファリスは酒を受け取ると、さっさと家を飛び出してしまった。見事なまでに酒で買収されている。軽くシカトを食らったビビはちよつぴりシヨック。

「さ、先に遊びに来たのはあたしなんだから！」

「玄関を先にくぐったのはわたくしです」
セツがビビに向けた視線から火花が散る。

このままでは危険と判断したルーファスが間に入る。

「まあまあ二人とも、お茶でも用意するから、奥の部屋で大人しく待っててよ（なんでこの二人、こんな仲悪いんだろ）」

「お茶菓子のおまんじゅうを持って参りました」

と、饅頭を取り出したセツを見て焦るビビ。

「ちょ、ちよつとそこまでケーキ買ってくるね！！」

今からかッ！

「べつにおまんじゅうだけでいいよ」

何気ないルーファスの一言。

グサツとビビが致命傷を負ってうずくまった。

勝ち誇った顔でセツが冷笑を浮かべビビを見下す。
ルーファスはどうしたのかと慌てる。

「ビビ大丈夫？ 具合でも悪い？」

「だ、だいじよぶ……こんなことじゃへこたれないもん」

ビビのことを心配するルーファスは、セツに取って都合が悪い。

「ルーファス様、本人が大丈夫だと言っているのですから、放っておいて、ささっ、行きましょう」

セツはルーファスの腕にガシツと腕組みをして、無理矢理奥の部屋に連れて行ってしまった。

残されたビビは、廊下の冷たい風に当たりながら、その場からしばらく動けなかった。

リビングでお茶でも出す予定が、気づけばセツはルーファスの部屋まで乗り込んでいた。

「ここがルーファス様の部屋なのですね。父上以外の殿方の部屋に入るのは、これが初めてです」

言葉にプレッシャーが含まれている。

「そ、そうなんだ……（殺気にも似た雰囲気か漂ってるのは僕の気のせい？）」

おそらく気のせいではないだろう。

今、この部屋には狩りをする動物がいる。

セツは素早い動きでドアを閉め、カギを閉め、密室空間を作りあげた。

「殿方の部屋で二人つきり……こんなこと、初めての経験です」

「そ、そうなんだ……（なんかキラキラした腫で僕のこと見てるよお）」

セツはルーファスの腕に両手でしがみつinaながら、上目遣いでルーファスに熱視線を送っている。

「（さあルーファス様、いつでもいらっしゃってください。ガバツと、ガバツと！）」

「（胸が腕に当たってるんですけど）」

ツーツとルーファスの鼻から血が出た。免疫力のないルーファスには、これ以上の攻撃は生死に関わってくる。

瞳を閉じたセツは顎を出して唇を少し上向きにした。

まるで瑞々しい果物のようだ。

唇が食べて食べてと誘っている。

ぷしゅっつと空気が抜けるような音がしたような気がした。

次の瞬間、ルーファスが気を失った。

そして、ドアを蹴破つて乗り込んできたビビ！

「不純異性交遊禁止！！」

鉄拳制裁を放とうとビビがセツに飛び掛かる。

だが、倒れたルーファスを起こそうとセツがしゃがんだため、見事にビビはセツの真上をダイビング。そのまま腐海の森に激突。

ちなみに腐海の森とは、あまりにも散らかった部屋を指す揶揄である。

大きな物音で意識を取り戻したルーファスは、ガラクタの山に埋もれているビビを見た。

「なにやってるのビビ？ 散らかしたら片付けておいてね」
ビビシヨック！

「このまま山に埋もれて朽ち果てよ……もう疲れたよパト
ツシユ）」

ビビ ここに眠る。

されはさておき、邪魔が入って水を差されたので、気を取り直してセツは部屋を物色。

「ルーファス様！ まさかこれは!？」

驚きを隠せないセツ。

「えっ、なに？（変な物とか別がないハズだけど）」

「メイドインワコクのパソコン！ さすがルーファス様です
わ」

「う……うん（だから?）」

「家電と言えばワコク、ワコクと言えば家電。科学水準トップ
クラスの我が国のパソコンを使っていただけ、ありがとうござ
います（しかも運命的なことに……これは黙っておきましょう
う）」

「どんな秘密があるのだろうか？」

いつの間にかセツはルーファスと至近距離にいた。運命の名
の下に熱い視線を送ってる感じた。

そこにビビが割って入った。セツを押し飛ばして。

「そう言えば！ なんでセツがここにいるの?」

「それはここが将来的にわたくしとルーファス様の愛の巣にな

るからに、決まっているからですわ」

「はいはい……そーじゃなくなって、きのうの事件で連行されたんじゃなかったの？」

きのうの事件とは、ルーファスとセツの追いかけてこである。町中で甚大な被害で出たので、セツは治安官に連行されて行ったのだ。

「幸い怪我人が名乗りでなかったので、賠償金だけで話をつけました」

言い回しが少し引つかかる。

なんらかの力が働いたっぽい。

そーゆー力に自分の素性のこともあつて気になるビビ。

「セツって何者なの？」

「今はただの学生ですけど、将来的にはルーファス様の妻となる身です」

そーゆー言い方ならビビもただの学生ではある。

ルーファスも学生で、今日は休日のガイアなので学校は休み。

だが、セツは？

ルーファスが尋ねる。

「学生なら学校があるはずだよ、いつまでいるの？」

「卒業試験に向けて研究発表をしなくてはいけないのですが、それに必要な物を探しに来たのです」

「卒業して何年生？」&「なに探しに来たの？」

同時にルーファスとビビが声を発した。

「中学三年生です」

ルーファスの質問に答えてビビのことはシカト。

首を傾げるルーファス。

「中学ってなに？」

ルーファスは魔導幼稚園、魔導学園、魔導学院と進学した。

「わたくしの国では満六歳から満一二歳までが小学校に通います。その後、中学校に三年間、計九年間が義務教育になります。さらに高校に進学すると三年間の修業期間があります」

魔導学院は満一三歳から満一八歳が基本的に通っている。

ビビが鼻で笑った。

「な〜んだ、あたしよりも一学年下ってことじゃん！」

少し何かを考えるように黙り込んだセツは、しばらくしてお返しとばかりに鼻で笑った。

「この国のことは渡航前に調べましたが、年度のはじめは九月だそうですね。わたくしの国では四月からなので、わたくしがクラス魔導学院に通っていたとしたら、同学年になりますか？」

「え？」

きよとんとビビはした。

ややこしい計算だが、セツの言っていることは正しい。

「わたくしの誕生日は聖歴九八二年七月二日です。この国では九八一年九月一日から、九八二年八月二七日生まれまでが同学年になります。この点でもわたくしとルーファス様は運命の糸で結ばれていると言えますね、うふ」

ここでルーファスは難しい顔をして考え込んだ。

そして、恐怖するのだ。

「まさか僕の誕生日とか知ってるの!？」

「未来の夫ですもの。九八一年九月四日、現アステア国防大臣のルーベル・アルハザードとガイア聖教のシスター・ディーナとの間に生まれる。ケルトン魔導幼稚園卒、アルカナ魔導学園卒、現在はクラウス魔導学院の四年生ですよね?」

「あつてるけど（個人情報漏洩してる……怖い）どうやって調べたの?」

セツ恐るべし。

「インターネットで調べました。ルーファス様のパソコンと同じメーカーのパソコンで!」

ちよくちよくルーファスとの繋がりを挟んでくる。

「ビビちゃんはなんだかつまらなそうな顔をしている。」

「パソコンの話なんてどーでもいいよあ。それよりルーちゃんのだ乾いたあ」

それを聞き捨てならないセツ。

「どうでもよくありません。このパソコンはメイドインワコク。ワコクと言えば科学大国。科学はこの世界を支える二つの支柱の一つなのですよ!」

「科学つてよくわかんなく。ねえルーちゃん?」

顔を向けられルーファスキよどる。

「えっ、科学だよね科学、科学はすごいよ、うん（魔導の勉強しかしてこなかったからなあ）」

三大魔導大国に数えられるアステア。世界的に見ても、魔導

は支柱であり、生活であり、根源であり、この世界その物とも云える。それに比べると科学はこの世界では……。

セツが熱く語り出す。

「古くからある国では、魔導は全ての根源でしようけれど、我々の国では魔導は科学の一分野に過ぎません。科学によって魔導は最大限に生かされ、効率的に使うことができます。ここにあるパソコンは、動力や基本概念こそ魔導によるものですが、ほとんどは科学によって構築させているものです。科学とは人類の知恵と知識の結晶なのです」

ルーファスもビビもぽけえとした顔で、セツの話をぜんぜん理解してないっぽい。

なのでビビは話を変えることにした。

「ねえねえ、さつきも聞いたけどセツってなにか探しに来たんだよね？」

「……………」

セツは笑顔で無言。華麗なるシカトだった。びみよーな空気が流れて焦るルーファス。

「そ、そういえば、セツってなにか探しに来たって行ってたよね？」

「はい、良質なホワイトムーンを探しに来ました」

ルーファスの質問にはちゃんと答えるセツ。ルーファス的には場を取り持ったつもりだったが、まったくの逆効果。ビビちゃん頬を膨らませて不満顔。

ホワイトムーンとは、アステアのグラシーシュ山脈のみで採取

できる希少な鉱物である。魔力を帯びているため、利用価値は高く幅広い分野で使われるが、希少なために輸出には制限があり、アステア国内であっても取引は困難である。

このような魔力を帯びた希少物質は世界各地にある。大きな魔力は自然に影響を及ぼし、その土地々に多彩な気候や特産をもたらす。極端な例を挙げると、砂漠のご真ん中にある氷の湖などがある。

「ねえねえ、だったら今から探しに行こうよ！　せつかくの休日だし、お店もいっぱい出てるよ」

ビビがはしゃいでお出かけを提案するが、もちろんセツはシカト。

すぐにルーファスが取り持つ。

「せ、せつかくの休日だし、ホワイトムーンを探すの手伝うよ！」

「まあルーファス様が手伝ってくださるなんて！」

この態度の差。ビビちゃんちょく不満顔。

セツがルーファスの腕を引っ張る。

「ではさっそく参りましょう！（でも、ホワイトムーンが見つかってしまったら、国に帰らなくてはいけなくなってしまう。だからと言って、いつまでもここにいるわけにもいかず）」

ルーファスと離れたくはないが、そうとばかりも言ってははいられない。

一方のビビは、

「（つまんない。この子がいると、なんかつまんない。早く帰

つてくれないかなあ」

そしてルーファスは、

「(せっつかくの僕の休日が……休みの日くらい引きこもりたいのに)」

思惑が交差する中、三人はホワイトムーンを探しに出掛けたのだった。

《二》

ホワイトムーンの利用価値は高い。なので多種多様な店で取り扱ってはいるが、希少なために取り扱っている店は少ない。

ルーファスも顔が広いわけではないので、とりあえずやって来たのはマジックポーションショップ。

「いらつちやいませ」

童顔巨乳の三角帽子を被った魔女マリアが出迎えてくれた。

「マリアさんこんにちは」

軽く挨拶してルーファスはカウンターの前に立った。

「今日はルーファスさんのために特別な胃薬も用意してますよ
お」

「あの、えっと、じゃあその胃薬をもらおうかな」

それを買うに来たんじゃないだろルーファス。押しに弱くて無駄な買い物をしちゃうタイプだ。

セツが前に出た。

「胃薬のほかに、ホワイトムーンは取り扱っていないでしょうか？」

「こちらはどなたですかあ？」

「ルーファス様の妻になるセツと申します」

「プフオツ、つ、妻っ!? (世界の破滅!)」

衝撃を受けるマリア。

そこにビビが割つてはいる。

「全部妄想だから！」

ビビのどアツプを前にマリアが後退る。

「あつ、えつと、こちらはどなたですかあ？ (これって三角関係!?)」

「あたしの名前はシエリル・ベル・バラド・アズラエル、愛称はビビ、よろしくね ルーちゃんとはマブダチだよっ！ この女はただのストーカー女だから！」

ピキッ。

なにかがキレる音がした。

「だれがストーカーですか、だれが？ ちょっと外に出なさい！」

「あたしとヤル気？ 人間の分際で悪魔のあたしとマジでヤル気なの？」

「まるで人間が悪魔よりも下等でも言いたいようですね」

「力も魔力も、知識だって、あたしたち歴史に比べたら、人間なんて笑っちゃうもん」

鼻で笑ったビビは、チラッとルーファスを横目で見た。

うつむいているルーファス。どこか哀しげだ。

ビビは自分がどんな発言をしたのか、それを思い返してハツとした。

「違うの、そんなつもりじゃ……ルーちゃん」

種族格差。

アステア王国は異種族に対して寛容である。表向きは。

人間と異種族の抗争は今でも各地で起きている。その歴史は根深いものであり、敵であり、奴隷であり、家畜であり、世界中を巻き込む大戦も数多く繰り広げられてきた。現在は人間と魔族は均衡を保って、大きな衝突こそないものの、それでも別意識は社会に根強くあるのだ。

「ルーファス様、これが悪魔の本性です。人間と悪魔は相容れない存在なのです」

冷たくセツは言い放った。

大粒の涙を瞳に浮かべるビビ。

「……セツのばかあ！」

涙をこぼしながらビビは店を飛び出して行ってしまった。

すぐに追おうとするルーファスの腕をセツがつかむ。

「さあルーファス様、デートの続きいたしましょう」

満面の笑みのセツは、力を込めた手を離さない。

絶対にルーファスを逃がさない。

絶対に逃がさないというのが、セツの瞳の奥からひしひしと感じられる。

困った顔をするルーファス。

強引に引き止められて、それを振り切るようなことができるルーファスではない。

だからルーファスは……はあ。

目の前の男女関係など気にせず、マリアは自分の仕事をしている。

カウンターの上に並べられるホワイトムーン。

研磨されていないため、形は石ころにすぎないが、輝きは陽光を浴びて白銀の雪。

「うちにあるのはこれだけです」

マリアが並べた数は三つだけ。大きさはどれも拳よりも小さい。

セツが一番大きな物に手を伸ばす。

「手に取って見てもよろしいですか？」

「どうぞお」

魔力を帯びた物は、魔導に通じる者であれば、その魔力を計ることができる。

ホワイトムーンの原石を握り締めたセツ。

「もつと良質な物はないでしょうか？」

「うちは魔法薬屋だから、これ以上の物はないんです」

「そうですか。ありがとうございます。ルーファス様、ほかの店を当たりましたよ」

セツが背を向けて歩き出そうとすると、マリアが慌てて手を伸ばした。

「お客ちゃま！ お時間とお金を頂ければ、裏ルートからご希

望に添える品をお取り寄せしまおう！」

言葉を受けたセツはそのままルーファスに顔を向けた。

「だそうですけど？」

「いいんじゃないの？」

「Sランクの物が欲しいのですが、どのくらいで手に入ります？」

セツは再びマリアに顔を向けた。

「Sランク!?（さすがにそれは……この子、金持ってるの？それとも世間知らず？）予算はいかほどですかあ？」

尋ねてきたマリアにセツは耳打ちした。

輝くマリアの瞳。

「四ヶ月もあれば用意できますう！」

「うーん、それでは年が明けてしまえます」

「だったら三ヶ月で！」

「またの機会に」

「二ヶ月で！」

「それではごきげんよう。行きましょう、ルーファス様」

セツはルーファスを連れて店を出て行った。

店に舌打ちが響く。

「ちっ……逃げがした魚は大きい」

店を出てすぐにセツが尋ねる。

「ほかによいお店を知りませんか？」

「うーん……ジュエリーショップはよく知らないし」

「見た目ではなく、中身が重要ですから、特別な宝石店でないと見つからないかもしれません」

「学院に行けばいい情報があるかもしれないけど、休日だしなあ」

「ドラゴンファンングという鍛冶屋があると聞いたのですか？」

「ああ！ 王都で有名な鍛冶屋さんだから、ホワイトムーンもあるかもね。でも材料を分けてくつらるかなあ、店主が頑固オヤジつてウワサがあるよ？」

とりあえず二人はドラゴンファンングに向かうことにした。

王都の繁華街である中央広場。そこに近い良好な立地条件の場所に店を構えているドラゴンファンング。この辺りは老舗が多く、独自のプライドを持った店も多い。

店に入ると煙草の匂いがした。

骨太の女が店の奥でふんぞり返っている。

「あんたら客かい？ 冷やかしなら帰んな、しょんべん臭いガキの来るとこじゃないよ」

あまり歓迎されていない。

それでもセツは物怖じせず女の前に立った。

「良質なホワイトムーンがあれば、少し分けて欲しいのですが？」

「ウチは鍛冶屋だよ。原料ならほかの店を当んな」

「そこをどうにかありませんか？」

「大事な原料をどこのだれとも知れないやつに売ると思うのか

い？ それに残念だけど、良質なホワイトムーンはウチにはないよ」

「そうですか、ありがとうございます」

頭を下げて立ち去るうとするセツの背に女が声をかける。

「待ちな。ひとつ教えといてやるよ」

「なんででしょうか？」

「ここ最近、王都の市場には良質なもんは出回ってないよ。あるならウチが買ってるよ……」
「たたく（鍛冶勝負まで時間がないつてのに）」

女に頭を下げてセツとルーファスを店の出口に向かって歩き出した。

セツがそつとルーファスに耳打ちをする。

「あの方は奥さんでしょうか？ 良い方でしたね」

「私はちょっと怖かったけど（女の人ってみんな怖い）」

二人が出口を出ようとしたとき、店にだれかが飛び込んできた。

「ただいま！」

店に入ってきた女の子とルーファスが目を合わせる。

「あつ、ローゼン様の背景のルーファスさん」

ローゼンクロイツ信者のアインだ。

「背景って……（ただいまって言ったよね？）」

ここはアインの実家なのだ。

そして、店の奥にいる女はアインの母親だったりする。見た目は二〇代後半だが、二児の母だ。

「なんだいアインの知り合いだったのか」

「はい、こちらはクラウス魔導学院の先輩です」

と、アインが紹介した。

アインの母　アルマが考え込んでうなる。

「娘が世話になってるのなら、ホワイトムーンを分けてやりたいところだけど……」

すぐにセツが食い付く。

「ぜひ！」

「さつきも言ったる、ウチにはないって」

そこにスーッとアインが割り込んできた。

「あのお、なんの話をしてるんですか？」

「良質のホワイトムーンを探してるんだ」

と、ルーファスが答えた。

アインは困った表情をした。

「もうすぐ鍛冶対決があるんですけど、それに使おうと思ってる良質なホワイトムーンがなくて困ってるんですよ。だからお父さんってば、自分で採りに行くとか言っただけでグラシュー山脈に……」

ホワイトムーンは希少であり、貴重である。採取には危険を伴い、命を落とすこともある。

セツは難しい顔をしている。

「わたくしも自力で採取するしか……」

それを聞いたルーファスは正直思ってしまった。

「(さすがにそこまで付き合えない)」

ルーファスにとってグラージュ山脈は思い出の地だ。悪い意味で。

ヌツとアインがルーファスとセツの間に入った。

「自力で採りに行く気満々のところ悪いんですけど、良質なホワイトムーンを使ったペンダントがレースの商品になってましたよ。ウチで使うには少なすぎるんですけど、本当にいい石でした」

「どこでどんなレースですか!？」

セツの食いつきがいい。

「中央広場のほうでやってるみたいです。内容はよく見てこなかったの(配達途中だったから)」

それだけ聞くとセツはルーファスの腕を引っ張った、

「行きましよう、ルーファス様! 早くしないとレースに出場できません!!」

出場する気満々だった。

もちろんルーファスはしない気満々。

店を出てすぐにルーファスは立ち止まった。

「あっ!？」

「どうかなさいました?」

「ごめん、急用!」

「えっ、ルーファス様!？」

セツが止める間もなくルーファスが走り出す。
いったいルーファスは何を見たのか?

街中を走る黒い影。

ヒツジのパペットに引つ張られるように、黒子が全力疾走している。

ルーファスの召喚に乱入した謎の黒子。どうやらユーリを探しているらしいが、そもそも何者なのだろうか？

ルーファスの視界から黒子が消えた。

そして、ルーファスの体力が消えた。

「ううっ……（もう走れない）」

ちよつと走っただけでルーファスリタイア。

息絶え絶えになりながら、ルーファスが顔をあげると、ピンクのフリフリが近づいてきた。

「ルーちゃん！」

ビビがツインテールを揺らして駆け寄ってくる。

「やっぱり探しに来てくれたんだ！」

「えっ……いや……（そういうわけじゃないんだけど）」

でもハツキリ否定しないルーファス！

とりあえずビビは満面の笑顔だ。

「（セツもいなくなってくれたみたいだし）よぉ〜し、美味しいスイーツ食べに行こう。」

「はい？（なんでそうなるの？）」

「ルーちゃん覚えてる？」

「なにを？（心当たりがない）」

「こないだ約束破ったでしょ？」

「そんなことあったような、なかったような」

これはぜんぜん心当たりがないリアクションだ。

ビビがルーファスに腕組みした。

「とにかーく！ 今からメルティラブに行くんだからねっ！」

「ええーっ！」

「しゅっぱーっ！」

強引な展開になるとルーファスは弱い。

ビビに引きずられて馬車に乗り込み、揺られながらクラウス魔導学院方面に移動する。

クラウス魔導学院は一つの都市ほどの規模と生徒数を誇り、学院周辺には数多くのショップがひしめき合っている。

学生たちに人気のカフェ　メルティラブ。普段は生徒たちの溜まり場だが、今日は休日なので一般客の方が多いようだ。

席についたビビはさっそくスイーツを注文。しかも片っ端から。

「ここからっつ、ここまで。あとこれとこれとこれも食べたいなあ」

「ちよつと頼みすぎじゃあ」

「心配しないで、全部あたしが食べるから」

「そういう問題じゃないんだけど」

溜め息をつきながらルーファスは窓の外を見つめた。

セツを置いてきてしまつて、黒子は見失い、ビビとカフェ。

とりあえず、ここにセツが現れたら大波乱だね！

テーブルに並べられていくスイーツの山。

ルーファスの表情がどんどん不安げになっていく。

「あのさあ、私は人を追ってる最中でさ、こんなところでスイーツなんか食べてるヒマないんだけど（僕のサイフからお金が消えていく）」

「別にいいじゃん。こないだ約束破ったルーちゃんなんだよ、今日はルーちゃんのおごりでいっぱい食べるんだから！」

「はあ、ついてないなあ」

このごろ出費が多い。

というのも、ユーリを召喚してしまったので、その生活費やらなんやらを出してあげたりと。

ここでルーファスは気づく。

「（あの黒子からも生活費せびられたらどうしよう）」

儉約のためにルーファスはスイーツを食べたくても食べられない。

目の前では美味しそうに頬を膨らませるビビ。

見ていると辛いだけなので、ルーファスは窓の外に目を向けた。

街を行き交う人々。

そして、若者からんでいる黒頭巾の変態。

「……あーっ！（あの人だ、やっと見つけた!）」

大声をあげたルーファスは席を立った。

「どこ行くのルーちゃん？」

「ちよつと急用!」

「行っちゃダメだよ、約束破る気？（せっかくのデートなのに）」

「ごめん、サイフ置いていくから、じゃあね！」

ルーファスはサイフをテーブルに叩きつけて店を出て行ってしまった。

「もお、ルーちゃんったら！」

ビビはほっぺたを膨らませてケーキにフォークを突き刺した。
ヤケ食い開始！

《三》

息を切らせるルーファス。

結論から言うと黒子は見失ってしまった。

目立ちそうな黒子なのに、情報もブツリ途切れてしまった。
まさかこの“地上”にいないのか？

それはさておき、別の話がルーファスの耳に飛び込んできた。

空色ドレスの電波系魔導士が大暴れ。

どうやら現場はメルティラヴらしい。

ルーファスは急いでカフエに戻ることにした。

煙が立ち上がっているが見えてきた。

人だかりから逃げるように這い出してきたユーリの姿。

その姿を見てルーファスは目を丸くした。

「どうしたのユーリその格好!？」

上着を包帯のようにグルグル巻いた斬新なスタイル。

「ローゼンクロイツ様の愛の鞭に巻き込まれて、服がボロボロ

になつてしまつたんです」

「ということは、ユーリも現場に？」

「ビビやローゼンクロイツは？」

「辺りを見回すルーファスにユーリが気まずそうな顔を向けた。」

「ルーファス……」

「なに？」

「……服を買うお金を貸してください（金は貸しても借りるな
がオーデンプルグ家の家訓なのに！）」

「実は良家の出であるユーリ。人からお金を借りることはオー
デンプルグ家の者として恥だった。」

「ルーファスは首を傾げる。」

「はい？」

「アタシ、これしか服を持っていないんです（服がないと明日
から生活できない）」

「えっ？（……だから毎日同じ服を着てたのか）」

「そこに人混みから出てきたビビが割り込んできた。」

「あたしの貸してあげるよ……あつ、でもユーリちゃんのは
うがちよっぴり胸大きいかもあたしより」

「ビビは自分の薄っぺらな胸とユーリの胸（偽造）を見比べた。
慌ててユーリは取り直す。」

「だ、大丈夫ですよ、胸なんてどーでもなりますから（元か
らないもんね！）。ビビちゃんに服を貸してもらえるなんて光
栄です、返すときはリボンをつけて返しますね！」

「リボンはいらなないけど。返すのはいつでもいいよ」

「ありがとうございますっ……(ビビちゃんの服……鳴呼、幸せ)」

絶対にユーリは貸してもらった服の匂いを嗅ぐ！

断言できる！！

そして、ビビはじとじとした目で誰かさんに目をやった。

「ユーリちゃんもいるいる苦労してるんだね、誰かさんのせいで(ルーちゃんのばーか)」

「……そうですね、私が全部悪いんですよ。僕がユーリを召喚したんだもんね、そうそう僕が悪いんだよ……どーせ僕には魔導の才能なんてないし、召喚術なんてした僕が悪いんだよね」

いじけたルーファスはしゃがみこんで、地面にらくがきを描きはじめた。

ビビが呆れたようにため息を吐いた。

「ルーちゃんはなにも悪くないから平気だよ、元気だして」「嗚呼、生まれてきてごめんなさい。そんなこと言って生んでくれたお母さんごめんさい。もう僕なんか生きてる価値もないね……あは……あはは」

「ルーちゃんがあたしのこと召喚してくれたから、こうやって出逢えたんだよ。あたしはルーちゃんに逢えて本当に幸せなの……だから元気だして、ね？」

ルーファスを励ますビビの姿を見るユーリは不機嫌そうだ。「別に落ち込んでるヤツなんか励ます必要なんてないんです。この世は強い者だけが生き残るんですから(アタシのビビちゃ

ん激励されるなんて、人間の分際で」

吐き捨てたユーリ。

その前に真剣な顔をして怒っているビビが立った。

「ユーリちゃんなんか大ツ嫌い！」

バシーン！

強烈なビビのビンタがユーリの頬を叩いた。

頬を押さえて呆然とするユーリ。

「(なんで?)」

そして、走り去っていくビビの後ろ姿。

しばらくして、時間差攻撃でユーリはショック！

「ビビちゃんにフラれたあゝっ。服も貸してもらえなくい……

絶望だ」

ユーリは両手両膝を地面に付いた。

横ではルーファスもへこんでいる。

その後、ルーファスの記憶は少し飛んでしまった。

鼻血を出して気絶しているルーファスをセツが抱きかかえた。

「ルーファス様！ ルーファス様！」

「うう……ううっ（頭がクラクラする）」

「どうなされたのですかルーファス様！」

「あゝゝゝ、セツ？」

「そうです、あなた様の妻になるセツでございます！」

「それは違うから！」

ちゃんとツツコミはできた。

ちよつとまだクラクラとしているルーファスだが、ツツコミ
ができれば問題ないだろう。

「ルーファス様、どこの刺客にやられたのですか？」

「どこのつて（てゆか刺客つて）。記憶があんまりないんだけ
ど……とにかく大丈夫だから」

「嗚呼、ルーファス様に万が一のことがあったら。わたくしも
すぐに後を追う覚悟はできております」

「そんな重い覚悟しなくていいから（そんなプレッシャーかけ
られたら、それで死ぬし）」

セツの肩を借りてルーファスは立ち上がった。

ユーリの姿はない。

ビビもどこかに行ってしまった。

黒子はもう知らん。

で、なにしてたんだっけ？

「さつそくですがルーファス様」

「はい？」

「レースのエントリーしておきましたから」

「はい？」

「優勝賞品のペンダントが展示されていたのですが、あれこそ
わたくしの求める良質なホワイトムーンでした」

「はい」

そう言えばそんな話もあった。

ここでなぜか身悶えるセツ。

「あぁん！（けれど、ここでホワイトムーンが手には入ってし

まったら、わたくしは故郷に帰らねばならない。そうなればルーファス様と遠距離恋愛に、身が裂かれる想い！」

そもそも付き合ってません。

セツはテキパキと自分とルーファスにゼツケンをつけた。

「ペアルックですね！」

「こういうのはペアルックとは……」

「さあ、早くしないとレースがはじまってしまいます！」

「私はまだ出場するとは言っていないけど」

「でもルーファス様のお返事はわかっておりますから！」

プレツシャー。

ルーファスの周りには押しの強い友人知人が多いが、セツが現在ナンバーワンだろう。

そして、これまでナンバーワンに君臨していたのは。

レースのスタート地点につくと、見覚えのある魔女がルーファスに近づいてきた。

「いいところで会ったなルーファス」

カーシャは不敵な笑みを浮かべている。その横にはなぜかピ

ビが？

「は？」

きよとんとするルーファスにカーシャは勝手に話し出す。

「優勝賞品は妾の物。ルーファスの物は妾の物。わかっている

だろうな？」

「は？」

それ以上ルーファスは声が出なかった。思考停止。

ルーファスを押しのけてセツが前へ出た。

「カーシャさん！ なにをおっしゃているのですか、優勝賞品は勝者の物。つまりわたくしとルーファス様の物です。そして、あなた！」

セツはビシッとビビを指差して言葉を続ける。

「なぜここにいますか？！」

「え〜つと。カーシャさんに無理矢理。このレースってペアじゃないと出場できないからって」

そういうことらしい。

ズン！

つとカーシャがセツの前に立ちただかる。

「図々しいにもほどがあるぞ」

あんたの言うセリフか。

カーシャはさらに続ける。

「あのペンダントは妾の物なのだ。だれがなんと言おうと、それは変わることのない真理なのだ、アホめ」

今までならこんなカーシャに真っ正面から食ってかかる者はいなかった。

が。

「アホはあなたです。正々堂々とわたくしとルーファス様は、優勝して商品をいただきます」

気温が一度下がった。

「ふふつ、小娘。わかつておらんようだな、あのペンダントは妾の物だと言っておるう。だれが優勝しようが、あれは妾の物なのだ」

「お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの、みたいなガキ大将ですかあなたは」

「おまえもわからん奴だな。あれは昔からずっと妾の物なのだ、バカめ」

「今度はバカ呼ばわりですか？」

ヤバイ。

恐ろしい気配がバチバチと電気を帯びるように肌を刺す。

しかも、目にも見える形でマナフレアが発生している。

気づけばカーシャとセツを中心に逆ドーナッツ型に人々が遠ざかっている。

そして、輪の中心から逃げ遅れたルーファスとビビ。

このまま魔力の嵐に巻き込まれてしまふ。

ルーファスが申し訳なさそうに手を上げた。

「あのぉ、カーシャはどうしてあのペンダントが欲しいの??」

「欲しいのではない。あれは妾の物なのだ」

「そういう言い方をされるとそこで会話終了なんだけど。私た

ちは良質なホワイトムーンを探していて、あれがどうしても必用なんだよ」

「そういうことなら貸してやらんこともない」

この発言でセツの怒りは爆発寸前だ。しかし、ルーファスの前なので、抑えて抑えて顔の筋肉がブルブル震える。

「貸してやる……貸してやる……ですか? (あとで地獄見せたる、泣いたって叫んだってもう許るさんど!)」

「そうだ貸してやる。一日一〇〇〇ラウルでいいぞ」
セツの我慢も限界だ。

「おんど っ!？」

ゴリラ顔に変貌したセツが鉄扇を構えた瞬間、カーシャはしれつとルーファスの首根っこをつかんで盾にした。

きよとんとするルーファス。

引き攣った笑みのセツ。

バレてない！

どうやらルーファスはセツの本性には気づかなかつたらしい。完全にセツはカーシャに弱みを握られている。これではカーシャに勝つことができない。

カーシャは妖しく笑う。

「ふむ、一致団結して妾のために妾のペンダントを奪い返しに行くぞ！」

……しーん。

きよるきよると周りを見回したビビは、笑顔を潰つて拳を上げた。

「おーっ」

……しーん。

慌ててルーファスも拳をあげた。

「お、おーっ！」

……しーん。

三人を置いてスタスタと歩き出していたセツが振り返る。

「なにやってるんですか、あなたたちは。もうレースは開始し

てますよ」

……しーん。

気づけばスタート地点には四人しか残っていなかった。

レースに出場することになってしまったルーファス。

が、どんなレースなんだかさっぱりだった。

わかっていることは、優勝賞品がホワイトムーンのペンダント、二人一組のペア戦らしいこと。

セツは握っていた手のひらを広げ、そこに乗ったサイコロをルーファスに見せた。

「ルーファス様が振りますか？」

「はい？」

「レースはこのサイコロを振って進めていくそうです」

「ならばつに急がなくてもいいんだ」

人間すごろくということだろうか？

「いえ、急がなくては勝てません」

「はい？」

「すごろくに似ていますが、サイコロは競技者が順番に振るのではなく、止まったコマで出される問題や障害を乗り越えようと再び振ることができそうです。つまり早くクリアすればするほど、先に進めるそうです」

だったらこんなところでグズグズしてられない！

サイコロは八面体だ。八を出せば多く進める。だが、多く進めばいいというわけではないのが、すごろくだ。

セツは折りたたんでいた紙のマップを広げた。

「これがすごろくのマップです」

一コマ目、灼熱コース。

二コマ目、極寒コース。

三コマ目、クイズ。

四コマ目、ドクロマーク。

五コマ目、四コマ進む。

六コマ目、クイズ。

七コマ目、五コマ戻る。

八コマ目、海コース。

とりあえず一回目で行けるのはここまでだ。

気になるのは四コマ目のドクロマークだろう、なにかはわからないが、とりあえずそこには止まりたくない。

「ではルーファス様、四と七には止まらないようお願いいたします」

と、セツはルーファスにサイコロを託した。

「僕が振るの!？」

「やはりここはルーファス様が振るのがよいかと。妻は三歩下がって夫についていくものですから」

「夫でも妻でもないけど、がんばって振りたいと思います」

サイコロを握り締めるルーファスに緊張が走る。

握った拳が汗ばむ。

「ルーファス様、早くしてください。もうわたくしたちだけですよ？」

「え？」

周りを見回すと、スタート地点にはルーファスとセツだけが、突然スタート地点に人が降って湧いた。

赤と青の双子の魔導士。

赤髪のオル悔しそうに地面を蹴飛ばす。

「んだよスタートに戻るって！」

「自分でサイコロ振ったんだろ、今度はオレが振るぜ……って、へっばこ！」

青髪のロスがルーファスに気づいた。

そして、ユニゾン。

「こつてめえもこのレースに参加してやがったのかっ！」

なんだかよくわからないが、いつもこの二人に因縁をつけられるルーファス。

早く逃げようとしたルーファスは勢いでサイコロを振った。

「えいつ！」

四。

ええつと、四コマ目はたしか……ドクロマーク。

今日も期待を裏切りませんルーファスは。

愕然とするセツ。

「いったいこのマスに止まると……（まさかいきなりの失格？）」

それはすぐにやって来た。

ぎゅるるるるるる。

ルーファスの腹の虫が鳴いた。

「ううつ……いきなりお腹が痛く……」

「はっ!? まさかこのコマはステータス異常を起こすのでしょうか!?(しかし、わたくしには何の変化も)」

本当に何の変化も起きていないのか?

まさか、ルーファスのお腹が痛くなったのは偶然?

腹を押さえるルーファスが、苦しそうに顔を上げた瞬間、鼻水を飛ばしながら噴いた。

「ぶふおっ!」

「どうかないさいましたかルーファス様!」

「ぶぶつ……いや……なんでも……あははははは」

「今度は笑いが止まらないステータス異常ですか!」

「ぶぶつ……だいじょう……ぶっ!(顔が……セツの顔が……)」

真っ黄色になっていた。

ステータス異常はランダムらしい。

ルーファスは腹痛。

セツは顔が真っ黄色。

当の本人であるセツは自分の顔が見えないので、なにが起きているのか理解していない。

オル&ロスもセツの顔を見て、腹を抱えて笑った。

「ギャハハハハハ!」

突然、周りが笑い出してセツは何が何だかわからない。

「いったいどうしたというのですかっ!」

ちよつと怒ってるようだ。

でも原因はわかっていない。

ルーファスはセツの顔を見ないように、必死に笑いを堪えている。

「さ、先を……ぶっ……急ごう」

強引にコマを進めようとルーファスがサイコロを振った。

八！

もつとも多い数。コマは海コースとなっている。

ルーファスとセツの体がスタート地点から消えて転送される。果たして海コースでルーファスたちを待ち受けているものは!?

そして、優勝はだれの手にっ！

《四》

ザッバーン！

いきなりの着水。

魔導衣が海水を吸いこんで、いきなり溺れかかるルーファス。

「ぶへっ……うっぶ……死ぬ……」

必死に藻掻いてルーファスは海に浮かぶ人工の浮き島に這い上がった。

海藻まみれながらルーファスが顔を上げると、そこにはスリットから覗く生足が！

「そのまま覗いたら、わかってるなルーファス？」

カーシャが冷たい視線でルーファスを見下していた。

「わかつてます、絶対にパンツなんか見ません！」

「はつきり言うな、はつきり！」

カーシャキック！

ルーファスの顔面にカーシャの蹴りが入り、再びルーファスは海の藻屑に。

「ルーちゃんのことには忘れないから！　ぐすん」

大粒の涙を流してビビが迫真の演技。

そして、ビビは一瞬にしてケロツとした顔になった。

「カーシャさんどうするの？」

「浮きに立てられた旗の目印に従うなら、ここをまっすぐだが」

カーシャは何もない海を指差した。いや、よく見ると遠くに陸地っぽいものがある。そこまでの間は海があるだけ。

真剣な目をして海を眺めるカーシャが、いきなり噴いた。

「ぶふおっ！」

遅れて海を上がってきたセツを見て。

「酷い目に遭ってしまいました。海水を吸ってしまって、これでは機動力に問題が……あっ、あなたたち」

顔を向けられたカーシャとビビは瞬時に目を反らせた。

瞳は静かなのに、口元が引き攣るカーシャ。

「(ぶふふ……)……(じつ自分で気づいてないのか?)」

ビビは腹痛を起こしたように腹を押さえてうずくまった。

「(なんで顔黄色いの!?) (あはっ) (だめっ、笑っちゃう) (ぶ

っ

周りの変な空気を察してセツは不機嫌そうな顔をした。

「どうしたのですか、お二人とも？」

カーシヤは真顔だが口元を引き攣らせながら、ビシツと手のひらをセツに向けた。

「いや、なんでもない！（ぷっ）」

それにビビも続く。

「あはは……なんでも……なはっ……ないから！（ウケる！）」

海に蹴落とされたルーファスも再び浮き島に戻ってきた。

セツがルーファスに駆け寄る。

「大丈夫ですかルーファス様！」

「だ、だいじょうぶですよセツさん」

平静を装い何故か敬語のルーファス。もちろん顔は伏せてセツは見ない。

が、見てはイケナイもの系のモノは、見たくなってしまうのが心情。

ルーファスはチラツとセツを見た。

「ぶはははははっ！」

抱腹絶倒。

ルーファスは膝から崩れ落ち、床を叩いて涙を流した。

黄色かったセツの顔が、まだら模様になっていた。

どうやら水性だったらしい。

ビビは持っていたハンカチを顔を見ずにセツに差し出す。

「どんまい」

「はい？ なんですかこのハンカチは？」

「気にしないで受け取って、ぷっ」

女の友情さ！

カーシヤは何事もないように、セツの存在はなかったことにしようだ。

「さて、では先に進むとしよう」

絶対にセツのほうをチラリとも見ない。

そして、カーシヤは構えた。

辺りの気温が下がり、カーシヤの周りにマナフレアが浮かんだ。

ルーファスがいち早く危険を感知した。

「伏せて！」

だが、ビビとセツは反応できなかった。

「メギ・フリーズ！」

カーシヤが海に指先を浸けた瞬間、そこは氷河時代になった。瞬く間に凍り付く海。

波がその形を残したまま、飛び跳ねた魚が氷の彫刻と化し、浮き島からその先に見える目的地まで、約五〇〇メートルの歩道ができた。

セツはカーシヤの実力を目の当たりにして感嘆を漏らさずにはいられない。

「すごい……これが魔導の最高峰、クラウス魔導学院の教師の実力」

「妾はその中でもさらに特別……ぷっ」

一瞬、カーシャはセツの顔を見てしまつて、すぐに顔を氷の道に戻した。

「行くぞ！」

何事もなかったようにカーシャは優雅足取りで氷の道を歩き出す。

すぐにビビが着いていく。

「カーシャさんつてやつぱすご〜い」

「当たり前だ（まあ、実際はこの空間が魔導でつくられた人工空間ということもあつて、普段よりも魔力を集めやすいというものもあるがな。そのことはこいつらには教えてやらんが）」

先に進むカーシャたちに遅れて、セツもルーファスを引っ張つて進もうとする。

「わたくしたちも参りましょう！」

「……う、うん」

ルーファスはセツの顔を見ない。

「（ルーファス様が冷たい。先ほどからわたくしの顔をまったく見てくれない。まさかルーファス様……）浮気ですか！」

「は？」

よくわからないが飛躍しすぎだ。

「わたくし以外の女に目移りしているのですね、そうなのですね！」

「はあ？」

「でもいいのです。たとえそうだとしても、そんなことではく

じけたりしませんから」

「はぁ（独りで妄想して突っ走りし過ぎだよ）」

「さあ、このバージンロードを進めば、その先に待っているのは結婚！」

「はぁ!？」

話についていけないルーファスをセツが強引に引っ張って走り出す！

力強く地面を蹴るセツ。

ピキッ。

バキッ！

なにか不穏な音が聞こえた。

ルーファスが振り返る。

「ぎゃーっ、氷が割れてる！」

氷が割れて後ろから海が迫ってくる。

立ち止まったカーシャ。その横をセツに引っ張られながらルーファスが通り過ぎる。

ビビがカーシャの腕をつかんだ。

「早く逃げないと！」

「マギ・エアブツレシャー！」

カーシャが圧縮した空気をルーファスの背中に放った。

「ぎゃああああ！」

ぶっ飛ぶルーファス。

セツは慌ててルーファスにしがみついた。

「嗚呼、ルーファス様（しあわせ）」

空かさずカーシャはさらに魔法を放つ。

「エナジーチェーン！」

手から放たれた鎖がルーファスの足に絡みついた。

カーシャの足下が海に沈む。

同時にカーシャは宙に浮いていた。

ルーファスをハンマー投げにして目的地まで引つ張らせよう

としたのだ。

慌ててビビはカーシャに抱きついた。

「ううっ（おっばいデカイ）」

ビビ涙目。

放物線を描いていたルーファスは浮き島に落下。

「ぐへっ！」

この場合、海に落下したほうがマシだった。

そして、ルーファスの上に腰掛けるセツ。

「ルーファス様、身をていしてわたくしを庇ってくれたのですね」

本人がそう思ってるなら、それでいいと思います！

負傷したルーファス放置で、カーシャ&ビビペアはサイコロを振って先に進んでしまった。

「ルーファス様、わたくしたちも急ぎましょう！（優勝して賞品さえ手に入れてしまえば、カーシャになにを言われようと、渡さなければいい話）」

セツがサイコロを振る。

八！

コマを進めたルーファスとセツ。

マップを確認すると、そこはクイズのマスになっていた。

気づけば解答席に立たされ、手元には押しボタン。そして、頭には謎のシルクハットが被されていた。

ボタンがあれば押したくなる！

ルーファスは取りあえずボタンを押した。

ポン

シルクハットからパーの形をした札が飛び出した。回答者を現す拳手マークだろう。

ブブブーッ！

明らかな不正解の音。

どこからともなく声が聞こえてくる。

《不正解です。原点ーマス》

いきなりの原点！

慌てるルーファス。

「間違い、今の間違いだから！ それにクイズはまだはじまつてないし！」

《それではルールを説明します》

ルーファスを無視して天の声がルール説明を続ける。

《これから三問が出題されます。一問正解することに、次に振るダイスにーマスプラスされます。逆に不正解をしてしまうと、ーマスマイナスになります。それでは第一問！》

「ちよっ！」

ルーファスが口を挟むがクイズは止まらない。

《一＋一＝》

ポン！

ルーファスがボタンを押した。

「二！」

《 》 ですが、アステア王国の現国王の名前をフルネームで答えなさい》

ルーファスが身乗り出す！

「引っかけ!? しかも、前振りぜんぜん関係ないって！」

ブブブーッ！

《不正解です。原点一マス。計二マス原点です》

一問目にして二点マイナス。残るは二問。

セツは冷静な顔をしている。

「ルーファス様、落ち着いてください。二問正解すれば差し引きゼロです」

天の声はクイズを続ける。

《第二問！ 一＋一＝二ですが、トピリアーノ国立美術館にこの秋やってくる『素つ転んだ貴婦人』の作者は？》

ポン！

思わずルーファスはボタンを押してしまった。

「知るか！ なにその変な題名、間違つてボタン押しちゃったじゃないか！」

ピンポーン！

《正解です。加点一マス。計一マス原点です》

まさかの正解。

きよとんとするルーファス。

「どうして正解？」

「あの有名な絵画『素つ転んだ貴婦人』の作者はシルカです。さすがルーファス様！」

「あ…… ああ（なんかバカにされてる気がする）」

そして、ついに最終問題！

《第三問！ 一＋一＝二ですが》

そーですね！

《秋の大還元祭実施中のトリプルスターの提供でお送りします》

コマーシャル！?

《トリプルスターのトップダンサーの名前は アイーシャで

すが、彼女の好物と言えば？》

カチ、カチ、カチ、カチ…… 時計の刻む音がする。

セツがルーファスを顔を見つめる。

「わかりますかルーファス様？」

「あんなお店行ったことないしわからないよ」

「あんなとは？」

「過激な衣装を着た女の人たちのダンスを見ながらお酒を飲む

お店とか聞いたけど」

「まあルーファス様、ふしだらですわ」

「だから行ったことないから！」

カチ、カチ、カチ……。

二人が話している間にも時間が過ぎる。

《あと一〇秒で爆発します》

天の声を聞き流したルーファスとセツ。

《あと五秒で爆発します》

天の声をわざと聞き流したルーファスとセツ。

《三、二、一　うっそでーす》

「ウソかよっ！」

思わずルーファスがツツコミを入れた。

《ウソです。制限時間はありませんし、そんなルールはありませんが、ヒマだったので》

ルーファスが尋ねる。

「もしかして、天の声さんって中の人がいるの？」

《はい、日当二〇〇〇ラウルのバイトです》

王都アステアの物価では、二〇〇〇ラウルあればうめえ棒が一〇〇〇本買える。

ピンポンパンポーン

違う天の声が聞こえてきた。

《ゼツケン二六が一位通過しました》

……え？

一瞬の思考停止状態に陥ったセツはすぐに復帰。

「優勝を逃したらホワイトムーンが手に入らないではないですか！」

「まあ、そういうことになるよね。天の声さん、リタイアってできないの？」

《空間の構成上、基本的にリタイアはできません。ゴールしていただくか、ふりだしに戻っていただくか、レースの終了時間まで待つていただくか、とマニュアルには書いてあります》

この空間に新たな訪問者が現れた。
「終了など待つていられるか」

冷気をまとったカーシャ。傍らにいるビビは青い顔をして瀕死状態だ。

《新たな解答者がこの空間を訪れたので、追加ルールを説明します》

「ルールは壊すためにある（ふふっ、デストロイヤー）」

カーシャが構えた。周りに発生するマナフレア。

次になにが起こるのかは予想できる。

解答席にルーファスは身を隠した。

冷たい瞳。

「マギ・アイスニードル！」

鋭い氷柱が目に見えない壁に当たった。

空間に蜘蛛の巣のようなヒビが走る。

ガラスが木端微塵に吹き飛ぶように、世界が 魔法で構築

された空間が崩壊する。

原色が渦を巻く世界。

めまいがする。

アメーバのようなモノが七つの眼を光らせ、吸盤のような牙

を剥く。

ねじれた顔のカーシャが叫ぶ。

「
x x x x!」

聞こえるのは奇怪な音。
吸いこまれる。

スパゲティほどしかない穴に、ルーファスたちは吸いこまれた。

そして。
ドス!

地上に落下した四人。

サンドイッチ状に重なった一番下はもちろぬルーファス。一番上には堂々と立つカーシャの姿があった。

「……ううっ……重い」

「ふむ、どうにか亜空間から抜け出せな」

冷静なカーシャ。

立ち上がったセツは憤怒しながらカーシャに掴みかかった。

「あなた自分のやったことがわかっているのですか！ 一歩間違えたら死んでるところですよ！」

「死ぬくらいならいいがな、ふふっ」

妖しくカーシャは笑った。

で、ここはいつたいどこ？

大きめの表彰台の上。

ルーファスは赤と青の双子と目が合った。

「オマエら、優勝はオレたちだぞ！」

見事なユニゾン。

優勝？

ということとは、オル&ロスがレースの勝者ということか？
たしかゼツケン二六が一位だったはず。

セツが声を上げる。

「あの赤髪が持っているのは優勝賞品のペンダントです！」

ゼツケンの番号も二六だった。

そうとわかれば、カーシヤが動く。

「そのペンダントは妾の物だ、返してもらおうぞ」

オル&ロスが顔を見合わせる。

「あんなこと言ってるぜ、どうするロス？」

「これはオレたちのもんだぜ、正当防衛ってことでやっちなまお
うぜオル！」

オル&ロスは左右に分かれて、カーシヤに殴りかかってきた。
マナフレアがカーシヤの周りに集まる。

目を剥くオル&ロス。

「市街での攻撃魔法は原則禁止だろうがッ！」

「やっぱイカれてやがるぜこのセンコー！」

カーシヤが微笑む。

「手加減はしてやる、ウオータ！」

水の塊がオル&ロスを呑み込む。

呼吸が出来ない！

青い魔導士ロスが水を操る。

「ごぼっ（クソ）ごぼぼっ（ババア）！」

二人を呑み込んでいた水が渦を巻いて、へビのようになりカーシヤに襲い掛かった！

「フリーズ！」

水のへびは一瞬にして氷の彫刻に。

体を濡らしていたオル&ロスの体も表面が凍り付いてしまった。

赤い魔導士オルが魔力を溜める。

「よくもやりやがったな！」

蒸気が立ちこめる。

魔力を熱エネルギーに変換して、体表面の氷を溶かす。

「これでは前が見えんな、トルネード！」

カーシャは風を操り竜巻を発生させて蒸気を舞い上がらせた。舞い上がったのは蒸気だけではない。オル&ロスも天高く舞い上がった。

そして、空からルーファスの足下に何かが降ってきた。

それを拾い上げたルーファス。

「これって……」

セツが顔を寄せてきた。

「優勝賞品のペンダントです！ この騒ぎに乗じて持ち逃げし

てしまいましょう」

「そんなの泥棒じゃないか、ダメだよ」

「卒業試験が済んだら返しますので問題ありません。少し借りるだけですから」

「それでもダメな気がするんだけど……」

「ここでカーシャさんの手に渡っていいと思うのですか？ わたくしたちはこのペンダントを一時的に保護するのです」

「まあ、そう……なの？（カーシャが手に入れたら、妾の物は妾の物だし。僕たちが借りれば、ちゃんとオル&ロスに返してあげられるしなあ）」

「そうと決まれば退散です！」

「決まってはなから」

決まってもなくてモルーファスに主導権はない。

セツに引きずられて一目散にこの場をあとにしたルーファスだった。

良質なホワイトムーンを手に入れて、ニコニコ顔のセツ。お祝いと称してルーファスの家上がり込んでキッチンを占拠、料理の下ごしらえをしていた。

「嗚呼、これが新婚というものなのです（あゝん、なんて言っちゃって、もぐもぐ美味しいよセツ。でもセツのほうが美味しいけど、ガバツ、きゃあルーファス様……なんて）」

海コースでバージンロードも歩きましたからね。次は新婚生活になるのは当たり前。

美味しそうな匂いがリビングまで漂ってきた。

「僕も料理しないし、リファリス姉さんもダメだからなあ。料理とか久しぶりかもな」

なんだかルーファスもうれしそう。

そこに！

「へっぽこはいるかー！」

玄関をぶち破って目の据わったカーシャが乗り込んできた。

「ひっく……うつつ……飲み過ぎた」

少し赤ら顔のカーシャ。

足下がおぼつかないカーシャを慌ててルーファスが支えた。

「カーシャ大丈夫？」

「久しぶりに飲み過ぎた……体中が酒だ……うつつ、気持ち悪い」

「カーシャが酔うなんて珍しいんじゃない？」

「妾は酔っちゃいけないとでも……ひっく、ゆーのか！」

キツチンからセツがやって来た。

「お酒臭い。いい歳をした女がはしたない（しかもルーファス様にべたべたくつついて!）」

カーシャはルーファスの胸に顔を埋めた。

「うつつ……だって、だって妾の大事なペンダントが……絶賛行方不明中なのだ」

鼻をすすする音。

まさかカーシャが泣いている!?

「うそぴょん、泣いてないぴょん」

酔っていた。

フラフラ歩いたカーシャはソファに大腿を開いてドスンと腰掛けた。

「まあ聞け、あのペンダントはな……妾の思い出の品なのだ」

軽蔑の眼差しを向けていたセツが少し驚いた表情に変わった。

「（ただのジャイアニズムではなかったということ？）あれは本当にカーシャさんの所有物だったということですか、少なくとも

とも過去に？」

「だ〜か〜ら〜、妻の物だとさんざんゆーただろーがー。大事な物ではあつたんだがな、かくかくしかじかで質屋に預けて置いたら、流れてしまつて……そのまま売られて行方知れずに」つまり借金が返せなかつたからだ」と。

セツは溜め息をついた。

「大事な物だというから、感動話にでも展開するのかと思ひましたら、質屋にお金を貸して返せず大事な物を失うろくでもないひとの話ではありませんか。ただただ呆れるだけです」

セツはカーシャに近づいた。

「座るならしつかり座ってください、パンツ見えてますよ（ウサギ柄の）」

そう言いながらセツはカーシャの体を起こした。

ルーファスが目を丸くする。

その瞬間にルーファスは見逃さなかつた。

セツがああペンダントをカーシャのポケットに忍ばせたのを。

何気ない顔をしてセツがキッチンに歩き出す。

「水持つて来ます」

そのあとをルーファスが追つた。

「セツ」

「なんですかルーファス様？」

ルーファスはカーシャをチラ見してから、声を潜めてセツに耳打ちする。

「いいの？」

「なにがですか？」

「ペンダント」

「見ていらつしやったんですか。いいですよ、ホワイトムーンは世界に一つではないのですから。だってあの方、普段はあんなにも深さ酒なさないんでしょう？」

「かなりお酒に強いひとだから」

「なら、どんな思い出なのか野暮なことは聞きません」

「でもさ、借りるって話だったのに、これじゃあマズイよ」

「まあ、ルーファス様だったら野暮ですよ。あの双子にはお詫びの品でもわたくしのほうから匿名で送って起きますから心配なさらずに」

リビングのほうから叫び声が聞こえた。

「なぬーっ!？」

ルーファスとセツが振り返った。

もうペンダントを見つけたようだ。

「ナイス妾。いつの間にか小僧どもから奪い返していたのか…

…記憶にないが、ふふっ」

カーシャが笑った。

いつも妖しげな笑みしか浮かべないカーシャが、このときは冬から春が来たような微笑みを浮かべていた。

ペンダントを眺めながら。

「へっほこ祝い酒もってこ〜い！」

やっぱりカーシャはカーシャだったりする。